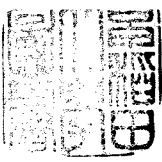


平成 10 年度文部省科学研究費
機関番号：32689
研究種目名：基盤研究 (C) (2)
課題番号：10610196

題目：現代社会における四国遍路道を巡る経験と 社会・文化的装置の関係に関する研究

2000 年 8 月

研究代表者：長田攻一
研究分担者：坂田正顕
早稲田大学道空間研究会
(早稲田大学文学部教授)



目 次

はじめに	1
第Ⅰ部 本研究の特徴とこれまでの経緯	
1. 空間の社会学と道の社会学	3
(1)位置を認識するための社会的時空秩序	3
(2)フィジカル空間構成と社会文化的構成物としての社会システム	4
(3) 道空間研究の課題	5
2. 現代社会における四国遍路道の特徴と本研究の意義	7
(1)巡礼の道の社会的特質	7
(2)四国遍路道の社会学	8
3. これまでのわれわれの研究経緯と成果	8
(1)現代四国遍路の社会・文化的装置(報告書)	9
(2)現代四国遍路道の立体空間的再構成(CD-ROM)	12
(3)現代の四国遍路者の道をめぐる経験(アンケート調査結果報告書)	13
第Ⅱ部 四国遍路道をめぐる習俗に関する社会学的研究	
1. 遍路道沿道習俗調査の目的と方法	16
(1)本調査の目的	16
(2)方法・対象地域の選定	16
(3)調査実施体制	16
(4)実施時期	17
(5)本研究の意義	17
2. 徳島県における遍路道沿道習俗—「お接待」を中心として—	18
(1)和歌山接待講	18
(2)生活改善グループの接待活動	27
(3)その他の小集団接待・地域接待	31
(4)個人接待	36
(5)善根宿	38
3. 高知県における遍路道沿道習俗—「お接待」を中心として—	41
(1)中土佐町長沢部落—そえみみず遍路道の「草刈り奉仕」—	42
(2)高知県におけるお接待の現状	44
(3)春野町根木谷部落—種間寺でのお接待—	45
(4)過去の遍路者、およびお接待について	46
(5)まとめ	50
4. 愛媛県における遍路道沿道習俗—「お接待」を中心として—	67
(1)内海村「トレッキング・ザ・空海」	67
(2)愛媛県喜多郡内子町「無料宿泊所」	73
(3)愛媛県喜多郡内子町「千人宿記念大師堂」	74
(4)まとめ	75
5. 香川県における遍路道沿道習俗—「お接待」を中心として—	76

(1) 国分寺町「四国の道を守る会」の遍路道の維持管理活動	76
(2) 長尾町におけるへんろ資料展示室開設の活動	93
(3) 長尾町における山頭火句碑建立の活動	100
(4) 長尾町沿道住民によるお接待	105
6. 総括：現代遍路道をめぐる遍路習俗の現況と今後の研究課題	109
(1) 本調査結果から得られたいくつかの発見と主な知見	109
(2) 今後の研究課題	111

はじめに

本研究は、物理的身体を持つ人間が、線的に長く続く道空間を利用する経験を通じて、社会文化をどのように構成し、また逆に社会文化的装置のあり方によって人間が道をどのようにデザインしまた利用しているかを社会的に考察しようとする試みである。より具体的に言うと、とくに高速文明化し消費文明化している現代社会において、毎年かなり多くの人が訪れる巡礼の道の一つである四国遍路道を取り上げて、実態的な調査を通じて以上のような「道をめぐる人間の経験」の内容を明らかにしていくことを基本的目的としている。

絹の道、塩の道、お茶の道など、モノとそれに伴う文化の移動や交流を中心に道の社会・文化的機能を問題にした研究、シュライバー『道の文化史』やルドルフスキー『人間のための街路』、あるいは前田卓『巡礼の社会学』など、道に関する人文科学的、歴史学的、社会学的研究の先駆的な業績、さらには道の形態と村落の形態との関係を地理学的にとらえた研究はあるが、従来の道の研究はともすれば、文化の側面か地理学的道の形態の何れかに関心が偏る傾向があったことは否めない。また、社会空間論においても、線的空間である道空間の社会秩序形成的意味や社会秩序分析の意味に注目した研究は少ない。その意味で、フィジカルな空間としての道と、その道を機能させその道によって機能している社会・文化的装置との関係を、道の経験に焦点を当てながら社会的にとらえようとする本研究は、従来の道研究の成果を踏まえながら、とくに道の文化的研究と地理学的研究とを相互に結びつけていく視点の一つを提供しようとともに、社会学における空間論・時間論の関係づけの発展にも貢献できる位置にある。また、とくに現代社会の中での四国遍路道を具体的研究対象として据えることにより、巡礼研究への現代社会論的視点からの研究の意義を喚起し、現代社会における巡礼の社会的意味と巡礼の歴史的研究との接合を図る視点を提供する位置にあることも重要である。

すでにこれまでのわれわれの研究において、四国遍路道の物理的形態を平面的な構成ばかりでなく上り下りを含む立体的空間構成として再構成し、とくに現代社会の車を中心とする舗装道路網の整備状況ならびに歩く道としての自然遊歩道の整備状況、四国八十八ヶ所霊場寺院の組織化とその活動、巡礼バス・タクシー等の運行状況、道路標識・休憩所・宿泊施設など遍路のための諸施設、遍路のための奉仕活動を行う民間グループとその活動などを、四国遍路道利用のための社会文化的装置として把握し、データベース化する試みを行ってきた。その一方で、そのような物理的・社会・文化的な装置としての四国遍路道を、実際に遍路をしている人びとがどのような動機を持ってどのように利用しており、またどのような経験をしているかを、遍路者自身への大規模なアンケート調査によって明らかにしようとしてきた。

今回の研究期間においては、これまでの成果を踏まえて、第1に遍路道の隠れた当事者である沿道住民および遍路関係者に対するインタビュー調査を実施して、道の文化を遍路とは逆の視点から捉え直し、前回調査結果と合わせて線的な社会関係の実態を立体的に叙述すること、第2に前回作成した遍路道データベースと新たなデータを加工処理して遍路道に関するインターネットホームページ開設を試みること、第3に道空間研究への新たな視座展開に向けて、(1)坂東・秩父巡礼の道と四国遍路道の比較研究のためのパイロット調査を実施し、(2)これまで可能性を模索してきた巡礼・旅の道の国際比較研究に向けた調査研究枠組の具体的な検討を行うこと、を主な目的とする。上述の3つの目的のうち、第2のホームページの開設はすでに行われており、また第3の二つのパイロットスタディについては別の報告書が作成されている。本報告書では、このうち第1の遍路道沿道関

係者についての調査結果を中心にまとめてある。

2000年8月10日

研究代表者：長田攻一

研究分担者：坂田正顕

道空間研究会（2000年8月現在）

長田攻一、坂田正顕、入江正勝、鈴木無二、田所承己、藤沢由和、杉本昌昭、浅川泰宏

研究経費

平成10年度 1,900 千円

平成11年度 1,300 千円

計 3,200 千円

第 I 部 本研究の特徴とこれまでの経緯

1. 空間の社会学と道の社会学
2. 現代社会における四国遍路道の特徴と本研究の意義
3. これまでのわれわれの研究経緯と成果

第 I 部 本研究の特徴とこれまでの経緯

長田攻一

1. 空間の社会学と道の社会学

(1) 位置を認識するための社会的時空秩序

近代社会においては、われわれは空間ははじめから物理的世界や生物世界を包み込む均質的な容器であるかのように感じる一方、過去から現在を経て未来に至る均質的時間軸に沿ってその空間が変化していくかのような空間の観念に慣らされてきた。しかしそのような時空観念は近代社会に特有な社会的構成物の一つであるにすぎないことは、これまでの多くの哲学的考察が明らかにしてきたことである。それらの議論がいかに抽象的かつ難解であるにしても、空間についての社会学的考察は、時間の場合と同様、それが社会的に構成されるものであることを踏まえないわけにはいかない。しかしそのことを前提にしつつ、人間の行為が物理的な環境によって支えられている身体を通して行われる側面に注目するならば、人間の構成する空間において、身体が直接占める場所としてのフィジカルな空間の次元と、個人を社会的に分類し集合的な行動単位として認識させるような一定の境界をもった社会空間の次元、さらには夢や想像の世界、科学や文学の世界とを便宜的に区別する必要がある。

われわれはそれらの異質な空間を多角的に経験しながら生活を営んでいるのであるが、本研究でとくに注目するのは、フィジカルな空間と社会・文化的空間の関係である。ここでフィジカルな空間と呼ぶのは、かならずしも地表や海上のみを意味するものではなく、空中、水中、地中などの物理的環境一般を指しており、身体相互のあるいは身体と外界との接触を直接経験できる立体的空間を含むものである。しかしそれは均質な性質を持つ幾何学的な 3 次元空間を意味するものではなく、記号空間として観念される社会・文化的空間の諸条件によって、また行為者としての人間の感覚的・心理的諸条件によって、その広がり、方向性、位置座標が変化しうるような空間を指している。これに対して社会・文化的空間とは、一般に「社会、集団、組織」などと呼ばれているような空間的広がりを意味し、直接フィジカルには触知できないような記号的構築物であるが、やはり一定の広がりや内部の分節を含むものであり、しかも具体的にフィジカルな身体を持つ人びとの社会的相互作用において、またフィジカルな建築物や部屋、印刷された書籍や文書、さらにはコンピュータや通信機器などを生み出したりその助けを借りて構成され、再構成されるものである。一般に「社会」や「集団」という語を用いる場合、われわれはフィジカルな場所を占め、フィジカルなモノを含むものとして両者を混同したり一体のものとして扱うことが多く、両者の空間を分析的に分けてその関係を改めて問題にすることは、一部の都市生態学の議論などを除けば概して少なかったように思われる。

空間が一定のフィジカルな場所を占め、その中心から一定範囲の広がりを持った容器としてイメージされるとき、その中心が個人であれ集合体であれ、人びとの身体や行動を位置づける座標軸が想定されている。たとえば、アリストテレスの空間観念は、等質的で無限に広がっているような数学的空間のようなものではなく、モノがもともと所有している場所でありそれが必然的に占める限

1 パーク、バージェスなど、シカゴ学派の都市論を想起。

界づけられた広がりという意味していた。このような「場の空間」と「容器としての空間」というアリストテレスの区別は、空間概念の基本的な認識次元をあらわしている²。場の空間は、身体を中心として、上下、前後、左右などの座標軸を意味するものであり、容器としての空間は、身体やモノが持っている広がりであり外部との境界を意味するものである。そのような位置づけのための座標軸は、異なる文化を持ち時代を異にする社会に応じて歴史的に多様に構成されてきた³としても、近代社会は標準化された共通の座標軸をそれら多様な空間の座標軸の上に重ね合わせ、それを一元的に処理する方法を開発してきた。たとえば、ある場所を起点からの距離によって表示したり、距離を鉄道や自動車などの所要時間で表示する工夫は、本来の異質な境界と性格を持った空間に均質な性格を付与し、実際に鉄道や道路の建設は、異なる地域社会空間の均質化を推し進めていった⁴。

したがって、空間をとらえる際にわれわれは、水平的、垂直的、面的、線的、距離、幅、面積、体積などの幾何学的概念を持ってイメージすることが多い。しかしながらフィジカルな空間であれ社会・文化空間であれ、それらが社会的に構成されたものであることを踏まえつつ、フィジカルな空間と社会・文化的空間を分析的に分離し、相互の関係を再考する際に、それらの均質的幾何学的概念枠組みを便宜的に利用することにより、逆にそれぞれの空間自体の持っている異質性が浮き彫りにされてくるに違いない。

(2) フィジカル空間構成と社会文化的空間構成物としての社会システム

フィジカルな身体を持つ人間は、それほど簡単にフィジカルな空間への依存を超越することはできない。身体を持つ人間がフィジカルな空間を占有する二つの主要な形態は、「住まうこと」と「移動すること」である。その二つは、ルーティンな生活形態の基本型（定住と漂泊）を含むとともに、定住のための生産消費活動および漂泊の活動すべてに関わる空間の利用を含むものである。その二つの形態は、地表を基準にすれば「面的空間」と「線的空間」に分けることができる。これは、社会・文化空間における地位や階層の概念のように、垂直的、水平的座標軸という3次元イメージよりも、2次元空間イメージに近い。空間が本来立体構成的なものであることを前提にすれば、面的空間も線的空間も立体的空間の一次元にすぎないのであるが、平面という二次元空間イメージがとくに重視されてきたのは、身体を持つ人間経験の基盤が、本来地表における平面という二次元空間に置かれてきたからであると思われる。「線的空間」は、「点的空間」とともに平面空間の一次元をあらわすものであるが、ここでは、線的空間によって分節された狭義の「面的空間」を「線的空間」、「点的空間」とともに、平面空間の下位概念として扱うことにしたい⁵。

面的空間が上下よりも前後、左右の方向を持った広がりにおいて経験されるのに対し、線的空間はその広がりがある限定された幅を持って帯状の形態として構成され、移動する人間の行動によって構成されたり、人間の行動を移動を中心とする形態に水路づける働きをする。現代社会においては、フィジカルな空間に限定しても、自然の山や溪谷など引き合いに出すまでもなく、テニスコートのようないわゆる純粋平面はむしろ例外であるばかりでなく、高層建築や高速道路インターチェンジに見るように面的空間も線的空間も立体的な構成をとっており、二次元空間的イメージではと

² O・F・ボルノウ（大塚恵一、池川健司、中村浩平訳）『人間と空間』せりか書房、1978、27-31頁

³ 同書、45-76頁

⁴ 同書、97-98頁

らえきれない。それぞれの次元を異にする平面が多層的に構成され、エレベーターやエスカレーターなどのスイッチング・メカニズムを縦横に組み込んだ現代都市のフィジカルな空間構成や遊園地けるジェットコースターなどは、メビウスの帯のようにわれわれの空間経験を錯覚させる。

このような状況においても、抽象的な分節概念である「面的空間」と「線的空間」という便な区別を採用し、その相違に注目して現代社会の空間構成の特質を考察することにはそれなり味があると思われる。それは、面的広がりを持った場としての土地空間が町や集落といった空間観念のフィジカルな基盤として具体的にイメージされてきたとともに、それらをつなぐ線的として「道」や「道路」という観念が歴史的に構成されてきたからであり、その観念は現代社会も日常生活や都市計画、社会政策において十分意味を持つからである一方、面的空間と線の空間関係についての社会学的意味はほとんど考察されてこなかったからである。

ここでは、「面的空間」および「線的空間」という幾何学的かつ均質な性質をもった抽象的概念を、地理学、生態学、社会学などで用いる自然環境やフィジカルな社会環境をとらえる諸を空間論的に変換したり分類したりするための概念として、すなわち立体的厚みと質的違いを具体的フィジカル空間を便宜的に区別するための分析用具として用いることにしたい。そしてとくに問題にするのは、線的空間の代表としてのフィジカルな「道」空間とそれを媒介とし立する社会・文化空間との関係である。道空間に注目するのは、第一に、それが面的空間に比社会学的考察の対象となることが少なかったこと、第二に、社会・文化的空間の構成をフィジカルな次元での道空間と分析的に切り離し改めて関連づける試みは、これまでほとんど見られなかつたこと、第三に、時間と切り離すことのできない空間についての社会学的考察には、線的に長くことによって人間の移動を促す道空間は、時間概念との関係を考察する上で戦略的に重要な意味を持つこと、第四に、道空間の現代社会における機能やその意味がとくに車社会化、情報化による大きく変化してきているにもかかわらず、それについての社会学的考察がほとんどなされていこと、第五に、現実の社会の中に息づいている「道の文化」を掘り起こすことにより、道をめ人間経験の多様性の観点から現代社会を批判的に評価する社会学的試みはほとんどみられないなどを理由としてあげることができよう。

(3)道空間研究の課題

道空間の社会学は、今回の調査の目的との関連で、どのような課題を担うといえるであろう。ここでは、さしあたりそれを、①フィジカル空間としての道の形態的特質を明らかにする枠組整理すること、②道をめぐる社会関係の観点からの社会空間ないし社会システムを描出すること③道をめぐる習俗や文化の解明（ないしは蓄積された民俗学的データの整理）を通じて、それ道のフィジカルな空間形態や社会空間とを関連づけること、の3つを挙げておこう。これらは空間をフィジカルな空間と社会空間の関係からとらえてみるという本研究の立場からもっとも的な課題であると思われる。

a.フィジカル空間としての道の形態的特質の把握

身体を持つ人間が移動を通じて定住生活を相対化することで自らのフィジカル空間での位置確認し、それを媒介として社会空間での社会生活における個人の行動や集団の行動を営むため

⁵ 坂田正顕「道と空間」、秋元律郎、坂田正顕編著『現代社会と人間』学文社、1999、第1

標軸として、「道」は「住まい」とともにきわめて重要な役割を果たしてきた。「道」は、線的に長く続く特殊な空間を構成し、直線的、曲線的、上り下り、幅広、狭小、舗装、砂利道などの幾何学的、物理的形態や、海辺、山辺、街中、田園などの地理的、社会生態学的形態など、人間経験にさまざまな刺激を与えるフィジカルな形態的バリエーションに満ちている。もちろん、「道」の意味は「移動」に特化されているわけではなく、とくに日本の道は面的空間としての沿道社会空間と相互浸透的であることが指摘されている⁶。人は道を使って目的地に移動したり、道端に店を開いたり、市を立てたり、御輿を担いで練り歩いたり道をふさいでの舞台をしつらえたり、マラソンやウォークラリーなどを開催したりと、社会生活の様式に応じたさまざまな利用形態が見られる。それは、沿道の自然的条件、道のデザイン、沿道の人工的建築物、社会的・文化的条件、他の道との接続関係、それらを取りまく社会文化的背景、さらには時代の移り変わりなどの条件によって大きく変わってくるにちがいない。

「道」の形態的バリエーションに応じて社会関係や文化のあり方は大きく異なってくる一方、社会や文化の特質によって道の形態や道の利用形態の意味づけが異なってくるというように、道空間と社会・文化的空間との関係は相互媒介的である。また E・デュルケム⁷に準拠していえば、道空間を含むフィジカル空間構成は社会・文化的空間の反映であるということもできよう。しかしながら、「道」の自然を含むフィジカルな空間としての側面と社会・文化的構成物としての側面は、つねにそれを利用する人間のフィジカルな身体を媒介として結びつけられ一体化しているのであり、道は、行き交う人びとの相互のおよび道行く人びととその沿道に居住する人びとや自然との交流を含む経験によって構成され再構成されるのである。

b. 線的空間をめぐる社会関係

先に便宜的に区別した、点的空間、線的空間、面的空間の3つの各タイプの空間は、人びとが自らの行動を選択する過程で構成され、また逆に人びとの行動を水路づける働きを持っている。人びとのそのような行動は、社会空間としての組織形態ばかりでなく、フィジカルな空間形態に沿ってパターン化されてくることに注目すべきである。坂田正顕は、点的空間、線的空間、面的空間の概念的区別を踏まえて、それぞれのタイプの空間を利用する社会的主体（すなわち沿道主体、移動主体）間に成立する社会関係を類型化する試みを行っている⁸。具体的な個人はそのようにして社会的にカテゴリー化された行動パターンによって、自らを移動者（歩行者、自動車の運転手や同乗者、バスや列車の乗客など）、定住者（沿道住民、さまざまな商店経営者、公共機関従事者、企業や組織のメンバー、礼所霊場会組織メンバーなど）としてアイデンティファイし、それぞれの間で、協同的社会関係、対立的社会関係を結ぶことになる。

道が社会的に構成される過程を、坂田にならって、道の開設、道の利用、道の維持管理、道の閉鎖などの位相に区分するならば、それぞれの位相に応じて、定住者同士、移動者と定住者間、移動

⁶ O・ベルク（宮原 信訳）『空間の日本文化』筑摩書房、1985

⁷ E・デュルケム、M・モース（山内貴美夫訳）『人類と論理一分類の原初的諸形態』せりか書房、1969、147-160頁、E・デュルケム（古野清人訳）『宗教生活の原初形態』岩波書店、1975

⁸ 坂田正顕「道空間の社会学序説—線的社会関係と四国遍路道空間」『関東学院大学文学部紀要 第73号』、1994、19-41頁。また、坂田は別のところで「現代社会の空間舞台は、巨視的に見て産業社会の主役であった企業のような組織的な点的空間から、街路や空路での社会過程のような流動的な線的空間にその比重を移しつつある」と述べている（坂田正顕、1999、前掲書、203-204頁）。

者同士の間には、異なった社会関係が生み出される可能性が生じてこよう。たとえば、道の開設をめぐって、計画路線内や周辺の住民と道路管理者の間や、沿道居住者同士の間には、対立関係も生じるであろうが、すでに開設された道が利用される位相においては、沿道商店と移動者間の社会関係は概して協同的關係を構成するであろう。また、車の利用者と沿道住民の間には排ガスや騒音などにより対立が生じる可能性もある。また、移動者相互の間にも協同的な関係も生まれれば、その移動手段の違いによっては、対立的関係をも生み出す可能性がある。

c.道をめぐる習俗・文化

沿道に店が建ち並ぶ道や、自然の中を分け入るような道を等身大の人間が歩く速さで移動する場合、自然の息遣いを直接感じたり、上り下りの厳しさに喘いだり、人びととの交流が生まれ、異質の文化や伝統との接触が起こるなど、移動経験は新たな社会関係や文化を活性化させる可能性があり、道をめぐる経験自体が豊かに広がってくるのが考えられる。それらの経験は、移動者ばかりでなく、沿道に位置する人びととの社会関係を通じてさまざまな道をめぐる習俗を育み堆積していくに違いない。これらの習俗は、道をめぐる社会関係そのものを安定させ維持する重要な機能を果たし、道の文化を成立させると考えることができる。道の文化は、道をめぐる社会関係の質的相違をさらに詳細に分析する必要性を示唆する。たとえば、四国遍路に見られる「お接待」の習俗などは、先の「協同的關係」、「対立的關係」といった社会学的概念による分析の他に、現代における「遍路社会」とも呼ぶべき社会・文化的装置の再生産という文脈においても分析される必要がある。遍路と沿道住民、遍路同士、遍路と霊場関係者の間に生成される社会関係は、そのような社会・文化的装置を文脈として初めて了解しうるものだからである。

他方、現代社会のように車の発達した時代においては、道の利用の主体が歩行者から自動車に移行してくるのに対応して、道は目的地に早く到着するために克服されるべき距離空間として経験されたり、高速に快適に移動するための空間として経験され、高速道路に見るように道自体もそのようにデザインされるに至る。また、そのようなデザインが困難な一般道路では、交通混雑や渋滞のいらいら、信号や標識による交通秩序の遵守義務、歩行者との共存によるストレスなど、車社会での道特有の経験が観察される。高速道路の機能性や効率性は、現代の道の文化の一側面をなすともいえよう。しかしながらその反面では、歩行者や人力車程度のスピードの移動によって可能になっていた道をめぐる豊かな経験と習俗の多くが排除され忘れられていくことも事実である。これらの事態が、道をめぐる社会関係の質をどのように変容せしめ、いかなる問題を投げかけることになるかを問うことも、道の社会学の重要な課題の一つであろう。

2. 現代社会における四国遍路道の特質と本研究の意義

(1)巡礼の道の社会的特質

現代の人間社会における道の経験的意味を具体的に見ていく上で格好な例は、「巡礼の道」である。「巡礼の道」は、第一に、身体を支え自らの存在を確認することのできるフィジカルな性質を持ち、第二に、水平的・垂直的紆余曲折を含みつつ細く長く続く線の空間として、社会文化構成的に重要な意義を持つ道の基本形態をすべて内包する「立体的道空間構成」の典型をなしている。第三に、基本的に「聖地」を巡る道として宗教的シンボリズムに支えられることによって日常性から脱出し再び日常性へと回帰する機会を与えてくれるという意味で、社会や個人の再生を可能にする特

有の機能を果たしている。第四に、そのことを通じて、悩みや悲しみを癒す社会的浄化装置、人の成長を承認する通過儀礼など、いわゆる「旅」のもつ普遍的社会的機能の原点ともいべき位置を占めている。第五に、歴史的に見ても、巡礼者を媒介とする異質なもの同士の社会的交渉の契機となってきた。これらから「巡礼の道」は、道の経験そのものを豊かにし、道特有の文化を培ってきたのであり、現代社会における道の社会学的研究にさまざまなヒントと糸口を与えてくれる可能性を秘めている。

そこで本研究では、日本における巡礼の道の代表として「四国遍路道」を取り上げる。そして、遍路をする人びとの経験の意味を、遍路道のフィジカルな空間構成と社会・文化的装置という社会空間との関係に注目して明らかにしていくことを究極的課題としている。ただし、本研究はそのような課題の一部を担うものであり、われわれのこれまでの研究成果に新たな成果を付け加えるものである。その位置づけを明確にするために、われわれのこれまでの研究の経緯をその背景として説明しておく必要がある。

(2) 四国遍路道の社会学

日本における巡礼の道の代表の一つである四国遍路道は、①島の周囲を立体空間的に円環をなして右回りに巡る道であること、②四国の性格の異なる4県をつなぐ道であり、③車の道や歩く道など各種の形態の交錯する道、④利便化しながらも上下の起伏に富みひたすら長く迷いやすい苦行の道、⑤「接待」の慣習に見られるような沿道社会と文化が存続している道、⑥自然や宗教と伝統に支えられた非日常的雰囲気がある道、⑦社会の急激な変化に応じて形を変えながら今日でも多くの人がさまざまな動機で全国から繰り返し訪れるなど、さまざまな豊かな要素を併せ持つ道であり、研究対象としてふさわしいといえよう。

このような四国遍路経験は、遍路道が右回りであるとか、通し打ちであるか区切り打ちであるか、順打ちであるか逆打ちであるかといった平面的構成のみならず、上り下りなどの垂直的移動による立体的空間構成を持っていることに注目し、これが遍路経験にどのように反映するかについて考えてみる試みはまだされていないように思われる。このような巡礼の道の経験が現代の社会関係にどのように反映したり、逆にこれがどのような価値観や社会関係によって要請されるのか、またその過程で道の経験の豊かさの質や機能がどのように変化してきたかを明らかにすることは、現代社会そのものの特質を探る上できわめて重要である。

3. これまでのわれわれの研究経緯と成果

われわれは以上のような観点からこれまで2回におよぶ早稲田大学特定課題共同研究において、日本の特性を色濃く持つ四国遍路道とその巡礼文化を研究事例に選定し、道空間の社会学的調査研究を実施してきた。これまでの研究において、四国遍路道の物理的形態を平面的な構成ばかりでなく上り下りを含む立体的空間構成として再構成し、とくに現代社会の車を中心とする舗装道路網の整備状況ならびに歩く道としての自然遊歩道の整備状況、四国八十八ヶ所霊場寺院の組織化とその活動、巡礼バス・タクシー等の運行状況、道路標識・休憩所・宿泊施設など遍路のための諸施設、遍路のための奉仕活動を行う民間グループとその活動などを、四国遍路道利用のための社会文化的装置として把握し、「四国遍路社会」の基本的様相を明らかにしてきた。その一方で、そのようなフ

ィジカル空間としての遍路道、遍路道を取り巻く社会・文化的な装置としての四国遍路社会を、実際に遍路をしている人びとがどのように利用し、またどのような経験をしているかを、遍路自身への大規模なアンケート調査によって明らかにしようとしてきた。

(1)現代四国遍路の社会・文化的装置（報告書）

まず第1次研究（1991・1992年度、早稲田大学特定課題共同研究「現代社会における「道」空間の社会文化的意味に関する研究」では、主に遍路道と遍路習俗に関わる主な社会的エージェント、すなわち四国八十八カ所霊場会といくつかの霊場寺院、伊予鉄道、琴讃バス、各県土木課・道路建設課および自然保護課、建設省四国地方建設局、日本道路公団、各県観光課、各県新聞社、へんろみち保存協会などの代表者、役員、担当者へのヒアリング調査を通じて、遍路道自体の現代社会における再生産のメカニズム、遍路道をめぐる現代の社会・文化的装置の特質を明らかにすることを通じて、車社会になった現代日本において遍路道が提起する諸問題の概容を明らかにした。また、四国遍路に関連する文献資料の詳細なデータベースを作成した⁹。その内容の詳細は同報告書に譲るが、その要点のいくつかについて要約しておく。

現在の四国遍路社会を構成している基本的エージェントとして、まず八十八カ所の札所が組織している「四国八十八カ所札所霊場会」があり、間接的ないし直接的に遍路道の維持・再生産をつかさどっている道路行政組織、民間団体がある。さらには、道路整備と自動車の普及とともに遍路のための順拝バスを商品化してきたバス会社、またこれに準ずる順拝タクシー、巡礼者の順拝用品や各種関連用品の供給と販売などを行う企業組織があり、遍路者を泊める宿坊、民宿、ホテルなどの宿泊施設施設供給者、トイレや駐車場の管理などを行う諸エージェント、沿道や札所寺院において遍路を接待する沿道住民や出張接待の団体、そして最後に肝心の遍路自身が含まれる。まだこの他にも、霊場組織として弘法大師に縁の深い番外の寺によって組織されている「別格二十霊場会」、「四国曼荼羅霊場会」などの組織がある。また、遍路習俗に深い関心を示す郷土史研究者や民俗研究者、さらには巡礼一般の研究者なども含めてよいであろうし、遍路習俗の資料館の運営に携わっている各種機関、さらには遍路を梃子とした地域の町おこしなどの運動を支えるグループなども考慮に入れるならば、その範囲はかなりの広がりを見せよう。しかし、同報告書で扱ったのは、八十八カ所霊場会、道路および自然保護行政、バス会社、民間団体の4つである。

a. 霊場会組織

まず霊場会について要点をまとめよう。これは、正確な資料は残されていないが、ヒアリングによると戦後の復興が一段落し経済高度成長へと日本社会が転換を始める昭和30年代初めに組織されたと思われる。戦後の混乱期には衰退していた寺院や遍路の活動が少しずつ活発化してくると、遍路を迎える寺院の側でも納経の手続き、宿泊のための宿坊の整備などが求められ、これに応える形で組織されたものと推定される。調査当時の組織形態は、76番善通寺を総裁として、霊場会本部、事務局は、徳島、高知、愛媛、香川の4部会で4年ごとに持ち回りとなっている。各部会には、部会長1名、常務理事1名、理事2名の役員が置かれ、霊場会全体の事務を行っている。主な活動内容は、定例・臨時理事会の開催、公認先達選定、先達大会・研究会開催、講演会・講習会の開催、納経料・納経時間の設定、寺院施設（トイレ、駐車場など）の改善、ポスター・パンフレットの作

⁹ 道空間研究会編『現代社会と四国遍路道』早稲田大学道空間研究会、1994

成、伊予鉄道観光開発株式会社発行の『月刊へんろ』の監修、などである。この組織が先達の育成、認定を通じて、遍路の組織化と遍路文化の維持に果たしている役割は大きいといえよう。しかし、納経料や納経時間の一律の設定に関しては批判もあり、現代社会の時間的秩序への適応を余儀なくされる一方、古くからの遍路習俗を維持することを求められる霊場会にとって、課題も多い。また、八十八ヶ所霊場会とは別に、番外の霊場が集まって組織された「別格二十霊場会」や「四国曼荼羅霊場会」などが組織されていることも、現代の四国遍路社会の特質であろう。八十八ヶ所霊場の一部に組み込まれている寺院と組み込まれていない寺院の対抗関係が、同様の組織化によってのみ可能である現実が浮き彫りにされる。

b.行政と四国遍路道

次に、遍路道の維持と再生にもっとも貢献しているのは、現代社会においては、道路を建設したり維持管理に当たる行政である。しかし、行政が宗教的な道である遍路道を直接修復したり維持することは法律的に問題があるので、道路建設・維持の担当行政は、行政の施策として行いうる範囲でそれに貢献できるにすぎない。道路建設行政の中心である建設省の出先機関である四国地方建設局、県および市町村の道路建設課、道路保全課の目的は他の地域の場合と同様、一般国道、県道、市町村道などと認定された道路の建設・維持管理に当たることであり、たまたまそれが遍路にも利用されるのである。それはもっぱら自動車の通行を最優先させる施策であったのであり、それら一般道路の建設によって旧遍路道がそのままの形で維持される可能性はきわめて低いばかりか、旧遍路道が廃棄されたり見失われたりする可能性も高いといわなければならない。したがって、現代遍路は、それらの道路に見合った移手段を遍路の目的のために利用する形で現代社会に適応を余儀なくされてきたともいいうるのであり、順拝バス遍路の登場はその当然の帰結であった。

しかしながら、高度経済成長が行き詰まりを見せ、1970年代後半の低成長時代に入ると、自動車に席卷された道路から歩く道の復権を主張する立場が現われてくるとともに、環境行政による長距離自然歩道の整備が行われはじめる。四国の場合は、1978年より「四国のみち」という名称での自然歩道整備の準備が行われるが、環境庁の施策と平行して建設省までが「四国のみち」づくりに参加していることに特徴がある。「四国のみち」は必ずしも遍路道とは重ならないが、旧遍路道や八十八ヶ所札所をかなりそのルートに取り込んでいる。環境庁ルートは自然志向、建設省ルートは歴史・文化志向というように役割分担をしている。環境庁ルートの場合は特別の予算がこれに割り当てられ、1981-1989年の間に完成するが、建設省ルートの場合にはほぼ同じ時期にスタートしながら1999年時点でまだ完成には至っていない。建設省ルートは、一般道路の建設予算のなかで、歩道整備のような形で付随的に標識や案内板、休憩所などの設置を行ったり、コースの案内パンレットの作成をしている。行政によるこのような徒歩のための道についての道路建設・維持事業によって、旧遍路道は部分的に再生されることになるが、それが行政の施策であることから安全や効率性が優先され、遊歩道としての道標や案内板が設置されるために、自ずから旧遍路道とは異なる意味を付与されるばかりでなく、新旧の標識が入り交じって人びとを混乱させる要因にもなっている。また、現代社会に適応した道として再生産される「遍路道」は、遍路経験そのものの内容をも変化させずにはおかない。しかし修行を求めて失われた旧遍路道を辿ろうとする人もいれば「四国のみち」を辿ろうとする人もいようし、路線バスや鉄道を利用したり、自転車やオートバイを利用しようとする人もいる。これによって、徒歩遍路にも車遍路にも多様な形態が分化してくることが予想される。

c. バス会社の順拝バス運行

1951年の道路運送法改正により「一般貸切自動車旅客自動車運送事業」として大型貸切バスの運行が法的に可能になると、大型乗合バスの運行事業を行っていたバス会社各社は、順拝バスによる遍路の企画を練りはじめる。その第一号は、1953年の伊予鉄バスに始まる。汽車や路線バスを乗り継いで行われていた当時の遍路は25日を要していたが、大型バスはこれを一挙に14泊15日までに短縮した。料金も13,500円で募集が行われたが、初めてのことであり予期しない問題から1日余計にかかり、13,600円が徴収された。その成功をきっかけに伊予鉄順拝バスはその後順調に伸び、1965年には、100台、弘法大師生誕1200年に当たる1973年前後に急激に増えて、1975年には600台、1985年には955台を数えるに至っている。その後、順拝バスは道路事情がよくなるのに対応して所要日数を短縮し、現在では11泊12日で全周するようになる一方では、利用者のライフスタイルに応じて、1回の順拝で1国ずつ区切り打ちで回る「1国参り」や、土曜や日曜のみ運行する「土曜遍路」、「日曜遍路」などを商品化するに至る。1国参りは、3泊4日で阿波、土佐、伊予、讃岐の各1国を回るのものであり、現代人の一般的国内旅行日程に合わせた区切り打ち遍路パックである。1国参りは江戸時代から盛んであるが、3泊4日で1人58,000円の遍路パックは時間的にも金銭的にもまさに現代遍路の条件にぴったりである。

しかしながら、近年では、大型バスの利用者が少しずつ減少する傾向にあり、そのかわりにマイクروبスやワゴン車、マイカーやタクシーなど、少人数でそれぞれのスケジュールに応じた回り方を選択するタイプの遍路が増えてきているという。また、2000年度5月の今治ルート開通による本四架橋の完成と四国内高速道路の整備によって、本州や北海道のバス会社の順拝バスが直接四国に入ってくるような状況も生まれている。さらには、1回で数ヶ寺ずつ日帰りして回るバスが運行されるようになって、多くの参加者が集まっているという。

d. 民間団体

遍路道の維持管理については、行政の道路建設・維持や道整備のほか、沿道住民その他の民間の人びとの努力があることを忘れてはならない。現代の遍路道がモータリゼーションの進展によって「通過する道」になっていることは否めない。また、本四架橋の完成と四国内高速道路の整備が進むにつれて、交通量が増え四国観光が活発になることは間違いのないにしても、これによって四国の本来の魅力が「素通り」されてしまう可能性も高まるに違いない。このことはさまざまな分野の人びとに危惧を抱かせた。車遍路においては道中修行よりも霊場修行が中心になっていることは、次に述べる遍路対象アンケートからも明らかであるが、四国の自然や古い町並み、人びとの交流など、道を媒介とした豊かな経験が見過ごされてしまう危険性についての認識は、行政の「四国のみち」整備の背景にもなっている。また、経済団体の一つである香川経済同友会が、1993年に発行した報告書『「ウォーキングアイランド四国」(迎る四国)計画の提言』も、このような観点から「観光地四国のポジショニング」として四国遍路道や金毘羅さんの伝統に注目し、遍路の魅力を「お遍路さんを受け入れてきた“お接待”=ホスピタリティの温かい心が息づいている」ところに求めている。このように遍路道を観光資源として再構成しようとする四国社会の一部の動きは、必然的に遍路道の現代社会的再構成を推し進めるに違いない。

しかしながら、これとは別に昔の遍路道を訪ね歩き、道の分岐点など迷いやすい要所要所に手製の道標を設置している民間団体がある。愛媛県松山市在住の宮崎建樹氏の主催する「へんろみち保

存協力会」がそれである。この団体の活動は、歩くことを原点とし道中修行を重視する本来の遍路に立ち戻るための意識改革、四国の復興発展への機運醸成、遍路みちしるべの設置、「四国へんろひとりあるきガイドブック」の制作、へんろ希望者へのガイドサービス（「へんろみち一緒に歩こう会」の主催）、草刈り奉仕活動の推進、閉塞・荒廃へんろ道の復元、へんろ宿の復元（各県1カ所の「へんろ道場」の開設）など、多岐にわたる。もちろんそのすべてではないがほとんどが実行されている。しかも団体名にはなっているが実質的に宮崎氏一人が中心になって行っているのである。とくに、道しるべの設置、ひとりあるきガイドブックは有名であり、今日の歩き遍路のほとんどがそのお世話になっている。また、最近では手製のへんろみちしるべのほか、有志による寄付を募り立派な石柱で「平成遍路石」を建立する事業にも力を尽くしている。また、「へんろみち一緒に歩こう会」の開催は、1991年から1999年まで続けられ、毎年多数の人びとがそれに参加した。旧へんろ道の草刈り奉仕、荒廃へんろ道の復元などに関しても、かなりの実績があり、1999年には八十八カ所霊場会により先達の資格を与えられている。この団体の場合は、旧遍路道と歩く遍路へのこだわりが強く、現代社会において遍路そのものを実践するための案内に徹しようとする点で、先の香川経済同友会の志向と完全に重なり合うわけではない。ただし、宮崎氏が活動項目の2つめに挙げている「四国の復興発展への機運醸成」は、香川経済同友会の考え方に沿うものであり、両者の活動が一体化する可能性を秘めている。2000年に入って、四国各県で「四国遍路」を世界遺産に登録しようという気運が高まりつつあるが、八十八カ所霊場会をも含みこれら各団体の間に活発なやり取りが行われるようになってきている。その結果がどのような方向を辿るのかを見極めることも、四国遍路道の社会学の重要な課題であろう。

以上のさまざまな社会的エージェントの間には、相互に対立やコンフリクトを含みながらも、共同関係を中心とするさまざまな社会関係が生み出され、全体としてある程度持続的で安定した四国遍路社会が構成されていることが見えてきたといえよう。しかしながら、それらによって描き出される四国遍路社会が、さまざまな別の目的を持って利用される道空間を、「遍路道」あるいは「へんろ道」や「辺路道」として意味づけ、その意味を再生産していくために、その他の目的を持って同じ空間を利用するその他の社会的エージェントとの社会関係をどのように築いているのかが明らかにされる必要がある。今回の調査の段階ではそこまでを射程に入れることはできなかった。今後の課題である。

(2)現代四国遍路道の立体空間的再構成 (CD-ROM)

以上、四国遍路道をめぐる社会・文化的装置を、遍路道を取り巻く社会的エージェントに注目しながらその概略を見てきた。その記述には、最初の報告書でまとめられた後に現われた動きについても触れられているが、いずれにしてもこの段階では、遍路道の形態的特質、および遍路道を取り巻くエージェントの最大の主役である遍路自身が含まれていない。

まず、遍路道については、その後、1997年度には、道の物理的形態や付随するさまざまな施設やサービス（休憩所、案内所、道標、標識、ポスター、道路の舗装状況や歩道整備状況、宿望、旅館・ホテルなど）についてインテンシヴにフィールドワークを実施する一方、2万5千分の1の地図を用いて遍路道を車道と歩道の両方に分けて書き込み、1キロメートルごとの標高をデータにとりデータベース化した。そのデータは、それだけでも充分利用価値はあると思われるが、八十八ヶ所霊場ばかりでなくそれに含まれない弘法大師縁の寺や場所についての写真やビデオ映像と解説とと

もに、CD-ROM データベースにまとめる作業を行ない、1998年5月に完成させた¹⁰。そのデータベースには、大量観察による現代遍路アンケート調査の結果をも盛り込んだものであり、遍路道と八十八カ所霊場を中心とした詳細なデータベースであるにとどまらず、アンケート調査結果をも参考にしながら遍路道を移動手段を変えて疑似体験できるようなユニークなタイプのデータベースになっている。ここでは、それについては省略せざるを得ない。

次に、遍路者自身の遍路道の経験についてであるが、以上見たような遍路道を取り巻く社会・文化的装置の特質を背景として、遍路道を利用する遍路自体の経験を分析するために1995年度より新たに研究費の申請をして第2次調査に着手した。

(3)現代の四国遍路者の道をめぐる経験（アンケート調査結果報告書）

第2次研究（1995・1996年度、早稲田大学特定課題共同研究「現代社会における「道」空間の社会文化的意味に関する研究」）においては、前回のインタビュー調査においては充分にとらえられなかった遍路自身の経験をとらえるための比較的大規模なアンケート調査を企画し、1996年4月から5月にかけて、宿坊のある16カ所の札所寺院（1カ所のみ寺院横にある民宿に依頼）の協力を得て実施した（集計対象1,237件）。アンケート調査の結果はすでに調査報告書¹¹にまとめられている。

詳細は同報告書に譲るが、調査項目としては、起点札所と終点札所、順打ち／逆打ち、通し打ち／区切り打ちなどの回り方、団体遍路と個人遍路の区別、先達の有無、遍路日数、遍路費用、所持品、移動手段の形態、遍路の動機、遍路に出かけるきっかけ、充実感、遍路全体に関する困難経験、道に関する困難経験、遍路道についての考え方、年齢・性別・職業、などの基本属性、信仰する宗教、現住地、四国との関わりなどである。

まず「移動手段」について明らかにされたことは、現代の遍路の78.9%が車遍路であり、10.8%が徒歩遍路であること、またそれ以外に徒歩中心でありながら電車やバスを併用するタイプが5.0%、車中心でありながら部分的に歩くタイプ3.5%などが残りを占めていることであるが、その他に自転車遍路、オートバイ遍路、マイカー遍路、タクシー遍路など、移動手段が多様化していることも目についた。次に、回り方については71.3%が区切り打ち、27.7%が通し打ちであること、88.8%が順打ち、7.8%が逆打ちであること、徒歩遍路の方にむしろ通し打ちが多く、現代遍路の大半は車による区切り打ちであることなどが明らかにされた。

さらに、「動機」、「充実感」については、車遍路と徒歩遍路にかなり明瞭な違いが見られる。動機については全般的に先祖・死者供養が多いが、家内安全、信仰・修行、病気の治癒は車遍路の方に多く、精神修養、沿道や見知らぬ人との交流は徒歩遍路に多い。また、充実感については、車遍路の場合には、霊場でお参りをしているとき、結願をしたとき、などが多いのに対し、徒歩遍路の場合には、霊場の山門に着いたとき、お接待や親切に触れたとき、などが目立って多く、車遍路の場合には、霊場でお参りのように点的空間での経験が充実感を構成する焦点となっているのに対して、徒歩遍路の場合には線的空間としての道そのものの経験に充実感を感じる傾向が強いのである。車遍路の場合で結願したときが高い数値を示しているのは、たしかに車遍路の場合にも線的空間

¹⁰ 早稲田大学文学部編（長田攻一・坂田正顕監修）CD-ROM『現代に生きる四国遍路道』日本図書センター、1998年

¹¹ 道空間研究会編『遍路と遍路道に関する意識調査』早稲田大学道空間研究会、1997

間経験が最後の寺で充実感として集約されるのがみてとれるが、徒歩遍路の場合には、各札所に着いたときの感激が車遍路の場合よりも相対的に大きくなることは理解できる。

「遍路に関する難儀」についての結果を見ると、まず車遍路では、困ったことはない、という回答が圧倒的に多く、徒歩遍路では、荷物が多すぎた、宿坊が少ない・快適でない、が多く、「遍路道に関する難儀」を見ると、車遍路の場合には、道が狭い、道路標識が少ない、が多く、徒歩遍路では、道しるべがなくて困った、が多くなっている。それぞれの移動手段に応じた道路の形態についての困難が指摘されているといえよう。

最後に、現代遍路の大きな特性である移動手段の車化・合理化に関連する問題について遍路自身がどのような認識を持っているのかについて調査結果を概観しておこう。「遍路は徒歩による道中修行にこそ本来の意味がある」という意見に対して「大いにそう思う」と回答した人の割合は42.1%。「ある程度そう思う」と回答した人の割合は31.3%で、両者を合わせると73.4%となり、ほぼ4分の3弱の回答者が遍路における「徒歩」による道中修行に意味を認めていることになり、車遍路が本調査でも約8割を占めながらも、徒歩遍路による道中修行については全体の7割強の遍路がその本来の意義を認めている点は重要である。

しかしながら、「車遍路は、現代の社会では、時間・費用・体力の点から見て現実的で合理的である」という意見に対して「大いにそう思う」と回答した人の割合は26.9%、「ある程度そう思う」と回答した人の割合は47.7%、両者を合わせると74.6%となり、この質問に関しても同様にほぼ4分の3の回答者が現代における「車遍路」をそれなりに合理的なものとしてとらえているのである。

上記両質問への肯定的回答者がそれぞれ7割を超えるほど多いことは、同じ人物が両意見に肯定的回答をしているケースがかなり多いことを意味し、この結果は一見矛盾しているように見える。だがこのような回答結果の背後には、理想としては徒歩で回りたいが、現実には時間や費用の問題、あるいは高年齢や身体の状態からで車で回らざるを得ないという、理想と現実のギャップを読み取ることもできるし、自分は徒歩で回るが車でしか移動できない人が遍路に出られるようになったことは歓迎すべきだと思う、というように、正統性の順位づけは最終的に消えないにしても条件の違いに応じた多様な回り方を尊重する考え方を読み取ることもできるのである。このような理想と現実の乖離や、異なる移動手段に対する相互尊重は、現代遍路に特有であると考えられるのであり、このような多様な回り方を許容する現代遍路社会における道のあり方を模索することが求められているといえよう。

第Ⅱ部 四国遍路道をめぐる習俗に関する社会学的研究

1. 遍路道沿道習俗調査の目的と方法
2. 徳島県における遍路道沿道習俗—「お接待」を中心として—
3. 高知県における遍路道沿道習俗—「お接待」を中心として—
4. 愛媛県における遍路道沿道習俗—「お接待」を中心として—
5. 香川県における遍路道沿道習俗—「お接待」を中心として—
6. 現代遍路道をめぐる遍路習俗の現況と今後の研究課題（総括）

第Ⅱ部 四国遍路道をめぐる習俗に関する社会学的研究

1. 遍路道沿道地域習俗調査の目的と方法

今回の調査は、以上のようなこれまでの研究の経緯を踏まえて、それらと共通の枠組みの中に位置づけられ、新たな知見を付加することによって、「四国遍路道をめぐる経験と社会・文化的装置の関係」についての知見を深めるとともに、道空間の社会学そのものへの貢献を目指すものである。

(1)本調査の目的

今回の研究は、1998-1999年の研究期間に行われたものであり、その大まかな目的は、遍路道の沿道で遍路を迎える人びとや団体の活動を調査することにより、四国遍路道をめぐる経験と社会・文化的装置の関係についての知見を付け加えるところにある。とくに遍路者の遍路道における経験の内容を、遍路道沿いで古くからの遍路習俗である「お接待」を行ったり、草刈りや道の清掃を通じて遍路のための奉仕的な活動を行っている人びとが、遍路道の社会・文化装置の一部としてどのような位置を占めており、またそれらの活動が、どのような遍路道空間との関係において行われ、遍路者ならびにそれらの活動をする人びと自身にとっていかなる経験的意味を持つのか、などについて明らかにすることが目的である。

(2)方法・対象地域の選定

四国遍路道は1,200kmを超える長い道程であり、しかも必ずしも1本の道ではなくところによって何コースにも枝別れしている場合すらある。このような遍路道全体について沿道の住民の対遍路ないし遍路道に関する活動が見られるわけではないし、またそれらの活動をすべて拾い上げて調査をすることはわれわれの組織体制では不可能に近い。そこで、便宜的ではあるがわれわれスタッフが四国4県を1県ずつ分担して担当し、それぞれの県内での情報収集を通じて、対象地域の選定を行った。

方法は、当初の計画では沿道地域住民を対象とするアンケート調査を考えていたが、各県地域でのヒアリングによる情報収集の段階で、方向転換を余儀なくされた。その理由は、第一に、かならずしも沿道地域住民一般に遍路に対する関心が高いとはいえず、「お接待」その他の活動をしている人びともかなり限られていること、第二に、地域によってお接待その他の活動形態もかなり異なり、一律のアンケート調査ではそれぞれの形態についての実態を把握しうるようなデータ収集は困難であること、第三に、現在においても出張接待などのように一年の特定時期に四国以外の地域から四国にやってきて遍路のための活動をするグループもあり、地域住民のアンケート調査では把握しきれないケースがあることなどが明らかになったからであり、それぞれの活動形態に応じた詳細なヒアリング調査と資料收拾に努め事例研究のスタイルをとることとした。

(3)調査実施体制

早稲田大学道空間研究会のメンバー、総勢7名で次のような地域分担を行い、現地調査にあたった。

徳島県：田所承己

高知県：入江正勝、鈴木無二

愛媛県：杉本昌昭、藤沢由和

香川県：坂田正顕、長田攻一

(4)実施時期

調査実施時期は、1998年4月～1999年3月に第1期調査を行い、調査対象となる地域の選定を行った。その過程で収集した資料、データも含め、1999年4月～2000年3月にかけて、本調査および補足調査を実施し、2000年4月～8月にかけてデータ分析と報告書のまとめを行った。

(5)本研究の意義

とくに今回の研究期間においては、(1)「お接待」に関する以外はほとんど体系的な調査がなされていない沿道住民を中心とする対遍路ないし遍路道関連活動調査を実施することにより、道の文化の重要な部分をなす現代における遍路道沿いの多様な活動の実態を把握できる。(2)これまでの調査結果と突き合わせることで現代四国遍路の主要な社会的エージェントがおりなす遍路道文化についての立体的で総合的な認識を可能にする。(3)「巡礼の道」に関する現代の多様な文化状況を明らかにすることにより、現代社会において道空間一般が置かれている歴史文化的位置に関する諸知見を導出することができる。と同時に、(4)なお未開拓の研究分野である「社会的空間論」のパーспекティブやアプローチの確立に実証的な立場から一定程度の貢献をすることができる。(5)日本の巡礼の道に関する個別的な知見のみならず、通文化的な巡礼の道に関する比較研究を通して、道の文化に普遍的な一般的特性とその日本の特殊性についての洞察を引き出すことができ、空間の比較文化論の発展に一定程度の貢献をすることができる。

2. 徳島県における遍路道沿道習俗—「お接待」を中心として—

田所 承己

(1) 和歌山接待講

① 有田接待講

和歌山における現在の有田市、吉備町、金屋町、広川町などの有田地方は、高野山文化圏の一角をなしており、その大師信仰の浸透は根強いものがある。そしてその信仰の痕跡はさまざまな形で現在にも継承されているといえる。その痕跡は、各地に残っているさまざまな大師堂、祠、弘法大師伝説、あるいは各地の大師講という形でこの地方の歴史に刻印されてきた。たとえば有田市においては、愛宕山上の大師堂、山の中腹に連なる西国 88ヶ所に擬した祠、また大師座像が安置されている赤岩の砂山大師堂などが歴史とともに建立されてきた¹。吉備町の大師山には、四国霊場 88ヶ所から頂いた土によって新四国霊場が建立されており、この井口大師の縁日にあたる旧 6 月 20 日（8 月 20 日）や毎月 21 日には多くの人が参拝に訪れる。また有田地方には幾多もの大師講が各地に存在していた²。大師講では、大師を祀り、お勤めを行ったり、講会を開いたり、高野山詣りを行ったり、酒宴を催して親睦を深めたりと、講それぞれ様々な活動を行っていたが、それは大師信仰が庶民信仰と日常生活のリズムのなかに深く浸透していたことを何よりも物語っている³。

このように大師信仰が伝統的に根強い有田地域に組織されている接待講が有田接待講である。有田接待講は、現在、4 月の月上旬の 5 日間、1 番札所霊山寺内に設けられた接待所で、十円玉をのせた三宝柑を一般遍路に接待している。その浄業の歴史は古く、およそ 180 年前の文政の頃に開始したとされる⁴。かつては、二十数隻の漁船によって大量の接待品と世話人・お遍路さんを和歌山から徳島まで輸送するという伝統的な形態が特徴であったが、近年では時代の移り変わりとともに移動形態や接待品収集方法などにおいてさまざまな変容が見られるようになってきているのが実態である。

有田接待講は歴史が古いこともあり、その接待品収集手順、移動形態、接待活動手順などの組織化が確立しており、その点に関しては今も昔も通ずるものがある。しかしそこには大小の変容がさまざまに見られるのも事実である。以下、ヒアリングから得られた情報をもとに、昔から現在への変容にも目を配りながら、接待活動の実際を詳細に見てみたい。

¹ 『有田市誌』（昭和 49 年、有田市）、1380—81 頁。

² 『吉備町誌』（昭和 55 年、吉備町）、640 頁。

³ 大師講の詳細にかんしては、『有田市誌』、『吉備町誌』、『金屋町誌』、『広川町誌』等の各市町誌を参照。とりわけ『金屋町誌』には、各部落ごとの大師講に関する記述がある。

⁴ 前田卓『巡礼の社会学』（関西大学経済・政治研究所、1970 年）、239 頁。

先述したように、接待活動は4月に行われるが、これは旧3月3日の「節句」を中心として日程を定めることが伝統になっているからである。実際、前田卓（1970）によれば、昭和40年代初め頃にも同じく4月上旬に行われていた事実が確認されており、この伝統は変わっていないと思われる。しかしながら接待期間に関しては、以前と比べて若干短くなっているようである。近年では5日間というのが定着しており、かつての1週間と比べると若干短期間になっている⁵。

次に実際の接待活動の手順を、平成12年の日程に沿って述べてみよう。まず、4月1日から3日まで、接待講本部が置かれる天甫大師堂（後述）で接待品の受付を行う。この期間に、吉備町、金屋町、有田市の各地区の接待品収集を担当する世話人が、収集した接待金をまとめて持参してくる。4日は徳島での接待活動に備えて、暖房器具や炊事用具などの荷物の荷造り作業にあてられる。そして5日に四国にフェリーで渡り、1番札所霊山寺の接待所で5日間接待を行い、9日に和歌山に戻ってくるという手順になっている。

それでは講の組織はどのようになっているのであろう。接待講の運営にあたって中心となる世話人は、現在、男性5名、女性2名となっている。その役割としては、代表と会計（2名）、そして女性の場合は主に接待時の炊事などを担当し、各々がその任にあっている。この本部の世話人とは別に、講が組織されている地域範囲内で、各部落には1名ずつ世話人がおり、彼らが接待品の収集を担当している。現在の講の組織範囲は、吉備町、有田市、金屋町の各部落に渡っており、その世話人の数（したがって講の組織されている部落数）は、おおよそ80～90名ほどになるそうである。以前には、湯浅町や広川町にも収集担当の世話人がおり、講の組織範囲は今よりも若干広がったようである。前田（1970）によると、昭和40年代はじめには収集担当の世話人は百数十名になると記されているが、それと比較すると、現在は世話人の数が減少してきており、それに伴い接待講の組織範囲が若干縮小しているといえよう。

各部落の世話人は、各家を1軒ずつ訪問して接待品を集める。そして、「接待帖」に、接待品を寄付してくれた施主名、接待内容（接待金額）を記す。収集を終えると、世話人は、その接待帖と接待品（接待金）を、定められた期間内（3日間）に接待講本部のある天甫大師堂へ持参するという手順になっている。厳密にいうと、現在、有田市と金屋町の各部落の世話人は天甫大師堂の方へ持参するが、吉備町の各部落の世話人は、定められた期間以前に本部世話人の代表のところへ直接持参する手順となっている。というのは現在の世話代が吉備町在住であり、そのほうが簡便であるためであろう。したがって、世話代のところには21部落から直接、接待帖と接待金が届けられることになっている。少し前までは、吉備町の南半分の各部落（8部落）で収集された接待金と接待帖に関しては、いったんある

⁵ この点に関しては、1番住職へのヒアリングにおいても確認されており、昔は1週間から10日ほどの接待期間が、現在では5日間になっているという。いつごろから短期間になったのかに関しては今回のヒアリングでは不明であった。だが少なくとも、前田（1970）が調査を行った昭和40年代最初の時点では、まだ1週間であったことが確認されている。

世話人が一括して集め、その上で世話代のところに届けられていたのだが、その人が亡くなったため、今では吉備町内の（接待講が組織されている）全部落の接待帖が、直接世話代の家に届けられる手順となっている。

現在では、接待品はほとんどが現金になっている。かつては、草履、米（1～2 升）、茶、梅干、草鞋、漬物、手拭、チリ紙、菓子などの物品が多かった。もちろん、現金の人もいたが、それは寄付する物品のとくになく講元が金銭で代替させていたという性格のものだった。現在世話代のところに保存されている接待帖によれば、昭和 34 年当時の平均金額は百円であった。今日では千円が最も典型的な額であり、五百円から五千円までの金額範囲が見られる。もちろん、現在でも物品を寄付する人はおり、白米、あるいは山間部などにしばしば見られる草履などの物品例も散見される。しかしほとんど現金となっており、このことは接待活動の手順にも若干影響を与えている。前田（1970）でも記されているように、かつて物品が大半を占めていた当時は、大量の接待品を処理しなければならないという手間から、大師堂で接待品を待機する期間が今より長期に渡っていた⁶。実際、自動車の普及する以前には、有田川の川舟で接待品を運搬する方法や、あるいは部落と接待講本部の間を自転車で何往復もするという手法がとられていたのである。その点、現在は接待品はほとんど現金であり、接待帖と現金のみを持参するのみであるから、収集運搬担当の各世話人にとっては自家用車で事足りることが通例となっている。

本部世話人は、天甫大師堂で 3 日間、接待品と接待帖が運ばれてくるのを待機する。多いときには 1 日 3 人ずつ交替でそれを受付し、集まってくる百冊近い接待帖をすべて写しかえてまとめる。その際、金額ごとの帳面があり、千円の帳面には千円寄付者の氏名を、二千円の帳面には二千円寄付者の氏名を、という具合に写していく。大師堂で待機する世話人は、以前はそこに寝泊りして待機していたが、現在では、夕方にはその日の作業を終了する。このようにして集められた接待金で、三宝柑が購入される。平成 12 年の場合は、10kg 箱を 60 箱ほど購入している。

この接待講本部が置かれている「天甫大師堂」は、有田川の河口から約 1 km ほどの右岸に位置する。この大師堂は、明治 38 年に接待品の荷受所として設立され、明治 43 年に大師尊像が安置されてお堂とされたという歴史をもつ⁷。現在では、接待期間には接待品と接待帖の受付本部となるほかに、毎月 20、21 日には講会が開かれている。その際には、お堂の左右部分にある接待講本部部分が利用される。つまり、通常は接待講本部部分は 20 日と 21 日しか開かれず、その他のときはもっぱら「お堂」部分のみがお詣りのために利用可能となっている。

次に、四国への輸送＝移動手段であるが、和歌山接待講といえ、新造の漁船による大量の接待品・お遍路さん輸送が有名である。しかし今では、接待船は行われていない。現

⁶ 前田（1970）によれば、旧暦の 2 月の中頃から、本部の世話人が毎日 2 名交替で大師堂に寝泊りして、接待品が運ばれてくるのを待機していたという。

⁷ 前田、前掲書、242 頁。

在では、南海汽船のフェリーに接待品等を積んだトラック（2トン車）ごと乗船して、そのまま1番札所まで接待品等を運搬している。また世話人や接待を手伝う人たちも同じく、南海汽船を利用し、現地ではタクシーを交通手段としている。平成10年までは、和歌山港から小松島港への航路を利用していたが、平成11年からその航路が廃止になったため徳島港行き航路を利用するようになったという。

それではいつ頃、接待船は廃止となったのであろう。現在の世話代の記憶によると、だいたい昭和59年ごろからフェリーに変わったようである。フェリーに変更した要因としては、①南海汽船の航行頻度が増加したこと、②漁船利用の難儀さ、の二点がある。漁船の場合、天候が悪く海が荒れているときなどは、波風が激しく、乗船者はかなり難儀な体験をする。むろんそれでも、南海汽船の航路もさほど充実しておらず、他に四国へ渡る手段がなかった頃は、遍路たちも接待船を利用していた。しかし次第に南海汽船航路が充実してくると、多くの遍路がそちらに流れていく傾向が強まってくる。接待船を引き受ける側の漁師としても、人（一般遍路）が減り、もっぱら荷物（接待品）のみの輸送に特化する傾向が強まるにつれ、「人」つまりは「お大師様」を乗せてご利益を授かるという善根の意味が次第に薄れてきたといえる。このような経緯から、接待講側と漁師側が話し合いをした結果、接待船は廃止となった。

接待船輸送の実態はどのようであったのだろうか。新造船が接待船を引き受けると、大漁の幸がもたらされるということから、多くの漁船が引き受けたがる。とりわけ、接待が行われる旧3月3日の頃は漁も多く、大漁祈願をかけた多くの漁船が大師堂の浦の港で待機することになる。接待講本部である天甫大師堂は、有田川の川岸から数十メートルの所に位置するが、有田川のちょうど対岸の漁港から船が迎えにくる。この時期は打瀬網漁の季節であり、船と船の間に網を渡して二隻並んで進む漁法がとられる。この打瀬網漁の大漁祈願をかけて接待船を引き受けるため、必然的に船数は16隻、18隻、20隻という偶数隻になる。17隻や19隻だと、1隻あまってしまう勘定になるからである。現在の世話代の経験では、最高で24隻という年があったという⁸。接待船は、各船に一本ずつ、切り取ってきた青竹（葉のついたもの）を立て、そこに接待品として寄付された手拭を紐で吊り下げるといふ風習があった。さて、約3時間ほどかかって撫養港に着くと、荷物運搬用の三輪自動車の運転手と交渉を行い、荷を車に移し変えて、いよいよ1番札所へ到着するという移動行程であった。帰りは、撫養港で待機していた漁船に乗ると、昼頃四国を発つ。その頃に出発すると、ちょうど3時ごろの満ち潮時に箕島の河口のところに至るため、スムーズに港に寄せることができたようだ。

現在、四国に渡って接待活動を行っているのは、世話人と接待希望者あわせて12～3人である。平成12年の場合は、世話人3名、その他5名の計8名の予定であった。1番札所境内の接待所で、三宝柑を横一列に並べ、お詣りを済ませた人に接待する。その際、三宝

⁸ 現在の有田接待講の世話代をつとめる真砂隆男氏は昭和34年より世話人をつとめている。

柑の上には十円玉が乗っている。これは同行二人を意味しており、三宝柑は遍路を、賽銭は大師を指している。接待講側としては、この賽銭の使い方に関して、次の札所で使用してもらったり、大師様に頂いたということで御守にしてもらうということを想定している。

かつて接待船で四国へ渡っていた頃は、和歌山から多くの遍路も一緒に渡っていた。接待は高齢の世話人が担当し、比較的若い世話人はそれらの遍路を引率して、3日間かけて19番の立江寺まで巡拝する。とはいっても、すべての札所を巡拝するのではなく、高所にあるきつい札所はのぞき、低地の比較的楽な札所を中心にまわる。四国に着いた次の日に、5番ないし6番まで行き宿泊する。そして二日目に19番まで巡拝し、19番で護摩を焚いてもらう。3日目、昼過ぎまでに撫養港まで戻り、そこに待機している接待船に乗船し、和歌山に戻るという行程になっていた。現在では、この接待中の札所めぐりは行われていない。接待船の頃と違って、遍路希望者が同伴しないようになっているからである。

接待金を寄付してくれた人には、たとえば最も多い寄付額千円の人に対しては、以下のお返しを行う。御守(天甫大師の御守)、護摩符(1番で護摩をたいてもらったもの)、御影、御供(菓子)、手拭(有田接待講オリジナルのもので、天甫大師の御詠歌がプリントされている)。これらのものを紙袋に入れてお返しする。なお、寄付額が五百円の方は、このうち手拭と御守がつかないようだ。これらのお返しは金銭的には五百円相当かかるといふ。したがって、千円寄付してもらっても、そのうち五百円が「お返し」されることになる(寄付額五百円の場合、お返しは二百円分ほどになる)。寄付額は千円がほとんどだが、二千元、三千元という人もまれにいる。そういう金額の高い人には、お返しも上記の5点以外に何か他のものを付加する。たとえば、二千元の人には乗用車室内用の御守(交通安全の御守)、五千元の人には線香となっている。これらの交通安全御守や線香などの付加的「お返し」の品物は、接待日の最終日に、十番切幡寺そばの専門店に世話人二人が行って購入してくる。なお、寄付額による人数は、接待を三日間行う際に、世話代が接待所内で接待帖を見て数え上げることになっている。そして最終日に金額ごとの人数に応じて必要な品物を切幡寺そばの店に買出しにいくわけである。また、お返しのうち、天甫大師の御守については、徳島へ発つ前にあらかじめ用意しておき、それを四国へ持参し、接待最終日に接待帖やお返しの品と一緒に霊山寺で護摩を焚いてもらう。

接待とは別に、有田接待講では毎月20日、21日に講会が開かれている。20名から30名の参加者が、20日の夜と21日の朝から昼にかけて、お勤めに参加している。その際、接待のときと同じように志として千円ほどを寄付する。これに対してもお返しがあり、御供物の菓子が参加者に手渡される。

② 野上接待講

野上や美里の谷々は高野山へと至る道中にあり、大師信仰の強い地域のひとつである。そもそもこの地域の谷々は、四国の88ヶ所詣りを済ませた遍路がお礼詣りに高野山を訪れ



る際の道筋に当たり、そのため歴史的に遍路や巡礼者にたいする受容度は非常に高かったといえる。巡礼者に米などの食事を施与し、場合によっては宿を提供するというような善根の習俗が根付いている土地柄であったといえる⁹。このような土地柄のため、四国遍路への接待品の数量も、江戸時代から第二次世界大戦ごろまで増加の一途をたどったようである。この土地の人々の厚い善根精神は、それを当てにした偽巡礼者や強制的な物乞いの少なからぬ流入を招いてしまうほどであったことが指摘されている¹⁰。

野上接待講による接待は、有田接待講よりも幾分早い時期である3月の彼岸頃に3日から4日間ほど、やはり1番札所内の接待所で行われる。この講の歴史は古く、寛政元年(1789年)に始まったとされる¹¹。有田接待講と同じく、かつては接待船で四国へ渡っていたが、時代とともにその習慣は今では廃れている。しかし、その接待講の組織や、接待活動の手順など細かい部分において、有田接待講と非常に似た性格を持っている点が今回の調査で明らかになった。以下、世話人のヒアリングから得られた情報から、接待活動の実態を見てみたい。

今も昔も、野上接待講は、3月の彼岸ごろに徳島に渡っている。それにより、有田接待講の活動時期と1~2週間ほどずれ、互いにかち合うことがないように工夫されているわけである。今年の場合(平成12年)は、3月24日から27日までの4日間が接待時期となっている。しかしかつては接待期間はもう少し長く、約1週間ほど行っていたという¹²。有田接待講とともに、接待期間が短期間化しているのがわかる。

接待活動の手順は、今年の場合、3月11日、12日に野上の接待所で各部落からの接待品の受付を行う。なお、国吉という地区に関しては、本部から直接世話人が接待品を受け取りに行く慣例となっているが、それは今年3月8日である。3月15日には、海南市の接待品が黒江の世話人宅に集められる。そして、3月24日にフェリーで四国に渡り、27日に戻ってくるという日程になっている。

⁹ この地域の善根宿の習俗に関しては、次のような記述がある。「私の家は、善根宿といって、こうしてお遍路さんをお泊めしていました。冬になると、祖父がお遍路さん用の夜具や、こたつを準備していたのを覚えています。野上辺りで話を聞いて上って来られる方もあり、多い年には十人ほど、お泊めしたこともありました」(畑口嘉一郎「野上接待講と遍路」『美里町 町制施行30周年記念出版 美里ななくさ』、美里町、昭和62年、56頁)。

¹⁰ 大正の初め頃まで、子どもを脅して物乞いをする流入者が絶えなかった。親は、子どもに家の留守番をさせる際には、偽の巡礼者が来たときに帰らせる手段として、子供に予め米を渡しておくのが通例であった。それでも、なかには米だけでは満足せず他の物を強要する偽巡礼者もいたという(『野上町誌 下巻』、528頁)。

¹¹ その証拠の一つとして、野上接待講本部の置かれる大師寺には、二百年記念碑が建立されている。前田(1970)によれば、野上接待講は、現在まで続いている和歌山の接待講のなかで最も古い歴史をもつ(前田、前掲書、244頁)。

¹² この点に関しては、今回のヒアリング対象である世話人より、先代の時代には1週間の接待期間だったという言質が取れた。また1番札所の住職のヒアリングの際にも、同様の発言があった。前田(1970)には、当時の接待期間に関して、「三月の二十日頃から約一週間、遍路に接待する野上接待講」という記述が見られる(前田、前掲書、244頁)。

講組織としては、有田接待講と同じく、本部の世話人および、それとは別に各部落で接待品の収集を担当する世話人によって構成されている。本部の世話人は20名ぐらいを目処としているが、現在の時点では17~8名となっている。なお、前田によれば、本部の世話人がすべて男性であり、しかもそれは原則として世襲制であるという特色が確認されているが（前田、1970、244頁）、現在ではそれはさほど強く意識されているわけではないようである¹³。講の組織範囲は、現在、野上町、美里町、海南市に渡っている。終戦後には、まだ清水町などからも国吉へ接待品が寄せられていた時期もあったようであるが、やはり時代とともに、接待品を寄せてくれる家も少しずつ減少しているのが実態である。また最近までは桃山町調月でも接待品が収集されており、本部から世話人が受け取りにいったが、今は途絶えているという¹⁴。

現在、野上接待講本部は、野上町下佐々の大師堂に置かれている。この大師堂＝接待所は昭和26年に設立された。その設立の経緯に関しては、野上町誌に詳しいので引用しよう。

野上の接待所については「野上施待所大師堂建立の縁起」によれば頭初は各地の大師信仰の有志によって「四国摂待講」を組織して有信者の浄財や物品を募って四国巡礼者に布施していたが明治十八年（1885）「和讃講」を設けて明治二十七年（1894）大木（吉野）へ一軒の堂を建て、これを大木庵と号し弘法大師の尊像を安置して毎年夏秋冬の三期に法会を営み浄財物品の施与を受け「代参講」を置いて毎年二人を八十八ヶ所に巡拝させた。

なお接待物は各地の世話人によって集め、その本部を野上町曲谷に置いたが物品の量が多くなるにつれて本部の建物が狭くなった。よって昭和二十六年（1951）二月大木庵を合併して下佐々に大師堂と接待所を設立することとなった¹⁵。

この記述は昭和60年のものであるが、現在も下佐々の大師堂が接待所として変わらず機能している。

接待金は、各部落の収集担当の世話人が各家から収集し、自分の部落で寄付をした人の氏名、金額、願い事（「家内安全」「交通安全」など）を記した接待帖を一冊ずつ本部の受付に持ち寄る。先述したように、野上と美里の各部落の世話人は野上の接待所へ、海南市の世話人は黒江の世話人宅へ持ち寄る。国吉の方面の部落で集められた接待品は、本部か

¹³ 今回のヒアリング対象は、女性の世話人であった。また、実際の接待活動の際にも、実質的な活動要員5名のうち、女性が3~4名になるのが通例となっている。なお、世襲制に関しては、確かに本部の世話人、各部落の収集担当の世話人、双方が結果的に世襲的に継承されるケースが多いようであるが、拘束的な原則として機能しているほどではないようである。世襲制にこだわるには、あまりにも人材が不足しているという事情が影響しているのではないかと推測される。

¹⁴ なお、現世話代の畑口文雄氏の先代にあたる畑口嘉一郎氏による記述に拠れば、上記の野上町、美里町、海南市、清水町、桃山町以外に、かつらぎ町や和歌山市の一部にも接待講の講元組織範囲は広がっていたという（畑口嘉一郎、前掲文、54頁）。

ら世話人が収集に行く。収集場所となる野上接待所は、野上町下佐々の大師寺に置かれている。今年の場合、収集日の前日にあたる3月10日には、お堂の前に祭壇を組んでお大師様の御膳を供えて、来る人が果物やお菓子などのお供えができるように準備をし、祭壇前を綺麗にする。収集担当の世話人が集まる3月11日、12日には、下佐々の近所の人たちがその世話人たちに振舞う昼食（精進料理）の用意を手伝いに来る。計30人近くの人が役を分担して、接待収集の手伝いを行う。世話人は朝から夕方まで各々接待品を持参するので、それを受け取り、帳面を写す作業をおこなう。昔は旧2月の6、7、8日であったが、今は世話人も減ったため二日間になり、ここ何年か都合のつきやすい土日に行うようになっている。野上の接待所には、近年では約50名ほどの世話人が接待品を持ち寄ってくる。それとは別に3月15日は、海南市の世話人たちが黒江の世話人宅に接待品を持ち寄る。本部から世話代と他2名が手伝いに行くことになっている。国吉には、早めに（今年の場合は3月8日）、本部から世話代ほか3名が接待品の受け取りに行く。

この収集期間というのはかつては村全体が祭りのような賑わい、活況を見せる期間だったようである。昔は、お茶、柴、草履、草鞋などの物品が多く、しかも自動車などがない時代であったため、大きな荷物（柴など）を背負って持ってくる世話人が行列をつくって道々を行進していた。そのため、お接待に行かない人でも、「ああ、お接待が始まったなあ」と分かり、ある意味で接待活動と一体化した雰囲気が村空間のなかに出来上がっていたようである。

近年では、有田接待講と同様に寄付品はほとんど現金になっており、額的には最低五百円から五千円までの幅があり、通常は千円が多くなっている。集まった寄付金により、近年ではタオルとティッシュを購入し、接待品として配っている。なお、以前には、日本手拭とチリ紙を接待していたという。現在の接待品のタオルには「大師寺 紀州野上接待講 和歌山県海草郡野上町下佐々279-1」とプリントされている。なお、かつては、世話人たちが1番札所の接待所を利用する際に竈で米を炊いていたため、薪や柴、米などの接待品があったということである。

例年、四国での接待活動には5名ほど参加することになっており、男性が世話代を入れて1~2名、女性が3~4名となっている。少人数のため、今では自家用車でそのまま南海汽船のフェリーに乗って、和歌山港から四国へ渡っている¹⁶。なお、四国の接待所で使用する米、薪などの荷物になるものは、早めに宅急便で1番札所に送ってしまう。興味深いのは、この野上接待講でもかつては漁船を接待船として利用していた証言が今回得られたことである。昔、黒江港から木船の新造船が接待船を請け負っていたという¹⁷。

¹⁵ 『野上町誌 下巻』、527頁。

¹⁶ 野上接待講も有田接待講と同じく、和歌山港から小松島行きの航路を利用していたが、平成11年からその航路が廃止となったため、徳島港行きを利用するようになった。

¹⁷ 有田接待講では1980年代まで接待船が利用されていたが、野上接待講の場合はもっと以前に廃止された可能性のあることが、今回のヒアリングで確認された。ただ、いつ頃ま

接待期間となる 3 日間、接待を担当するのは専ら女性である。世話代は、接待所内で、寄付金を寄せてくれた人ひとり一人の護摩符を記入する作業を行っている。いわば完全な分担作業が確立しているといつてよい。なお、かつては接待期間中に世話人が遍路を引率して 10ヶ寺巡りを行っていたが、現在では接待活動のみになっている。

有田接待講と同様に、野上でも接待品を寄付する講元と接待活動の結びつきが「お返し」という形で制度化されている。お返しは正確には、護摩符、御影、火伏せ、である。「火伏せ」とは、各家が火事を避けられるよう祈禱したお札である。御影と火伏せの札は、前年に一番で頂いたものを、翌年、収集担当の世話人が各家に寄付を募るときに、寄付金と交換に渡す。護摩符に関しては、接待終了時に世話代が徳島から直接、各部落の世話人へ郵送する。護摩符の裏には、各家ごとに希望した願い事を記入する。接待品を収集する際に、各地区の世話人が各家に聞いて、氏名、金額、願い事を接待帖に書き留めておく。それに基づいて、接待期間中に一番の接待所で世話代が、1枚1枚の護摩符に氏名と願い事を記入する手順になっている。護摩符は、寄付金額に応じて大きさが異なる。また五千円寄付者に対しては、御守が付加される。記入の終わった護摩符は、接待期間中に寺で護摩を焚いてもらい和歌山へ郵送するのである。

野上接待講は、接待活動をメインとしながらも、講として他の諸行事も盛んであり、平成 12 年には以下のような年間行事を予定している。

- 2月3日(木) 節分護摩供養 (下佐々大師堂)
- 2月25日(金) 初大師千人講 (桂瀬 毘沙門寺)
- 3月24~27日(金) 四国施待 (霊山寺)
- 4月2日(日) 四国団参
- 4月25日(火) 御影供 (下佐々大師堂)
- 6月15日(木) 青葉祭 (6時出発高野山へバスで)
- 7月10日(月) 七福神参拝
- 9月18日(月) 大師寺参拝

「千人講」とは、この地域の大師講を指す。元来、年毎に抽選によって講元を定め、大師尊像や掛字を講元の家に移して祀り、地域にたいして盛大に饗応を接待するものである¹⁸。かつては、千人講のときは、幟上げが大々的に行われ、さながら部落は祭のような賑わいを見せ、お詣りのための臨時のバスが出るほどの活況を呈していた。近年では、金銭的負担が大きいため個々の家を講元とする場合より下佐々の大師寺で行うことが通例となっている。かつて程の規模や賑わいを誇るほどではないとはいえ、この地域の大師信仰の根強さを維持する一つの契機となっていることは間違いない。また接待活動とは別に、今

で接待船が存続していたのかは確認できなかった。

¹⁸ 千人講の伝統に関しては、『野上町誌』(553-555頁)に詳しい記述がある。

でも接待講で希望者を募り四国遍路を年一回行っている¹⁹。また旧3月21日の御影供には、下佐々の大師堂でお大師様を祀り、餅投げなどを行う。最も大規模な行事は、高野山の青葉祭への参加ツアーであり、講の構成員だけではなく他の一般の人も含め、約百名前後参加する。また行事の少ない秋には、下佐々の大師寺参拝を行うことによって、講の紐帯の持続を意識的に図っている。

(2) 生活改善グループの接待活動

鳴門地域は、昔から遍路にたいする意識は強いが、近年、この地域の生活改善グループによって組織的に接待活動が奨励され実施されている。生活改善グループとは、農林水産省外郭団体の全国組織であり、第一次産業に関わる同業者の女性による地域的な産業振興グループとして、主に特産物開発やそのイメージづくりなどを活動の中心とする。基本的に、農業や漁業にたずさわる同業者の女性による10名から5、60名で構成される小規模のグループであり、おもに地域同業者や農協・漁協の下部組織などが参加している。鳴門地区における生活改善グループは23あり、その特徴として、漁業が盛んなことから漁家グループが多く含まれている点が挙げられる。各々のグループの活動モットーを例示すると、「自家生産物の有効利用」、「バランスのとれた食事作りと共同加工」、「地域特産物の加工研究と健康管理」、「健康管理と仲間作り」などがある。鳴門地区の23の生活改善グループは、公的事業の実施主体として「鳴門地区農漁家グループ協議会」（昭和36年結成）を構成する。この協議会は農業改良普及センターの指導下に置かれる。

この生活改善グループによる近年の接待活動は、県事業「21世紀農村グループ活動展開事業」の活動内容の一環として行われている。この「21世紀農村グループ活動展開事業」とは、徳島県の農業・農村活動振興を主眼に、平成9年度から3ヶ年計画で実施されている県事業であり²⁰、その事業主体は「徳島県農村グループ連絡協議会」とされる。農村グループ連絡協議会は通常、①経営者会（中核農家：男性中心）、②農村青少年クラブ（若年層グループ：～35歳程度、男女）、③生活改善グループ連絡協議会（女性中心、鳴門地区の場合は「鳴門地区農漁家グループ協議会」）によって構成される。この「21世紀農村グループ活動展開事業」の実施内容は、具体的には以下ようになる。(1) 21世紀の農業農村づ

¹⁹ 3年で88ヶ寺巡る区切り打ちである。

²⁰ 21世紀農村グループ活動展開事業の趣旨は以下ようになる。「人々の価値観の変化にともない、農業や農村への関心が高まっている。これらの要請に、農業の側からも組織的に応えていく必要がある。一方、農業者自らも、イメージアップを図りながら、一般への対外理解を促し、あわせて中長期的な視点での担い手育成につなげていくことが大切である。このため、農村グループの組織力を生かし、交流やイメージアップ、豊かなこころ育む農村づくり、また、幅広いボランティア等の活動を展開する。もって、広範な人々が参画できる、21世紀へ向けた農業農村づくりを進める」（「21世紀農村グループ活動展開事業実施要領」より）。

くり大会（シンポジウムや講演会など）。(2) 交流・イメージアップ活動（消費者や県外との交流、直販ネットワーク、情報発信など）。(3) 豊かな地域づくり活動（農村漁業青年連帯モデル活動、農村水産品づくり連携活動など）。(4) 明日の担い手育成活動（体験農業、学童農園等への支援など）。(5) ボランティア活動支援。(6) 活性化研修活動（国際化研修ほか）。特徴的なのは、昨今の社会的流れを汲んで「ボランティア活動支援」が定められている点である。

鳴門地区では、この「21世紀農村グループ活動展開事業」の事業主体として「鳴門地区農村振興グループ連絡協議会」が置かれる。そして活動内容の一環である「ボランティア活動支援」として、この地域では馴染み深い伝統的な「遍路接待」に眼がつけられた。農業改良普及センターの指導下のもと、特産物のイメージアップや特産物づくりも兼ねて、「お接待」が活動事業として奨励され、「鳴門地区農村振興グループ連絡協議会」を構成する生活改善グループのうち、いくつかのグループがいわゆる「お接待」を「ボランティア活動」として行うことになった。

以上の経緯から、具体的には鳴門地区では4つの「接待」活動が行われている（平成10年度現在）。産業や地域活動振興という政策的背景をもつという意味では、きわめて現代的な形態であるといえよう。伝統的接待講や善根宿などのように地域的・個人的な宗教的信仰を核とした「お接待」と比べ、動機付けや意味付与の内実において幾分様相が異なってくるのは至極、当然といえよう。実際、今回ヒアリングを行った3つの接待グループのうち、30代や40代の比較的若手が中心となっている2グループは、活動の動機付けや意味付与を特産物開発やその販売促進・イメージアップという側面に多分に置いているといえる。対して、比較的高齢者が中心となっているもう一つのグループは、地域的な接待への親しみの伝統を強く意識している点を強調しており、お接待の伝統的精神を「地域への貢献・恩返し」という形に昇華させている面が見受けられる。いずれにせよ、鳴門という地域は昔から伝統的に「お遍路さん」の存在や活動にたいし地域的に馴染みが深く、だからこそ「接待」を農業漁業振興活動の内実として取り込むという「知恵」が生まれたともいえるのである。

① 堀江農協女性部

1番札所霊山寺から鳴門市へ向かって県道12号線を5キロほど進むとJR阿波大谷があるが、その駅南に堀江農協がある。その堀江農協の女性部が、先述した「21世紀農村グループ活動展開事業」の一環として、活動費の助成を受けて接待を行っている。平成9年の11月より毎年一回、11月中の土・日曜日に、2番札所境内でれんこん茶とふかし芋の接待を行っている。実際、接待活動に従事している構成員は5~6人である。調査時点では2年目であった。

農協女性部の活動内容は、特産物開発、料理・手芸教室、各種研究会等がある。特産物

の開発において、お茶がブームになっていることにヒントを得て、地元特産のれんこんの葉を有効活用できないかと考えたのがきっかけだという。農業改良普及センターの助けのもと2～3年研究を行い、れんこん茶の商品化まで至った。折りしも、「21世紀農村グループ活動展開事業」が計画されており、それを活用した特産物PRの方法として、普及センターが「接待」を提案した。そこで「21世紀農村グループ活動」のひとつの「ボランティア活動支援」に申請し、助成を受けることとなったのが、活動開始の経緯であるという。

このグループによる接待への意味付けは、農協の下部組織ということもあり、やはりかなり特産物の販売促進活動という側面が強い。このグループの場合、接待活動の実施時期が、一般の接待がもっとも盛んな春ではなく11月になった背景には、接待品であるれんこんの収穫が夏であるという点がある。この点にも、特産品振興という目的が多分に活動の性格を左右している面がうかがわれる。とはいえ、接待をしたときに、遍路の人に喜んでもらったり、人間的つながりができる点が嬉しいという感想をもらっていた。自分たちで開発した商品を遍路する人に広く食してもらえるという意味で、他の接待活動とはまた違った感動もあると思われる。

② 矢倉はすのみグループ

堀江地域からさらに鳴門市中心部に近づいたところ、ちょうど旧吉野川の河口から2キロほど上ったところに、矢倉という地域がある。この地域の農家の人たちが生活改善グループ「はすのみグループ」をつくり、「21世紀農村グループ活動」として接待を行っている。これまで、平成9年11月に1番札所で、平成10年11月には2番札所で、ふかし芋とみかんを遍路の人たちに接待してきた。

現在、このグループの構成員は11名であり、お接待は全員参加の公式活動として位置付けられている。グループは昭和30年に結成。矢倉地区は、かつてがれんこん地帯（はすの葉地帯）であったが、今では減少し、甘藷・大根作が中心になっている。昔は地域のほとんどの家が農家であり、矢倉地区で3つのグループがあったが、農家割合が減少したため、20年前に合併して、今の「はすのみグループ」になる。15～6年前の時点では、構成員は16名ほどであったが、現在は減少傾向にあり、11名となっている。

接待活動開始の発端経緯に関しては、地域にたいする恩返し、地域の役に立ちたいというこのグループの志向性を無視することはできない。そのあたりの経緯を、グループのリーダーは次のように語ってくれた。

はすのみグループのメンバーも高齢化して60代になり、今までお世話になってきた地域にたいしてそろそろ「恩返し」したい、地域の役に立ちたいという気持ちが強くなってきた。その頃、社会的には環境汚染の問題が話題になっており、生活排水の問題に取り組むことで地域に役に立てるのではと思った。用水路の汚れを抑えるために、洗剤（含油分）

を使わずにすむアクリル系のタワシを共同購入することを試みる。資金的には、グループの共同菜園で種が余ったものを無人販売して幾分か豊富になっていたものを当てることができた。さらに他にも地域に役に立てることはないか、というところから「接待」が浮かんできた。環境問題に関してはメンバー間でも積極的でない人もでてくるが、お遍路「接待」ということだと、全員が「やりたい」「関心がある」ということでスムーズだということもある（グループの大部分の人が遍路経験あり）。わたしは鳴門出身で、この辺りでは昔はお遍路は地域と密着していたという伝統がある。直接的には、普及センターのほうから事業活動の「ボランティア活動」として、特産物PRのために「接待」をすすめられたこともある。自分たちの年齢的なこと、金銭的なこと（共同菜園の収入）、環境問題が話題になったことなど、いろいろなことが時機的に重なったことがあると思う。グループのメンバーが元気の限り、今後も続けていく予定である。たとえ普及センターの事業費から助成金がでなくなっても続けていくつもり。

このグループの「接待活動」にたいする意味付与や動機付けは、単純に特産物の販売促進や振興のための活用という道具的側面に還元できない面がある。活動開始の経緯は、たしかに、「21世紀農村グループ活動展開事業」のもとで農業改良普及センターによる「お接待」の奨励が大きなきっかけとなっていることは否めない。しかし、比較的60代の高齢者が中心となっていることもあり、「お接待」を子どものころに直接身近で体験したり見かけたりした経験のある人が多く、他の若手のグループと比べ、「お接待」に対する地域的な感受性の伝統を持続している傾向が強いともいえる。他方で、「地域にたいする恩返し」や「地域に役に立ちたい」という言葉にみられるような、「地域」というものへの深い紐帯感が、現代的な「奉仕の精神」という新しい形態を与えられることによって、発現の方途を見出している点も見逃せない（環境問題への取り組みなど）。このような両要因が時機的なタイミングのよさからうまくミックスされて、「お接待」活動への意味付与や動機付けを支えているのではないかと推測される。

③ 漁家グループ

鳴門市の地元産業のひとつとして漁業が盛んであることから、この地区の生活改善グループには7つの漁家グループが参加している。平成10年度には、このうち5つのグループが特産物PRを主要な目的として「お接待」活動を行った。それぞれが別々の接待活動を行うのではなく、里浦、新鳴門、鳴門の3漁家グループ連合と、北泊、堂浦の2漁家グループ連合がそれぞれ接待活動を行っている。このうち今回の調査では、前者のグループ連合の活動に関してインタビューを行うことができた。

里浦、新鳴門、鳴門の3漁家グループは、「21世紀農村グループ活動展開事業」の助成を受け、平成10年度の11月に初めて接待活動を行った。2番札所境内で、特産物である灰干

し糸わかめの入った味噌汁とふかし芋を参拝者に接待した。活動体制としては、里浦漁家グループ（会員 50 人）、新鳴門漁家グループ（会員 20 人）、鳴門町漁家グループ（会員 50 人）それぞれのグループから各 3 人ほど選出し、10 名で行った。中心となっているのは里浦漁家グループである。そこでヒアリングは里浦に対して行った。以下の叙述は、里浦漁家グループの代表者へのヒアリングに基づくものである。

「里浦漁家グループ」は、漁業組合の婦人部が、普及センター指導下の生活改善グループに参加しているものである（昭和 51 年より）。生活改善グループとしては、勉強会（生活廃水による海水汚染に関してなど）、料理講習会、加工品づくりなどの活動を行っている。むろん、漁業組合婦人部としての活動も別にあるということである。

接待活動を始めようとした動機や背景については、特産物の販売促進、イメージアップという振興面が強調されている。

特産物の「灰干し糸わかめ」をとにかく PR したい。それが本音。遍路は、全国からくるので、県外の人に PR するには絶好の機会。本物の灰干し糸わかめを食べて欲しい。灰干し糸わかめは、加工過程で灰をまぶすため、「灰」にたいする抵抗感が一般には強くなってしまっているので、それを払拭して、美味しさをわかってもらいたい。灰干し糸わかめの 9 割はこのものだ。徳島県はほとんど 99% こししかない。目的が PR だから、いわゆる「お接待」を利用してもいいのか確かにためらいもあったが。

接待活動の中心となっているのが 30 代の若手であるということもあろうが、接待を他の活動（特産物の PR など）のために活用しているという自覚、割り切り方がはっきりしている面が伺われる。漁業振興という利害と、接待にたいする地域的受容の精神は、ここでは曖昧な形で接続しているというのではなく、前者への意識が主観的にも強く自覚され、それが後者を完全に凌駕し、接待に対する伝統的スタンスを組替えてしまっている。とはいえ、この地域では比較的あまねく好意的に受けとめられてきた伝統的習俗「お接待」に対するイメージは若手のあいだでも共有されているためか、「お接待」を特産物 PR という「世俗」的目的に「利用」することに幾分ためらいを感じている様子が見られ、興味深い。

(3) その他の小集団接待・地域接待

① 上坂日曜市組合

四国一の規模を誇る接待として有名なのが、上坂日曜市組合による接待である。毎年 3 月と 11 月の 2 回、6 番札所安楽寺で、およそ 1 千人から 2 千人の巡拝者に草餅やぜんざいなどが振舞われる。

上坂日曜市組合とは、上坂町の縫製業、製麺業、製菓業、八百屋、土建屋、家具屋、骨

董品店などの各業者が日曜市を毎週開催するべく平成2年に結成した組合のことである。組合として、長らく町内の広場で毎週日曜日に仮店舗的に市を開催してきた。平成10年より上坂町の地場産業館「技の館」前の会場に長屋式の集合店舗を建設し、地元次第に根付きつつあるといえる。現在は27～8店舗。この日曜市組合は、仕事とは別にさまざまな行事活動を行っている。年間行事スケジュールとして、3月にお接待、4月に上坂町主催の桜祭りの協賛、5月子ども向けの「焼き肉パーティ」、11月にお接待、年末に宝くじ大会などが挙げられる。

年二回のお接待は、組合にとって最大かつ最も重要な活動である。その活動は、手順から分担まで高度に組織化されており、その活動経費も組合費から公式に割り当てられている。以下その手順を見てみよう。まず接待品の準備に関しては、おもに男性を中心とした組合員が分担して仕込み・仕入れを行う。草餅は饅頭屋、ハンカチは縫製業者など、普段の商売流通ルートを利用して低経費で効率的に調達が行われる。当日の下準備に関しては、テーブルを6番札所安楽寺より、テントを日曜市組合より、イスを上坂町商工会より調達し、宣伝告知を地元新聞の告知欄に掲載する。そして当日の接待は主に女性が中心となり、日曜市組合員22～3人ほどで参拝者に接待を行う。

接待は、毎年3月21日の春分の日と11月23日の勤労感謝の日の2回行われる。接待品は多岐にわたり、サトウキビ（和三盆糖）、さつまいも、健康茶などの地元特産品や、ぜんざい、杵つき餅、草餅、さらにハンカチや柿なども接待されることもある。接待対象者は1千人から2千人にも及ぶという。

そもそもこの接待活動が開始されたのは、組合が結成されて2年ほど経った平成4年のことである。当初は組合の3名を中心として活動が組織された。中心となって活動を牽引しているT氏によれば、日曜市組合が軌道に乗り、その利益を人々に還元したいという思いがきっかけになったという。地元には、毎週「低価格」という形で貢献しているから、「巡礼さん」に還元したいと思いついたという。そもそも、このような接待を思い至った背景には、T氏自身の遍路への思い入れがある。

伝統としての遍路、歩き遍路は、戦後途絶えていた。親の代は接待経験があり、それを聞いている（T氏は母親の信仰を受け継いで自身も真言密教であり、これまで30回88ヶ所巡りを経験している）。接待に関してはこれまでも青年団などによる小規模なものがあったが、昔からの伝承である遍路を継承するために接待を行いたい。

つまり、遍路への思い入れ、遍路や接待という伝承継承への意欲、こういったものが、ちょうど日曜市という組織力とその商売の成功という時機に邂逅して、大規模な接待活動が生まれたといえよう。

このグループはまた、非常に興味深い接待も行ったことがある。四国には、弘法大師と縁深い中国西安から縫製工場などに研修生が多く働きにきている。そこで平成9年秋に行

った接待では、T氏が同業の縫製業者などに声を掛け、50人ほどの縫製工場出稼ぎ研修生に参加してもらい、水餃子を遍路に振舞うことによって、一般遍路と中国人研修生との交流を図った。

接待への意味付けに関しては次のように述べている。「宣伝や商売気はまったくなく、奉仕の精神である。だから他の行事だと日曜市組合員もまとまらないことも、接待だとみんなが乗り気である」、「昔からの伝承の継承である」、「幸いなことに商売柄、費用は比較的抑えられる。こちらがお腹が痛くなるような接待はしてはいけないと思う」、「1000人も2000人もの人を対象としているのは、規模そのものを大きくするのが狙いでなくて、それだけ多くの人に喜んでもらうことができるからである」。通常の仕事である商売のノウハウを最大限に生かしながら、決して経済に還元されえないところに、仕事とは別の接待活動の意義を見出そうとしているのが伺える。いわば「現世」的な力を土台としながらも、それを「伝承」や「奉仕の精神」という非経済的な活動へと昇華させている点に、接待活動の意義と満足を見ているのではないだろうか。今後に関しても、「日曜市がある限り続けていきたい。最初は大変だったが、もう手順も慣れ、続けて行くことができる」と見通しを語っていた。

② 松島農協ひまわり部

上坂日曜市組合と同じ上坂町の松島農協でも、近年最寄りの6番札所にて接待を始めた。女性高齢者部会の「ひまわり部」が、平成10年より毎年6番札所安楽寺でハンカチなどの接待を巡拝者に行っている。

「ひまわり部」は、女性高齢者部会として平成9年6月に誕生した。現在部員は68名になる。松島農協女性部は、女性部本体、ひまわり部（63歳～78歳）、若草部（35歳～47歳）の三部制になっている。ひまわり部は、部長のNさんを中心として、発足以来次々と活動を活発化させている。具体的には会報発行、料理、手芸、藍染め、施設訪問などのボランティア活動など多岐に渡る。

そのボランティア活動の一環として、平成10年3月より接待活動が開始し、部員34名が参加している。平成10年の接待では、部員の手作りの藍染めのハンカチ（購入分も合わせて百枚）、先の日曜市組合のT氏が寄贈してくれた風呂敷（60枚）、部員が個人的に寄付してくれたはっさく（150袋）とティッシュ袋（50人分）を、延べ430名の巡拝者に接待した。平成10年には3月10日、11年には3月27日に行われた。

接待活動開始のきっかけの一つとなったのが、平成10年の2月に行われた藍染め体験実習である。この年、上坂町地場産業館として「技の館」がオープンしたが、そこで行われた藍染め体験実習にひまわり部が参加し、そこで染め上げたハンカチを接待してはどうかという話になったという。

またひまわり部のボランティア活動として「お接待」が発案されたのは、部長となった

Nさんの思い入れも大きく作用したと推測される。Nさんはその接待をはじめようと思った経緯を次のように語っている。

子どもの頃、遍路道沿いに住んでおり、身近で接待をよく見ていた。また自分も遍路を通して4回行った。接待をずっとしたいと思っていて、農協で老人部会ができたので、いい機会だと思った。

ひまわり部発足したのが平成9年であり、初期には活動を活性化させることが何よりも求められた。そのとき牽引力となったのが、接待や遍路への思い入れの強いNさんであったという事情が多分に働き、接待活動が生まれるきっかけを待っていたといえよう。

③ 城戸部落

12番札所焼山寺から直線距離で約5~6キロ北西に城戸という部落がある。美郷町内の国道193号線から川田川が分岐する道に沿って山を上っていくと、山肌の畑で農業を営んでいる約25軒ほどの部落に至る。この部落全体の活動として古くから接待活動が営まれてきた。毎年、旧3月4日(4月の初め頃)、焼山寺境内でそば接待を巡拝者に行っている。

この部落全体が、近くの重楽寺(真言宗)の檀家であるのが特徴である。とはいえ、接待そのものは檀家活動というよりは、むしろお大師信仰を伝統としている部落の活動という色合いが強い²¹。活動には、部落25軒が参加し、部落全体の伝統的な活動として深く根付いている性格のものであるといえる。リーダーや役職は特に定まっていないが、主に年配者を中心として営まれている。お大師信仰が強く、重楽寺住職引率のもと遍路そのものを行っている住民も多い。

接待活動の手順としては、毎年、接待当日10日まえほどから準備を行う。まず、部落の25軒が一軒ずつ、そば粉一升と小麦粉を持ち寄る。部落内の4つの地区が持ち回りで順にそば作りを担当している。当日は車で焼山寺へ移動し、女性を中心に約20名ほどで接待を行う。寺側との協力体制が伝統的に確立しており、テーブル他の必要道具は寺で借り、また接待品が余ったら寺へ寄付する手順となっている。興味深い習俗として、接待時に遍路から頂いた納札を村へ持ち帰り、部落入り口の道に高く張った細縄に括り付けて、ご利益を授かるという伝統がある。

今回の調査では、その歴史的経緯は発端に関しては明らかにならなかった。ヒアリングによれば何百年もの歴史があるという。現在では車によって焼山寺に移動しているが、昔は当然歩きであった。この部落から札所までは確かに直線距離では5~6キロであるが、しかし昔の接待行はおよそ3時間かかる山越えの連続であり、それ自体厳しい行程を伴って

²¹ 重楽寺住職が接待活動を牽引しているのではない。活動そのものへは関わっていない点だが、重楽寺への簡単なヒアリングから確認された。

いたという。

部落そのものが山肌に貼り付くように広がっており、山川などの街へ出るのにいささか不便である点は否めないこと、またこの部落の就業形態が必ずしも先行きが明るいとはいえない専業農家中心（インゲン、ピーマン、菜の花など）であることなどから、近年も住民の流出（山川等へ）が漸次的に進んでおり、その意味で接待活動の継続も部落そのものの存続と切り離せないといえよう。

④ 板野町高樹

徳島県板野町の三番札所金泉寺近くに、高樹という地区がある。ちょうど、旧吉野川に宮川内谷川と松谷川が合流する地点に位置し、四方を川によって四角く囲まれている。3番から4番へ向かう遍路道からおよそ1キロほど南に外れた辺りである。住民の多くはこの地区にある宝巖寺の檀家となっているが、この地区の老人会の有志活動として現在、接待が行われている。

年に一回、旧3月21日（新暦で4月中ごろ）に、三番の金泉寺境内で巾着を巡拝者に接待している。現在、これは老人会の年中活動のひとつとなっているが、全員参加の公式行事というより、5～6名の有志を中心に営まれている性格のものである。接待品の巾着には通常、五円玉を入れるが、お手玉3つを入れることもあった。巾着作りは、中心メンバーの5人が、布団の布切れなどを用いて各自の負担で行い、五円玉も各自が貯めておいたものを使用する。

発起人は、宝巖寺の現在の住職の母親Aさんであり、開始時期に関しては曖昧であるが、Aさんの記憶では戦後十年ほど経ったときではないかという話である。Aさんは、昭和3年にこの村に嫁いできたが、もともと17番井戸寺ちかくの地域の出身である。子供のころ、祖母に連れられて毎月五ヶ寺詣り（13番から17番まで）した際に、接待の習俗に親しんだという。高樹に嫁いだ後、戦中、戦後とお接待が衰退してしまったのを見るにつけ、自らが接待を行うことを発起する。ちょうどその頃、近所の玩具屋の作業場が閉鎖し、大量に余った布が手に入る好都合も重なり、巾着接待を始めることとなった。発端時には二人で始めたそうだが、すぐに四人で活動するようになり、長い間この個人的な有志活動として続けられてきた。10年ほど前、老人会のほうから接待を会の活動としたい旨の提案があり、それを機に発起者は高齢もあって引退した。以来、老人会メンバーの有志活動として続けられている。

老人会の活動となった後、今から6～7年前に、参加者の一人が活動の中止を提案したときがあったという。しかし当の提案者が身体をこわすという事態が起り、そのときお大師様の力を参加者が強く感じることになり、この靈験がその後の活動継続への意味付けをより強いものとしたようである。今では、接待活動は参加者の生活の一部となっているという。巾着づくりは、とくに日を定めて共同制作することではなく、各自が一年を通じて、

日常の空いた時間を適宜つくって少しずつ行っている。接待に必要とされる五円玉の収集も、日常的に各自が少しずつ貯めているという。それだけ日常生活のなかに接待活動が自然な形で根付いているといえよう。今後も活動形態の変更の予定はなく、このまま続けていきたいと言っていた。

(4) 個人接待

① 土佐泊のトコロテン接待

鳴門の土佐泊から年に一回やってきて、2番境内（まれに1番）でトコロテン接待を行っているグループがある。毎年春の5月（まれに6月）、山門の下で、トコロテンと芋料理を巡拝者に接待する。活動の中心となっているのは、発起人のS氏と奥さんであるが、ほかに娘さん、PTAの知り合い、趣味の知り合いなどの有志5～6人によって活動が営まれており、その活動体制は個人的な類型に分類されよう。毎年、300食ほど接待しており、基本的にトコロテンと芋料理の原料から自前で調達している点に特徴がある。トコロテンの原料の天草はS氏自ら採取し、また芋は近所の農家から二級品を分けて貰い、それらを自分たちで調理しているそうだ。このように低予算に抑えた接待を心がけているのは、「お金をかけて接待するなら誰でもできるから、そうではなく自然体でできる接待が大事である」というS氏の考え方による。

鳴門から来る接待グループは、通常もっとも近い1番で接待するケースが多い。しかしこのグループが2番札所を中心として選んだのは、宗教的・歴史的経緯というより、その接待活動上の利便性による。遍路以外の観光客が多く訪れる1番札所の混雑を避け、山門下まで直に軽トラックを乗り付けることが可能であり、なおかつ接待スペースが広く確保できる2番札所の利点を利用しているといえよう。

S氏によれば、接待活動の開始時期は、約20年ほど前であるという。自身が、30年ほど前に遍路し、そのときの経験が強いきっかけとなり、遍路への接待を思い立ったという。トコロテンは、鳴門という土地柄、子供の頃からおやつ代わりによく食っていた経験があり、接待活動を始めるにあたって、「食べ物は基本であり、自然のものが一番である」というS氏の考え方から、トコロテン接待へと至ったという。そのため、接待を受けた人びとから「懐かしい」、「美味しい」、あるいは「はじめて食べました」という感想を貰うのがとりわけ嬉しいという。

② 7番札所から8番札所への遍路道沿いの個人接待 ①

7番札所十楽寺から8番札所熊谷寺への遍路道は、車がやっと通れる細い道を行く。道沿いには住宅がすぐ脇まで軒先を並べており、遍路道との共有空間を感じられる雰囲気があ

る。この道路脇で、個人的に接待を行っている人がいる。国道 318 号線を超えて、しばらく西へ進んだところに小さな商店を構える M さんは、毎年、春に集団で徒歩巡礼を行っている一行に、リンゴジュースなどを接待している。

毎年、春（3 月など）になると、へんろみち保存協会の歩き遍路一行 40～50 人が、M さん宅前の遍路道を通る。あらかじめ、手紙によって何月何日の何時頃に M さん宅前に至るかの連絡を受けており、一行が来ると、遍路道脇で紙パックのリンゴジュース、コーヒーなどを接待して食して貰う。最初の頃は遍路各々へ百円接待していたという。また平成 11 年には、その一行の遍路行がその年で最後になるということで、手作りまんじゅうも接待していた。またこの一行とは別に、4～5 年前まで、名古屋から来る大型バス遍路一行（約 40 人）にも接待していたという。

接待を始めた発端は、M さんのおじに当たる 7 番札所前住職のつてからへんろみち保存協会との関係ができたのがきっかけとなった。以来、10 年間、その一行に毎年接待し続けている。また名古屋から毎年来ていた遍路一行の場合、近所の三木元首相宅にある人が訪れ、その関係でその人と知り合ったのがきっかけで、その人の属する遍路グループが毎年、M さん宅に立ち寄るようになったのだという。

へんろみち保存協会の歩き遍路ツアーが平成 11 年で最後であるということで、いったん接待活動は打ち切りになる見通しである。

③ 7 番札所から 8 番札所への遍路道沿いの個人接待 ②

M さん宅の前の遍路道をさらに 8 番札所へ向かって西へ進むと、やがて 8 番札所から下りてきた道と交叉する地点に出る。その遍路道沿いで、同じように個人的に接待を行っている人がいる。Y さんは、毎年、M さんと同じくへんろみち保存協会の一行に接待を行っている。また他に、毎年 5 月中旬になると、近所の人とともに近くの 8 番札所境内で一般の遍路に接待を行っている。

M さんの場合と同じく、毎年へんろみち保存協会から連絡があり、3 月下旬になると遍路途中の一行が Y さん宅に立ち寄る。Y さんは自宅の庭先や自宅倉庫内で、遍路たちを歓待し、ぜんざい、小豆、沢庵、炒り子、イチゴ、つるし柿、藁草履、蜜柑、菓子セット（キャラメル、都昆布、キャラメルコーンなど）などを食して貰う。接待活動は、Y さんを中心に、近所の人が 4～5 人で行われる。平成 11 年の場合は、遍路の人たちが食事しやすいように、近所の人たちで、接待用のテーブル、腰掛け、テーブルカバーを作って調達していた。他方、毎年 5 月 15 日頃に行われる 8 番札所境内内での接待活動の場合は、Y さんを中心に 3～4 人で、8～9 年ほど前から、札所に立ち寄る一般遍路にたいして、お茶やお茶菓子（氷砂糖）を接待している。

Y さん自身、信仰心が強く、今まで 3 回ほど 88 ヶ所巡りしたが、平成 4 年に脚を痛めたことがきっかけで、接待を始めたという。

(5) 善根宿

① 土成町の善根宿

8 番札所から歩き遍路道を下っていく途中、あと 7、8 百メートルで 9 番札所法輪寺に至るところの道沿いで長い間、歩き遍路のための善根宿を営んでいる家がある。現在 86 歳の S さんと娘さんは、月に平均 5~6 人の歩き遍路の人にたいして宿泊や食事その他の接待活動を行っている。その活動内容は、善根宿として宿泊、食事の提供にとどまらず、洗濯、入浴、さらには宿泊者の弁当をつくることまでであるという。とはいえ、何か特別なことをしているのではなく、長く続けるために逆に「無理することなく、できることをする」ことを信条としている。

現在では、S さんが高齢のため、主に宿泊者の世話は娘さんが中心となっている。歩き遍路道のすぐ脇であるという地理的条件を生かし、歩き遍路中の巡拝者を見かけると絶えず声を積極的に掛けるようにしており、それが善根宿を持続させてきた大きな要因のひとつであろう。

その活動開始は古く、現在 86 歳の S さんが 21~2 歳の頃、つまり昭和 10 年頃に遡る。善根宿が戦争期を挟みながらも持続されてきたのには、S さんの強い大師信仰に依拠する部分が多い。同時に善根宿の運営にあたっての気負いのなさも大きく働いてきた要因であろう。「特に、してあげるとい意識も、接待させていただくという気負いもない」と述べており、接待することが日々の修行であるという意味付けが強固に根付いている。

② 神山町の善根宿

11 番札所から 12 番札所の焼山寺に車で向かう場合、直接南下していく歩き遍路道とは異なり、いったん鮎喰川沿いの県道 20 号線に出てから国道 438 号沿いの神山町中心街を歩いて焼山寺に向かう。その国道に出る 2~3 キロ手前の、県道沿いの鮎喰川のすぐ脇で善根宿を営んでいる人がいる。善根宿を経営する K 氏 (73 歳) によれば、年間約百名ほどの遍路が利用しているという²²。

この善根宿の特徴は、宿泊する遍路専用の小屋が自宅とは別に設けられている点である。小屋は 4 人収容と 2 人収容の二つあり、寝具、風呂 (五右衛門風呂)、手洗が備え付けられている。おもに男性遍路は小屋、女性の場合は自宅をを利用して貰うという。以前は小屋は双方とも開錠されていたが、数年前に泥棒の被害に遭ったため今では 4 人小屋のほうは

²² K 氏に関しては、これまでも新聞等で何度か紹介されている。『四国八十八ヶ所 こころの旅 1 発心の道場』(NHK、107 頁~)、愛媛新聞 (平成 11 年 2 月 12 日) などを参照。

施錠している。なお K 氏不在のときのために、2 人小屋のほうは常に自由に利用可能な状態にしている。K 氏は、年間 70 ほどの数珠を自主制作し、宿泊者のうち数珠符不所持者に接待している。その他、善根宿経営そのものとは別に、年に 1~2 回ほど、善根宿のかつての宿泊者に頼まれて遍路引率を行っている。

善根宿経営を開始は、10 年ほど前に 65 歳で徳島市内の会社勤務を定年退職し、神山の実家に戻ってきたことがきっかけとなっている。地元でホテル勤務をしながら、善根宿の経営を始める。このように K 氏が善根宿を開始する背景には、幼少時からの彼の半生が大きく影響している。K 氏の遍路原風景には、幼少期に両親が街道沿いで遍路接待（宿泊、食事等）を行っていたことが深く影響している。その後、15 歳のとき戦争時に中国東北部に進軍、シベリア収容所抑留を経験する中で、食糧の貧困さと仲間の死を体験する。そのとき、「元気で帰国でき、四国へ遍路に来たら、腹いっぱい食わせてやるからな」と友に語ったのがずっと心の底にあったという。自身としては、妻が亡くなったことをきっかけとして昭和 56 年から位牌とともに 3 回 88 ヶ所巡礼を体験する。その遍路中に靈験を経験することになる。

したがって、幼少期の接待を通じた遍路経験が K 氏の四国巡礼にたいする意味付けの核となり、その後の半生のさまざまな経験によって強化され、退職や実家への帰還などが物理的きっかけとなって善根宿という形に結実したといえよう。

【参考文献・資料】

- ・ 前田卓 『巡礼の社会学』（関西大学経済・政治研究所、1970 年）
- ・ 『生活研究レポート 9 農家、農村における慣習及び慣行の変化に関する研究』（農村生活総合研究センター、昭和 55 年）
- ・ 湯浅良幸・岡島隆夫編『阿波の民俗 1 年中行事』（徳島市立図書館、昭和 61 年）
- ・ 『有田市誌』（有田市、昭和 49 年）
- ・ 『吉備町誌』（吉備町、昭和 55 年）
- ・ 『金屋町誌 下巻』（金屋町、昭和 48 年）
- ・ 『広川町誌 下巻』（広川町、昭和 49 年）
- ・ 畑口嘉一郎 「野上接待講と遍路」『美里町 町制施行 30 周年記念出版 美里ななくさ』（美里町、昭和 62 年）
- ・ 「鳴門地区農漁家グループ協議会平成 10 年度総会資料」
- ・ 「平成 10 年度鳴門地区農村振興グループ連絡協議会総会資料」
- ・ 「21 世紀農村グループ活動展開事業実施要領」
- ・ 上坂日曜市組合発行のチラシ
- ・ 上坂町「技の館」発行のパンフレット
- ・ 阿波鳴門里浦漁業組合発行のパンフレット

- ・ 『ひまわり広報』(JA 松島高齢者部会)
- ・ 新田文子「心が洗われた初の“お接待”」『徳島新聞』(1998年4月3日)

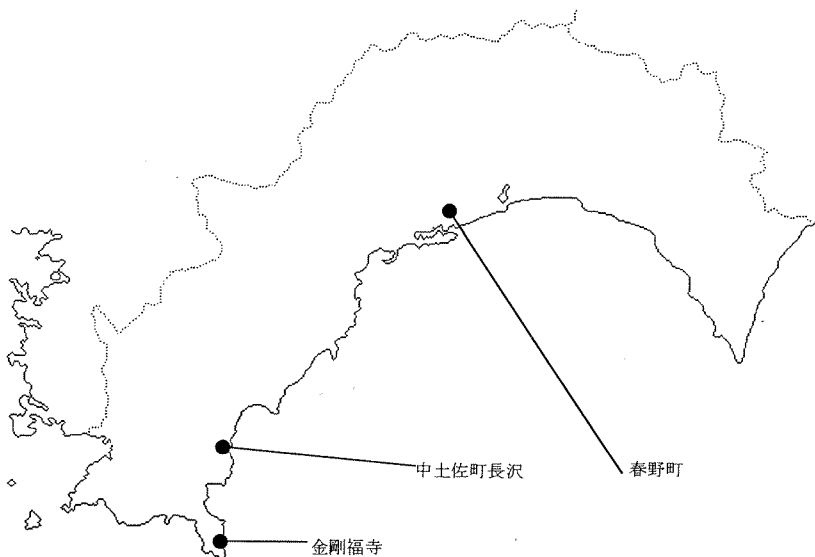
3. 高知県における遍路道沿道習俗—「お接待」を中心として—

鈴木 無二

この調査の目的は、お接待の現状と、過去のお接待に関する情報を、主としてインタビューを通じて収集することである。

高知県内におけるお接待に関する調査は、今回は1998年3月、1999年3月、12月の3回にわたって行われた。調査地は高知市以西、一回目は中土佐町、中村市近辺、二回目は春野町、そして3回目は足摺岬であり、札所でいえば34番種間寺から39番延光寺までの札所および遍路道周辺の地域にあたる。

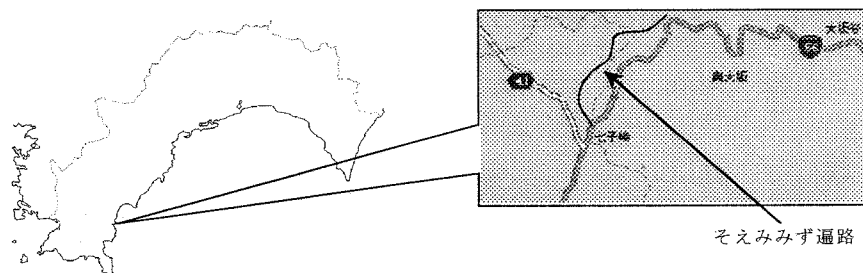
ヒアリングは、各カ所で1時間から2時間ほど直接面接にて実施した。概ね、調査者側2人に対し対象者1人という形だったが、場合により、2人对2人になることがあった。対象者はヒアリングがら聞き出した次のインフォーマントに当たるという「雪だるま抽出法(snow-balling method)」および、代表的な寺院にあたるという「典型法(typical method)」の併用である。特に調査票などは用意せず、インフォーマントには現在および過去のお接待の事例についての調査ということとを告げ、後は自由会話形式によって進めた。インフォーマントの自由な語りを促し、それを阻害しないよう勤め、こちらからの質問内容についてもインフォーマントの話の文脈に応じて臨機応変におこなった。



(1) 中土佐町長沢部落—そえみみず遍路道の「草刈り奉仕」—

中土佐町長沢地区には、そえみみず遍路道という徒歩遍路しか通行できない山道がある。これについては、へんろみち保存協会編『空海の史跡を尋ねて 四国遍路ひとり歩き同行二人 [別冊]』に「そえみみず遍路道は、土佐中央と南西部を結ぶ往還として古くから人馬でにぎわって来た。遍路先人達も皆この道を辿って行った。当会ではこの道を復元し、今後遍路道修行のシンボルコースとして位置づけ毎年八月末～九月初旬の間に草刈り行事を企画、布施修行の場とすることにした」という記述がある (p. 125)。このような遍路道周辺の草刈りをするという行事は、遍路者の便に供するという点で、「お接待」と捉えることができる。当地を調査対象地として選定した第一の理由はそこにある。

まず中土佐町役場で、ご自身が長沢地区在住で草刈り奉仕の経験があるという、人権対策室長の林勇作氏にヒアリング調査をおこなった。林氏によれば、そえみみずは、明治25年にそえみみずの南に中土佐町中心部から七子峠に抜ける道(現国道56号線)が開通するまでは重要な幹線路で、道沿いには「海月庵」という茶屋もあったという。が、新道ができて以降は人の往来が途絶え、道としての機能を足さなくなった。再び道として、主として徒歩遍路者が通行するようになるのは、「草刈り奉仕」が長沢地区の住民によってなされるようになってからのことである。



この「草刈り奉仕」は、10年ほど前から始められたということであるが、参加するのは、同地区の年寄り主体で、参加メンバーの顔ぶれは、あまり変わらない。調査年である1998年には、10名ほどの参加であった。

「草刈り奉仕」という行事が始められたきっかけについては、同地区在住の奥代初子氏より、「宮崎建樹さんがね、添え蚯蚓という道を夏の暑いときに一週間かけて、平成元年が二年ごろだったかと思いますけど、修復してくれました。・・・それ以降年一回九月に草刈りをしています」との説明を受けた。

前掲の引用にあるとおり、「遍路道保存協会」の主催者であり、遍路者のための道しるべの設置をはじめ、遍路習俗の保存と活性化にさまざまなかたちで尽力している宮崎建樹氏がこの「草刈り奉仕」の企画者であったことが確認された。このように、比較的最近になってから共同体単位で行われるようになったお接待というのは、極めて珍しい事例といえるのではないだろうか。

徒歩遍路者へのお接待

奥代初子氏は、これとは別に、そえみみず遍路道を通る遍路者に個人的に接待をしているという。

耳がきかんからね、ここにおるときはね、お鈴がなったりしたときはね、この人がほらはっちゃんお遍路さんてゆうてくれて、走って行って、山に上がるまでに、なんとかおへんろさんお遍路さんって呼んでね。おみかけしたときだけですけれどね、お接待をね、させていただいております。お接待したらお礼をくれる方もあります。礼状、写真、いろいろ頂いています。方々の方にお目にかかれるけにね、あたしが出ていってお目にかかるということはないけれど、それだけでも言葉をかけたらいろんな方が、お話をしてくれたり、手紙をくれたりしてくれます。……家族ぐるみで、家族は直接はせんけど、お遍路さんが通ると携帯電話で知らせて、ジュースとか、一口二口食べるものをあげます。

(奥代初子氏、1998年8月20日、於久礼町長沢)

そえみみず遍路道は既述のように徒歩遍路専用の道であり、ここでのお接待は、徒歩遍路者にのみなされるものである。この事例が象徴的に示しているが、徒歩遍路者には、このような途上でのお接待に遭遇する可能性が車遍路に比べ相対的に高いものと思われる。この事例にみられる飲み物や食べ物をはじめとする物品供与というお接待の他に、金銭面においても、徒歩遍路者に特別のお接待というものがある。たとえば今回の調査で訪れた39番延光寺の門前の民宿「へんくつや」では、一泊の宿泊料が、車遍路は5000円だが徒歩遍路は4000円ということになっている。理由は「歩きの人は金がかかるから」ということである。

奥代氏の「方々の方にお目にかかれるけにね、あたしが出ていってお目にかかるということはないけれど」という中には、お接待の中に異郷の見知らぬ人との交流の契機が含まれているということの意味する。また「へんくつや」の例には、徒歩遍路者のふところへの配慮が見られる。これらが示しているように、現在のお接待は主として善意としてサービスの意味合いが濃く、過去のお接待に見られた「施し」的な意味合いは薄れ、その行為をたたえるか、あるいは交流の契機としてのお接待が主流であるように思われる。特に徒歩遍路の方がその恩恵に預かる機会が多いというのも頷けることである。

①お接待の減少

逆に車遍路は、寺で待ちかまえているお接待に巡り会うことはあっても、寺院から寺院への移動が車中である故、当然ながら、道中での思いがけぬ接待に会うという機会が少ない。以下は足摺岬にある38番金剛福寺の住職、長崎勝敬氏の話である。

いまは車道路が整備されて、お接待の機会がない。バス会社が募集して連れてくる。巡る。全部バスの中。道中の経験が全然ない。お接待を頂いたり、道を教えて頂いたり、山を上ったり下ったりしているとお接待が身にしみてわかる。人の心のありがたさがたまらんほどうれしい。そういう経験が今のお遍路さんにはない。

(38 番金剛福寺住職、長崎勝敬氏、1999 年 12 月 3 日 於足摺)

なお、「徒歩中心の遍路者は、車などの移動媒体を中心に利用する遍路と比べて、総体的に接待経験が圧倒的に豊富である」という点については、「四国遍路と遍路道に関する意識調査」でも実証されている。

車遍路の増加という、この点がお接待自体が減少している原因の第一としてしばしば取りざたされるものである。しかしお接待という慣習の減少の理由を、それを受ける側の变化、すなわち車遍路の増加という傾向にのみならず、お接待をする側の变化、すなわち過疎化という傾向に帰させる見方もある。観光名所でもある足摺岬周辺では、次のような事情である。

今は、バブル期以降若者がいなくなった。後に残る人も働きに出ないと喰えない。家の中にじっとしている人がいない。この付近では旅館とかホテルで働く。高校へいく、大学へいく、田舎に帰ってこない。田舎が寂れた。土佐清水でも市制を引いたときには 33000~34000 人くらいの人口があった。それが今 20000 切れている。市といっても村や町とおなじ。

(長崎勝敬氏、同上)

(2) 高知県におけるお接待の現状

しかしながら、高知県という単位で考えた場合、奥代氏のような例がある一方で、「へんくつや」の植村ハツエ氏によれば「ここらでお接待を大びらにやる所はない」のだという(植村ハツエ氏、1999 年 12 月 3 日、於宿毛市平田町中山)。実際、今回の調査地区、35 番青龍寺、36 番清滝寺、38 番金剛福寺での納経所、および周辺でのヒアリングでも異口同音の答えであり、お接待の事例を確認することができなかった。

長崎勝敬氏もまた、高知がお接待の少ないところだという見方をもっており、その理由を次のように語る。

接待の多いところは愛媛、徳島、香川。高知は接待が少ない。

藩主が信仰あれば、岡山、広島、北陸、北九州、和歌山、愛知、こういうところは藩主が相当仏閣を大事にしてきた。藩主の信仰の度合いによって、空気ができる。それからもう一つは土佐の気候。晴天に恵まれて前は太平洋。明るい。かと思うと台風のとときには荒らしていく。雨の振り方も激しい。風の吹き方も。こういう気候によるのではないか。比較的土佐人は信仰心が低いし、深刻に考えない性格。死にたいしてあっさりしてる。私は戦地で、そこには土佐の徳島の者、岡山、広島、その中で一番あっさりしているのは土佐の人間。執着をもたない。おそれを知らないと言うわけではないが腹の座りが早い。だから信仰とかが少ない。昔の漁師はいつ死ぬかわからない。

一番少ないところは高知市の中心部だろう。

(長崎勝敬氏、同上)

(3) 春野町根木谷部落—種間寺でのお接待—

長沢地区の「草刈り奉仕」は、比較的最近になってはじめられた、集团的、共同体レベルでのお接待であったが、この他に、一定の歴史を持ちつつ現在も続いているというお接待がある。土佐の民俗に詳しい坂本正夫氏から次のような教示を得ている。

いわゆるお接待をやってるのは最近少なくなっただけ、高知県では一カ所だけ、春野町というところの種間寺という札所のすぐ近くに根木谷で毎年3月21日に一回だけやってます。それと香川県で一カ所、普通寺の近くでやるだけです。今やるのは、種間寺と根木谷とは7~800メートル離れてますが、40戸くらいの集落で、村落共同体として皆を集めてやってます。以前は3月21日を中心としてやってましたが、それ以外の時期は講とか村落共同体でやるのではなくて、個人でやるのはありません。

四国山中、高知県でいえば禰原町というようなところでは、お茶堂という、中世の絵巻物そっくりのお堂がありましてね、吹き抜けの、今も7~80ぐらいありますが、そこで夏の今の盆時期にお接待をやります。それが今は一月やらなくなった。禰原町の茶屋谷というところともう一カ所、ありますが。

(坂本正夫氏、1998年8月19日、於高知市)

「お茶堂」については坂本氏の他、高知歴史民俗資料館、38番金剛福寺副住職からも同様の教示を受けたが、今回の調査では日程その他の都合上、話を聞きに行くことができなかった。根木谷部落ではヒアリング調査を行っている。根木谷部落は、高知県春野町、34番「種間寺」近くのおよそ30軒からなる部落である。高知県歴史民俗資料館からの紹介で、このお接待の中心的役割を果たしている小川真喜子さんによれば、年一回、年中行事的に種間寺境内にて行われるお接待があるという。

いっつもねお彼岸前後にするんですよ。ほんとはね昔は潮いましてね、旧暦の三月三日、旧暦の三月三日ということは雛祭りですね。その明るる日がしおいまして大潮なんですよ、大潮の時にお接待をするんですよ。で、休みの日に、人に自分の幸せを分けるために、お遍路さんに。

(小川真喜子氏、1998年3月21日、於春日町西根木谷)

現在では、お彼岸や農作業で忙しいので、日程を調整しておこなうとのことである。調査年の99年は4月上旬に行われた。種間寺の境内で幟をたて、お茶、甘酒、ぜんざいなどをお接待するという。また38番金剛福寺副住職の話では、当寺においても、やはり旧暦3月21日に、近隣の人々が餅や飲み物を用意して遍路者を迎えるそうである。年一回春に集落単位で行うお接待はイベント性の高い行事であるといえる。

なお、現地調査終了後であったが、39番延光寺でのお接待について、次のような新聞記事からの情報を得た。

「お遍路さんにお茶やあめ湯などサービス 四電が宿毛・延光寺で」

お遍路さんに旅の疲れをいやしてもらおうと、四国電力宿毛営業所は29日、宿毛市平田町中山の四国霊場39番札所・延光寺で、お茶などを振る舞った。

「よんでんルネッサンス<ふれあい旬間>」活動の一環で今年で3回目。同寺の庭先にテントを張り、6人の職員が朝早くから次々に訪れるお遍路さんたちに、温かいお茶やコーヒー、あめ湯をサービスした。

参拝客らは地元で作られた魚の干物や、菓子を口にしながら、「土佐清水市の金剛福寺には、どれくらいかかりますか」「どちらからおいでですか」などとそれぞれに会話。しばし休憩した後、「とてもおいしかった」と、お礼を言いながら次の目的地に向かった。

(高知新聞 1995年10月30日付 朝刊 19頁)

「延光寺参拝客をお茶などで接待 四電宿毛営業所」

四国電力宿毛営業所(久保勝彦所長)は27日、宿毛市平田町中山の四国霊場39番札所・延光寺で、参拝客にお茶などを振る舞った。

同社の「ふれあい旬間」活動の一環。寺の庭先にテントを設け、10人の所員が訪れる参拝客にしょうが湯などをサービスした。県外からの長旅が続くお遍路さんたちは疲れをいやしながらしばし休憩。「ありがとう。おいしかったですよ」と笑顔で次の札所を目指した。

(高知新聞 1996年10月29日付 朝刊 19頁)

1995年の時点で3年目ということなので、1993年から、少なくとも1996年までは行われていたことになる。「ふれあい旬間」活動とは何か、現在も続いているのか、等の点について、残念ながら今回の調査では確認することができなかった。が、これは共同体単位のお接待、個人単位のお接待の他、おそらくは現代において特徴的なものと思われる「事業体単位での接待」として位置づけられうるものであり、今後の調査の課題となる。

(4) 過去の遍路者、およびお接待について

今回の調査では、過去の遍路道や遍路者、お接待の様子についてもヒアリングを行っている。

長崎勝敬氏はご自身が、戦友を供養するために、戦後徒歩で88カ所をまわった。

岩本寺から、今では二日くらい、昔は三日から四日。足摺に来るのは、崖をあがったり、枝を持って海岸に降りたり、昔の遍路道は山の中にあった。今でもあるにはある。今でも通れないことはない。私が歩いたときは山の中で炎天下で山の水を飲み山の中で昼寝をして、松茸なんかが生えていて、飯ごうでご飯炊いて。55日かかったから、苦労もするけれどありがたさも倍しみる。昔の遍路さんが足摺にお参りに来て仁王門のところで座り込んで泣いている人何人もいた、うれしくて。本道の両脇は腰

掛けになっていて、疲れた人は腰掛けに座っておがんでいた。今はみな上に飛び上がってくる。ずいぶん違う。

(長崎勝敬氏、同上)

「ずいぶん違う」のはしかし、昨今の車遍路との身体的労苦という点での対比にとどまらない。小川真喜子氏は、過去の遍路者と現代の遍路者の違いを次のよう語る。

絶対に美しいものじゃなかった。それがね、本当にみじめな、みじめというより言いがたい。家を捨てた人なんかやら、働きのない人もいるでしょうし、そら千差万別ですからね。事情があってふるさと捨てた人がほとんどでしょうけれどね。そりゃもう、働かん人はズルズルとね。それで、あの、今みたいに、お遍路まわるっていつてバスで、きれいに着物着て白衣を着てね。そして、お金をたくさん持ってね。年寄りが、そして行くような遍路を考えたら、全然違うんですよ。

(小川真喜子氏、同上)

単に身体的労苦のみならず、遍路者の身なり、身の上、そうしたものをトータルに捉えた上で、「全然違う」ということであろう。

もとより、遍路の歴史を語るとき、看過し得ないのが「乞食遍路」「病人遍路」であることは、ことここに改めて再説するまでもないことである。四国遍路は、信仰や修行、あるいは行楽の対象であるばかりでなく、こうした過酷な素性にあるものの行き着く場所でもあった。長沢地区の浜田秀夫氏は、「生活が成り立たない、不治の病、お医者にかかることが出来ない、看取ってくれる若い人もいない、行けるところまでいって果てる」という、こうした四国遍路のあり方を、「昔の福祉」であると表現した(浜田秀夫氏、1998年8月20日、於久礼町長沢)。

小川真喜子氏は、こうした遍路者へのお接待の様子を以下のように述懐する。

あのね、昔はね、乞食遍路が多くありましてね、そういう、終生まわる人が、やら世を捨てた人、いろんな事情は全部違うんですけどね。……、私なんか小さいときにはね、今のように私らみたいに、ごちそう作って持って行くんじゃないかなってんですよ、昔の接待は。お遍路さんが門にたつ。……そしたら子供がね、お椀を持ってね、すくってね、山野袋に入れるんですよ、これが子供の仕事なんですよ。——何をですか。

米櫃から、米をすくう。お芋が焼けてるときはお芋もっていくしね。そういう風にしてね。それが昔の、お遍路への接待だったんですよ。

(小川真喜子氏、同上)

しかし、乞食や病人といった、通常であれば忌み嫌われるような存在にまで、なぜ四国の人々は、このように手厚くお接待をしたのであろうか。そのヒントとなるような言明が、坂本正夫氏のインタビューの中にある。

「へんろ」というのは最近のことで、昔は「へんど」といってたんですね。で「へんど」というのは乞食と同義語ですね。それぐらい以前は乞食遍路が多かったということですけど、巡礼といういいかたは、秩父や西国でもいうけれど、遍路というのは四国だけで、ここにまた四国遍路の特徴があるわけです。乞食というと今では変な意味ですけど、幕末から明治のはじめの頃を画期として、乞食に対する日本人の考え方が変わるわけですね。それまでは乞食というのは宗教者の、ものもらいをしてまわっていくのというあれで、ある意味では敬意を表すべきものでもあったわけです。（坂本正夫氏、同上）

こうした、仏教教義における乞食（こつじき）の発想が、現実に行われてきたお接待という行為のうちに生きていたのかどうかは定かではないが、あるいはこれと通底するであろう観念として、遍路者は御大師様である、という考え方が古くから四国にはある。そしてお接待も、一般にはこの文脈に沿って解釈されるようである。すなわち遍路者へのお接待は、御大師様へのお布施に他ならないのである。

お接待するということは、自分の身代わりに行っているお遍路さんにお接待するわけですから。・・・喜捨をあげなければいけないんですよ、仏様には。絶対に喜捨をあげなければいけない、喜捨は要求されんであげるもんですからね。それで、お接待もそういわけなんですよ。結局はね。自分の身代わりとして、その方に託すわけなんですからね。その方はお四国へ行きよるわけだから、結局御大師様であるから、お遍路さんは御大師様であるから。・・・お遍路さんが門にたつ。これはね、私の母なんかはね、遍路が門にたつということはね、御大師様が門に立つというような言葉になる。お遍路さんとは呼ばない。

（小川真喜子氏、同上）

金剛福寺の長崎勝敬住職も同様に、自らの体験を踏まえつつ次のように語る。

遍路は身なりはきれいではないが、遍路は大師さんという信仰が根底にあった。私の体験では愛媛県を歩いているとき、向こうからおばあさんが歩いてきて、私に手を合わせていった。御大師さんという信仰がある。お接待をすることは御大師さんに奉仕するという気持ちがあった。

（長崎勝敬氏、同上）

接待者は、ただ単に遍路者に出会ったときにお接待をするということばかりではない。また遍路者は、接待者との偶然的の出会いをただ待つだけではない。そこにはある一定の取り決めのようなものがあり、その取り決めのもとで行われていたお接待もある。たとえば先述したように、春野町や足摺では3月21日のお彼岸の日のお接待が今なお行われているのだが、こうしたお接待というのは、須崎市においても以前には行われていた（現在でも行われているかどうかは未調査）。

私は須崎市のあわというところの出身で、家が真言宗で、うちの村を通るお遍路さんに、父やら祖父やらが、3月21、22日にヨモギもちをつくって、お接待をしよりました。お遍路さんはなんかこう尊いというか、捨てきれんような気持ちになったもんですね。

(奥代初子氏、同上)

他に、親族の命日に、その供養としてお接待をするという場合がある。

私は7、8年前に愛媛県のある町の調査にいて民宿みたいなところに泊まったんですが、朝になったらお金いらんんだというので、よくよくきいてみたら、今日はたまたま自分の子供の命日だからいらんんだと、まあこれは一種のお接待で、そんなようなこともあります。私は無意識のうちに二回、善根宿でお接待受けてるんです。お接待だということは後でわかる。

(坂本正夫氏、同上)

漁師はみんな善根の気持ちがあった。命日とか法事のときには通る遍路に寿司をあげた。泊めた。

(長崎勝敬氏、同上)

遍路者へのお接待は、ただその眼前に居る遍路者への施しであるのみならず、御大師様への奉仕でもあり、同時にそれは、縁者や先祖に対する供養でもあるわけである。

また、現在ではもうほとんど絶えてしまっているようだが、かつては遍路者には課された行があり、この行によって「布施」という形で何らかのものを供されるということがあった。

一心になって、四国霊場まわる方は、一日七軒の御修行をしなきゃいけないということになっていて、門にたって般若さんあげてね、うちのまえにきてくれたら必ずね、手でこうやって握ったり、お皿にすくったりしてね、山野袋に入れたりしました。百姓はお米しかないですわね。てっとりばやいですね。

(奥代初子氏、同上)

修行の人は金持っている人でも、一日に七軒の家の門に立ち、般若心経をあげて先祖の供養。一家の安全を願った。家の人は一握り小皿に米をいれ遍路にあげた。昔は留守がなかった。それをやると次の村で同じことをする。それをやると、お接待でその日のご飯が食べられた。お米が多すぎる時は金に交換した。一升いくらというのは決まっていた。もらうのはお米とか、お金。

(長崎勝敬氏、同上)

過去の共同体単位、あるいは組織的なお接待については、体験談的な話は残念ながら今回、ほとんど収集することができなかったが、史実的な情報としては坂本氏から、共同体にお

ける、遍路者への宿の提供に関する取り決めについての話を伺うことができた。

「お日待宿」という、昔村落で公的行事をするときに使う民家ですが、座敷が 8 畳敷のある家です。「遍路宿」というのは、それより少し小さくて 6 畳敷の家です。村の公的なこととか、飲み食い、会議、これは「お日待宿」でやってこれは順繰りにまわっていくわけです。今年わたしの家でやったら次はどこかという具合に。「遍路宿」というのは、昔は民宿なんてなかったわけですから、遍路をはじめとする職人とか、いろんなひとが外部から入ってくるわけですね。それを順番に泊めていく。そういう制度のあるところはずいぶんありましたがね。

宮本常一さんなんかの本を読むと、徳島なんかでは「総代付き」という言葉があります。総代というのは部落長とか区長の意味です。村外の人が旅して、そこへ行って、泊まる場所がないなんていったら、「総代さんのところへ行って来れ」といわれる。それで総代さんのところにいったら、帳面があって、前回の時にはこの家に泊まったから、今度はこの家に入ってくださいという。これを「総代付き」といいます。総代が管理するということですね。

四国の遍路道では、この辺でいえば隣の須崎市のあわというところでは、ものすごく遍路の行き倒れが、大正時代にもあったわけですけど、それを、今度は順番に世話をします。いまでは村とか地方公共団体がありますけどね。

(坂本正夫氏、同上)

(5)まとめ

以上のように、今回の三回にわたる調査では、高知県西部におけるお接待の現状、および、必ずしも高知県西部に関するものばかりではないが、過去の遍路者ならびにお接待に関する「語り」という形での一次データを一定量収集することができた。中には、遍路研究や遍路史研究において定説化している情報もあるが、それが今日なお、在地の人々の語りの中に再生されていることが確認されたという点で、これらは新たな意義を持つものといえる。また特に、現代における共同体単位でのお接待や、インフォーマント本人の体験として語られたものは、貴重なデータとして今後の分析を待つことになる。

また、本稿では言及し得なかったが、中村市を通る旧遍路道について、澤田勝行氏より(1998年8月21日、於中村市)、またかつての遍路宿の状況について、四万十川沿いで先代と先々代が遍路宿を営んでいたという宮崎健氏から話を伺っている(1998年8月21日、於中村市)。これらについては稿を改めて言及する予定でいる。

定期的 随時
個人的 集团的

親切としてのお接待、交流のきっかけとしてのお接待、エールを送るという意味でのお接待、いわゆる善意のお接待に対する遍路者の感謝の意は、「四国遍路と遍路道に関する意識調査」の自由記述回答においてみられる。

- * (不明、不明) 軽自動車運転の人40歳～60歳徳島ナンバーの人は先方よりお乗りなさいと言葉を掛けてもらい感謝し同乗させていただいた。
- * (男73) 地図を頼りに走っていますが、良く四国の皆様に道を聞きますが親切に教えて戴き有難く思っています。四国の人に栄あれ。
- * (男63) 各寺院の金取り主義的運営が目立ち、巡礼者に奉仕する姿勢がなく失望した。通りすがりの人々の方がよほど親切であった。
- * (男、不明) 今までお逢いした徳島の人達は大変親切で良い思い出となってここまで歩いてまいりました。(道に迷う事なく)
- * (女57) 四国の方々や巡りの人々の親切はいつ来ても有難い。
- * (男67) 道中多くの人に接し人の親切心とも出会い健康に恵まれた事を感謝しています。
- * (男48) 地元の人の暖かいお接待が有り難かった。しかしこの人達がだんだん居なくなれば「お四国」を支える精神的基盤はどうなるのか? 宿坊が大人数向けになりつつあるのは嘆かわしい事だ。

宮崎健氏は中村市の四万十川沿岸在住であり、先代は主に遍路者を客とする宿を営んでいた。以下は宿を営んでいた当時の様子についての話である。

宮崎健さんインタビュー1998.8.21 於中村市

じいさんばあさんの時代からやとった。宿は多いときには40人も50人も泊まった。井沢と竹島にも遍路宿があつて、井沢に榎木屋というのがあつた。昭和14、5年ごろが多かつた。もうね、お風呂なんかもね、おへんろさんがきてね、わしらよう入らなんだ。五右衛門風呂やけんね。

なんぼかは頂いて、泊めて、賄いは自分ら、寝る布団とお風呂、ごろ寝だつた。遍路宿では家のもんより遍路さん優先だつた。あんまりは儲けなかつたみたいやね。どっちかいうとじいさん婆さんはそういうことが好きとか、お接待したりなんかしてね、よくしとつた。

井沢の河原まで、よく迎えに行つてね、ばあさんが。

14、5年頃は親子が多かつたように思うね。あと家族とかね。多分、四国以外の人が多かつたと思いますよ。それまでもっと来よつたでしょうがね。

宿を始めたのは、じいさんの代からじゃから、大正からじゃと思う。それから二代やつた。じいさんばあさんに子供がのうて、ばあさんの姉の子供を竹島からもらつて跡継ぎに、母にお四国まいりをさせて、それから帰つてから、竹島から漁師をもらつて、漁師と両輪でお遍路の木賃宿をしよつたですね。

渡ってすぐのところに、井沢の榎木屋とは宿の取り合いをした。河原までうちの舟までもっててね、漁師の親父に船頭借りてね、やっとりました。多分渡し賃なんかはもらわなかったでしょうね。あまり記憶は確かでないけどね。

ここの渡しは四十万大橋ができてからも、戦後までであった。市営のが。つぎに竹島の部落が個人をやとって、やっていた。との崎は県営。県営は40年か30年まえになくなった。昭和40年の初め頃でしょう。

河が洪水になんかなったりするとね、榎木屋に何日も足止めされるというようなことがあったですね。昔は無理に渡ろうとして、お遍路さんがながされたということもあったようですね。

辞めたのは戦争で、そのあとは食糧難で、家族も多かったし、百姓して、麦造って芋造って、遍路宿を再開する余裕はなかったですね。戦後まもなくは遍路さんも少なかったね、それも急に減りましたよ。なにしろ食べ物がなくなってね。そんな感じじゃ、お遍路さんも、途中で米もろうたりできんけえね。そのころは喰い詰めたものもちらほらいた。まあ遍路というよりはものもらい、乞食という感じ。今はタクシーなんか乗ったりしてね、豊かさの象徴になってきてますがね。昔とは大きな違いですわ。

昔は信心の度合いが切実にあったように思う。お札をお遍路さんから頂いて、うちに張り付けたりしてましたが、同行二人とかいて、病気のお礼参りとか願い事が書いてあったのが多かったようにおもいますがね。

資料：高知班の現地ヒアリング調査

入江 正勝

第一回（1998/8/19-22）

1 インフォーマント一覧

・ヒアリングをおこなったインフォーマント

<高知市>

坂本正夫 高知大講師（元高知小津高校教員） 民俗学研究者で、郷土の民俗に関する著書多数。遍路に関する論文も数本あり。土佐史談のメンバー。

<中土佐町>

林勇作 中土佐町役場・人権対策室長 地域の石碑に関して造詣があり、旧遍路みちしるべの位置などに詳しい。10年前は教育委員会にいた。「そえみみず」の入口がある長沢部落に住んでいることもあり、近隣の人々と一緒に、保存協会の草刈り奉仕を手伝っている。

浜田秀夫 中土佐町長沢部落在住。元町議（?）。「そえみみず」の入口のすぐ近くに住んでおり、草刈り奉仕に参加。

浜田武子 奥田秀夫の妻。草刈り奉仕に参加。

奥代初子 中土佐町長沢部落在住。高齢のおばあちゃん。草刈り奉仕に参加。そえみみずを遍路が通るようになってから、個人的にお接待を行っている。

<中村市>

澤田勝行 中村市の中心街でサワダ酒店を営む。郷土の歴史、民俗に造詣がある。旧遍路みちしるべの位置、遍路ルートなどにも詳しい。「四万十と小京都なかむらを考える会」の会員。市の観光案内のボランティアをおこなっている。

腰山秀夫 （社）中村市観光協会・中村市観光情報センター専務理事 旧街道について詳しい。

宮崎健 中村市の遍路ルート沿いに在住。祖父と父の代が遍路宿を営んでいた。

・その他のインフォーマント

山本弘光 宿毛市在住の NTT 職員 墓石の接待の記録(?) を発見し、それを何かに発表している。林さんから紹介されたが、今回は連絡がとれず。

松田健一 幡多郡三原村在住。かつて明治大学などで講師をしていたが、現在は故郷に戻り、主として郷土をテーマとしたライター兼写真家として活躍。著書に三原村の歴史を扱った『光る風』(高知新聞社)あり。現在高知新聞に「カムイの歌」を連載中。8月2日付けの連載で、三原村の遍路・大師堂を扱った。澤田さんの紹介で、電話で少し話す。次回訪問の際に三原村の遍路道を案内していただくようお願いしている。

2 全体の経過

8/19 (水)

9:45 高知空港に集合

10:30 高知県歴史民俗資料館にゆくも、20日まで臨時閉館中とのこと。

11:00-13:00 高知県立図書館で文献収集

13:00-14:00 高知県立図書館前の喫茶店で、坂本正夫さんに話をうかがう。

15:00-18:00 高知県立図書館で文献収集。

高知駅前のビジネスホテル「シティ高知」に宿泊

8/20 (木)

高知市から中土佐町に向かう

10:00-11:30 中土佐町役場で林勇作さんから話をうかがう。

11:30-13:00 昼食。林さんに中土佐町の旧へんろ石の場所と、そえみみずの入口を案内してもらおう。また、長沢部落の浜田さんを紹介してもらおう。

13:00-14:00 浜田秀夫さん宅でお話をうかがう。また、奥さんの武子さんの紹介で、お接待をしている奥代初子さんからお話をうかがう。

14:30-15:30 みなさんの勧めで、そえみみず遍路道を実際に歩いてみる。

16:30 再び中土佐町役場へ行く。林さんから、宿毛の山本さんの電話番号を教えてください。

中土佐町から中村市に向かう。

中村駅前の「中村第一ホテル」に投宿。

山本さん宅に電話するも連絡とれず。

8/21 (金)

9:00 中村市役所の観光課でインフォーマントを求めると、駅前の観光協会の腰山専務を紹介してもらおう。

9:30 駅前の観光協会を訪ねるも、専務はまだ来ておらず、そのかわりに?澤田さんを紹介してもらおう。

10:00 澤田さん登場。旧遍路ルートの地図をコピーさせてもらおう。専務も登場。旧街道の話を伺う。澤田さんに、午後から市内を案内していただく約束をして別れる。

10:30-12:00 中村市立図書館で文献収集

13:00-17:30 澤田さんに中村市内の遍路ルート案内してもらおう。途中、遍路宿を営んでいた宮崎さん宅に寄って、ヒアリングをおこなう。

18:00 中村第一ホテルに投宿

19:30 澤田さんに、市内の石見寺（番外霊場）案内してもらい、それからピアガーデンで飲みながら話をうかがう。その後、澤田さんの店に寄り、松田さんと電話で話させていただく。

8/22（土）

8:30 澤田さんに、中村市江ノ村西ノ谷の大師堂まで案内してもらおう。

10:00 澤田さんと別れたのち、市内の書店で、澤田さんに紹介された本『赤鉄橋のあるまち』と、その他の関連文献を購入。

中村市をでて、高知市に戻る。

16:00 高知駅前解散。

3 ヒアリングの内容

坂本正夫さんの話

- ・以下の文献を当たるとよい

『土佐史談』

森正康「民俗学？講座」弘文堂

『高知県史』民俗資料編

『憲章簿 遍路編』・『近世土佐遍路資料』に収められている

『娘遍礼記』朝日選書

真野俊和『旅の中の宗教』

- ・県立図書館入口横の交差点に中務茂兵衛の道しるべがある
- ・室戸に木食僧仏海に由来する仏海庵がある
- ・土佐市塚地・・・？
- ・これまでの遍路研究は、歴史・習俗という観点から捉えたものが多いが、「歩く体験」としての遍路にもっと注目すべきではないか。「遍路は苦楽のレジャーランド」
- ・「へんろ」という呼び方は戦後以降に一般化したもので、昔は「へんど」と呼んでいた。「へんど」とは「乞食」と同義だが、「乞食」という語も、明治以前は修行僧の托鉢を意味しており、今日のような否定的な意味ではなかった。
- ・春野町、種間寺近くの根本谷部落（40戸くらい）では、3月21日にお接待をおこなっている。
- ・ゆす原町の茶屋谷にはお茶堂があり、夏の盆月にお接待？をおこなっている。これは平凡社『茶道の習慣』に記述されている。
- ・岩屋寺？の雑記帳を調べると面白いのではないか。

- ・9月14、15日くらいのNHK『昼どき日本列島』で高知県をやる。
- ・かつての集落では、座敷が6畳ある家を「へんろ宿」と呼び、遍路が来ると順番に泊めていた。また座敷が8畳ある家は「お日待ち宿」と言って、共同体の公的行事を順番におこなっていた。
- ・須崎市アワ・・・遍路の行き倒れが多く、順番に・・・？
- ・五台山入口の遍路宿？
- ・『手幅』（はんかち）：漂白の人生 ある女遍路の話

林勇作さんの話

- ・最近のお遍路は昔の遍路のような悲壮感はない。
- ・今年のそえみみず草刈り奉仕には、長沢部落からは10人くらいが参加する。
- ・このあたりは黒竹の産地。
- ・そえみみずの途中には「海月庵」という茶屋があった。明治の頃には、そこに高橋さんという人が住んでいた。
- ・そえみみずは、かつては重要な幹線路だったが、明治25年に大坂のみちが開通して以降は人が通らなくなった。
- ・長沢で草刈り奉仕に参加するのは年寄り主体で、草刈りが始まった約10年前から、参加メンバーはあまり変わらない。
- ・そえみみずの途中には、1800年代の遍路墓がある。
- ・30年前のお遍路は、家を一件一件回っていた。
- ・遍路の呼びかたは、「へんどさん」「へんろさん」である。
- ・遍路墓には岡山のものが多い。
- ・付近のお年寄りの話に「おなみさん」という遍路の話がある。
- ・この地域では、手術をする前に久礼小学校前の「四国中遍路七度成就逆修塔」にお参りするという信仰がある。
- ・そえみみずは途中で中土佐町から窪川町に入るが、窪川からは幡多になり、文化が異なる。
- ・宿毛の山本弘光さんという人が、墓石の接待の記録？を発見し、何かに発表している。

浜田秀夫さんの話

- ・近所の奥代さんが、お遍路にジュースなどをお接待している。
- ・歩く人は最近になって（ここ20年くらい）増えてきた。
- ・長沢では仏払い（ぶくばらい）という行事をおこなっている。祭りにおける直会のようなものか。

奥代初子さんの話

- ・そえみみずの草刈りの始まり・・・平成元年か2年頃、宮崎さんたちが突然あらわれ、1

週間にわたって毎日やって来ては草刈りをおこなった。そのころその道はとても歩けるような状態ではなかった。当初長沢の人々は、この人達は何をやっているんだろうと不思議に思っていたが、そのうちに、近隣に住んでいるわれわれも手伝おうということになって、現在では毎年手伝っている。

・お遍路さんを見かけると、追いかけていって、ジュースやお菓子などをお接待する。家族が携帯電話でおばあちゃんに「おへんろさんが来たよ」と教えてあげることもある。かつて自らが遍路でまわったときにお接待を受けて、それからお接待を始めるようになった。

・牧村三枝子？

・昨日も2人のおへんろさんが来て、アスパラとヤクルトをお接待したが、そえみみずは登らなかった。

・お遍路さんには「どちらから来られましたか」などと声をかける。

・阿波出身で、子供のころ3/21のよもぎもちの接待を見て育った。

・昔のお遍路は「ものもらい」が多かったが、戦後はいなくなった。食糧難で、住民ものをあげる余裕がなくなったからではないか。

・このあたりで、奥代さんのようにお接待を行っている人は少ない。

腰山秀夫さんの話

・遍路ルートは旧街道と重なっている部分がある。旧街道のルート：間崎-伊豆田トンネル-下ノ加江-下川口-棕櫚下-有永-下切。旧街道沿いには、榎が植えられていたが、それが今も残っている部分がある。

澤田勝行さんの話

・三原村を通る昔の遍路ルートは3つあった。そのひとつが江ノ村経由のものだった。明治38年発行の陸地測量部の地図には、当時の道が記されている（地図をコピーさせてもらう）。

・かつての遍路が四万十川を渡っていたときの渡し（横渡し）は、中村市竹島地区にあった。渡し跡には、大師堂がある。渡しの対岸は、現在ゴルフ場になっている。

・下ノ加江を起点に打ち戻るルートをとると、39番へは三原村の下長谷を通過することになるが、下長谷の岡田というところにはお寺があり、遍路宿がある。

・江ノ村には長法寺というお寺があり、そこの浜田さん？という方が詳しいのではないか。

・竹島の大師堂では、竹島部落の人々が、毎月旧暦の21日に行事をおこなっている。

・祭の日どり・潮の満ち引き、日没時間など、自然の作用を利用した祭（例：不破八幡宮と一宮神社の祭）は、旧暦の日程をそのまま新しい暦にしまうと都合が悪い。

・中村中学で現在『100年史』を編纂中。

・道の変化・現在の太坂トンネルの上に、煉瓦造りの昔の大坂トンネル跡がある。

・庶民に八十八カ所が広がったのが室町末期以降ではないか。

・高知・暖かいので生活はしやすいが、蓄積がなく、信仰心が薄い。

・松田健一氏の写真の師匠は、三原小・中学校の先輩でもある野町和嘉である。

- ・四万十～愛媛の間には、大師堂が多くある。これは、八十八カ所遍路とはまた別の、それ以前の弘法大師信仰と関係しているのではないか。
- ・石見寺・「一条氏が中村にはいり、遍路が中村に来るのを嫌ったため、番外に外された」と住職が語っていた。ミニ四国がある。この寺は、中村市御所の東北、すなわち鬼門にあたり、陰陽道の方位上で重要な位置にある。
- ・幡多は、土佐藩が幕末維新期に活躍した藩だったこともあり、廃仏毀釈を率先しておこなった歴史がある。
- ・中村は、500年前に一条氏によってつくられ、400年前に一条氏によって土地台帳が作られている。また一条氏のあとの長宗我部氏も土地台帳を作っているのので、どこに何があったか、ということも400年前から辿ることができる。
- ・中村市の一条時代は、八十八カ所が成立したとされる時期と重なる。一条氏が遍路を避けていたために、中村市には霊場がないのではないか。
- ・へび・「クチメ」と呼ばれる毒へびがいる。長さ30センチくらいで、赤っぽい体。昔は結核を治す薬として用いられていた。
- ・クマ・四万十川源流のイラズ山にいる。
- ・土佐の部落・民主的で、区長は輪番。

<真念庵で>

- ・真念庵・昭和30年代までは住職がいたが、現在は市ノ瀬の部落で管理している（山本ストア）。

宮崎健さんの話（四万十川の渡しの着側で遍路宿をやっていた）

- ・大正時代に祖父が遍路宿を始め、戦争が始まる前まで（父の代まで）やっていた。戦争後は宿を再開しなかった。いわゆる木賃宿で、賄いは自前で、雑魚寝、五右衛門風呂だった。儲けはあまりなかったが、奉仕的にやっていた。
- ・多いときは40-50人くらいを泊めていた。お年寄りだけでなく、親子の遍路も多かった。病気などの祈願で廻っている人が多かった。
- ・同じく遍路宿の榎屋（渡しの発側）と客を取り合っていた。祖母が川を渡って発側まで客引きに行っていた。
- ・渡しは市営（県営？）だったが、昭和40年ごろから、竹島の部落（の人？）の運営になった。（現在は廃止）

松田健一さんの話（電話で）

- ・三原村から中筋への旧遍路道は、山の中をゆく昔ながらの風情のある道で、ぜひ歩いてみることをお勧めします。付近に住んでいるおじいちゃんおばあちゃんに訊けば、昔のお遍路のことや遍路道のことを話してくれるはず。でも夏はへびが出るので・・・。

第2回（1999/3/20-23）

調査日程

20日 午前：東京→高知

午後：種間寺（34番）、青龍寺（35番）、清滝寺（36番）

高知県歴史民俗資料館（学芸員 岡本氏）

夜：高知市の居酒屋「葉牡丹」（大里氏）
（高知泊）

21日 午前：高知県歴史民俗資料館学芸員の中村さんに連絡

種間寺（34番）→春野町根木谷部落の小川さんに連絡

土佐市立図書館→休館

午後：春野町西根木谷公民館（小川さん）

春野町の遍路道（新川）、道しるべ、34番奥の院を案内してもらう

春野町西分で旧へんろ道しるべを発掘

（高知泊）

22日 午前：岩本寺（37番）

午後：高知へ戻る

松山に移動（JRバス）

（東予・松山泊）

23日 鈴木：東予の遍路みちしるべ展

入江：松山市街の古書店・伊予鉄観光

（東予・岡山泊）

24日 帰京

調査事項概略

（1）高知県歴史民俗資料館（岡本氏）

連絡先：〒783-0044 南国市岡豊町八幡字岡豊山 1099 番地 1 高知県立歴史民俗資料館

tel:0888-62-2211

・遍路のことについては中村さんが調べている（春野町・ばぶれ遍路）ので、彼女に聴くと詳しくおしえてくれる。

・書店紹介：帯屋町、きんこう堂・井上書店（古書）

・文献紹介

文化庁文化財保護部編『民俗資料選集 16』（茶道の習俗 1）、財団法人国土地理協会、平成元年。

高木啓夫『土佐の祭り』高知新聞社、1992年。

（2）春野町根木谷部落（小川さん）

連絡先：小川真喜子・吾川郡春野町弘岡下 2845（西根木谷）・世帯主：小川正貢
本人について

- ・大正9年生まれ（現在かぞえて80歳）。
- ・高知市出身。
- ・幼い頃「兄がかり」になる（親権が兄になる）。
- ・嫁いで春野町にくる。
- ・夫の仕事の都合で一時期大坂へ。
- ・再び春野に戻る。

民俗学との関わり

- ・30才のとき、柳田国男の秘書？の鎌田久子さんに会う。それを機に桂井和雄先生（昭和37or38年に土佐民俗学会をはじめる）と知り合い、土佐民俗学会に入会。
- ・現在、土佐民俗学会会員、春野町文化財保護審議会委員、高知県歴史民俗資料館資料調査員。

部落について

- ・根木谷部落。現在30軒。前・東・西の3つに分かれており、「けむり係」というのを輪番で担当。
- ・堂守という係がある（小川さんも務めたことがある）

部落に残る民俗

- ・辻念仏
毎年お盆の夕方に、みんなで辻にならんで念仏経を唱える。
- ・大師講
 - ・遍路お接待：34番種間寺の境内でおこなう。お茶、甘酒、ぜんざいなどを出す。
 - 昔）旧暦3月3日の翌日が大潮で、その日に遍路道の辻でお接待をする。
 - 今）お彼岸や農作業で忙しいので、日程を調整しておこなう。今年は4月のはじめくらい。
- ・月ごとの当番？を記した大師講の帳面があり、明治15年から現在までの記録が残っている。
- ・昔は大師講の他に伊勢講もあった

昔の遍路

- ・昔は旧暦3月3日前後、農作業が忙しくなる前に、レクリエーションとして、春野町および近辺の部落では、7ヶ寺めぐり（雪溪-神峰-五台-国分-安・善楽-種間-清滝）をやっていた（1泊2日）。若衆たちは、「ばぶれ遍路」といって、型破りな装束（大きな納め札、変な形の杖、色が変わった大きな笠、笠の上に赤猿、笠の縁に太鼓、大きな札ばさみ）でまわった（明治の終わりから昭和12年頃まで）。
- ・昔は「四国回りお断り」の看板をたてた木賃宿もあった。

第3回（99/12/2-4）

日程

12/2

- 10:05 高知空港着。レンタカーで足摺に向かう。
- 12:30-13:30 須崎市で昼食。38 番金剛福寺にアポイントをとる。
- 16:00-17:00 土佐清水市立図書館で資料収集。
- 17:30 足摺岬に到着。投宿。

12/3

- 8:30 出発
- 9:00-10:00 大岐海岸の浜辺の遍路道を見学。
- 11:00-13:00 38 番金剛福寺でヒアリング。
- 13:00-13:30 門前の土産物店で昼食。
- 15:30-16:00 39 番延光寺納経所でヒアリング。
- 16:00-16:30 門前の民宿「へんくつ屋」でヒアリング。
- 17:30 中村市着。投宿。

12/4

- 9:00 出発。
- 10:00-12:00 宿毛市文教センター（図書館）で資料収集。
- 12:30-13:30 中村市で昼食。
- 16:00-17:00 高知市桂浜着。休憩。
- 17:30 高知空港着。

38 番金剛福寺でのヒアリング

[副住職：沢田勝教氏（真言宗豊山派仏教青年会副会長：今年度まで）の話]

・境内でのお接待

旧暦3月21日に、おばあさんたちが餅やヤクルトなどを用意してお接待をしている。

・高知のお接待の事例

ゆす原町、十和村の茶堂接待。

・昔の遍路の数

江戸時代、土佐の関所（甲浦）で、1日300人の遍路が通ったという記録がある。

・最近の歩き遍路

1日に5、6～10人くらいやってくる。

・四国八十八カ所の由来

鎌倉時代に大師が神格化され、はじめは修行者たちが四国の山岳・海岸に注目し、四国聖地説が確立した。

・愛媛の接待の事例

金山（？）出石寺（八幡浜市）

・お接待の意味

お接待をきっかけにして、大阪のまちのことや薬のことなどの情報を入手できる。

・四国の人の特徴

かつてオランダのライデン大学の先生（仏教研究者）が学生を連れて四国を巡ったが、そのとき「四国の人とは旅人、他国のものを受け入れる」という感想を残している。

・瀬戸内と高知の違い

瀬戸内は昔から海上交通の要衝として栄えており、寺が沢山あった。高知は寺が少ないので、沿道住民が遍路に「父の命日なのでお経をあげて下さい」とたのまれることがあった。村々に遍路を泊める小屋があった（川のそばにあることが多かった）。また、亡くなった遍路を葬るための共同墓地もあった。

[住職：沢田勝 氏（勝教氏の父）の話]

・復員後、遍路をしたときの経験（1）

昭

和25年くらいのこと。寺、通夜堂、遍路宿などに泊まった。善根宿もあって、亡くなった家族の命日に遍路を泊めていた。また昼食時には遍路同士でお接待をしていた。道中でみかんをもらった。徳島では子供が（親のいいつけで）芋をもってきた。当時は1日7軒の修行をすることになっていた。納経料は3銭だった。

・金剛福寺の通夜堂

門前の、現在団体バスの駐車場になっているところに、かつては通夜堂があった。

・昔の遍路の数

遍路墓は文化文政時代のものが一番多い。土佐藩の資料（山内文書）には1日300人という記録がある。農閑期が多かった。

・最近の土佐清水市と接待

生活排水の影響だと思うが、近海漁業が不振で、市制当時3万3千人くらいだった人口が、今では2万（？）を切っている。特にバブル期以降若者がいなくなり、そのため大人がみな働くようになった。家に人がいないので、沿道でお接待も少ない。

・遍路をしたときの経験（2）

愛媛が遍路を一番大切にしているという印象をもった。遍路中におがまれたりした。全部で55日かかった。37番から38番までは3～4日かかった。

・現在の遍路

バスツアーでは添乗員が先達をしている。このような先達は信仰心がない。歩き遍路は今年も多く、学生や会社でリストラに遭った人などがいた。

・土佐で接待が少ない理由

各県の違いは、かつての藩主の仏閣信仰の度合いによるところがあって、土佐出は、信仰心が薄い気風がある。死に対してあっさりしている。戦中の経験からいっても、死に対してあっさりしていたのは土佐の人だった。ハラが決まり方が早い。いつ死んでもおかしくないという漁師の気風も関係しているかもしれない。高知県内では、高知市街が最もお接待が少ないのではないか。

[副住職の話]

・昔の接待の豊かさ

大正時代、40年に渡って遍路をした人が、その間に接待でもらったものを貯めて、74番甲山寺の境内に家を建てた。自分は2階に住んで、1階には遍路を泊めた。明治大正期は、徳島の藍、瀬戸内航路が栄えて、接待の額も大きかった。

昭和22～3年頃、関東から遍路に来た人が、お接待で食べ物をもらって驚いた（関東では戦後の食糧難の時代だったため）。

・讃岐、大師、うどん

讃岐は乾燥地で米が作れないので、大師は小麦栽培を勧めた。うどんは大師が中国から伝えたもの。当時のうどんは麺ではなく、500円玉のような、団子をたたいて平たくしたものだった。当時のうどんを再現する「大師のうどんを作る会」というのがある。

まんのう池の堤は現在も大師が作ったままの状態。讃岐では水の神様である竜王信仰が普及した。

・死生観の違い

十王堂（地獄極楽絵図）は讃岐、阿波に多く、仏教教理的な死生観が広まっていた。一方高知は、自然崇拜的で、自然に帰るといふ死生観が強いのではないか。

・高知の県民性

瀬戸内は、一円単位で細かくものを考える。これは、貴重な水の配分をめぐって細かい土地の区割りをしてきた歴史と関係しているのではないか。一方高知は大雑把で、十円百円単位でものを考える。

・NHKの遍路番組

視聴率10%と聞く。早朝の時間帯としては大きな数字。都市の高齢者にアピールしているのではないか。

[住職の話]

・高知の県民性

最近では地域ごとの特徴というのとはなくなったが・・・

高知の村々にはちょうそかべの遺品（かぶと、刀）が残っている。当時ちょうそかべは3万人の兵を動員できた。その国民皆兵的な気風が高知の県民性に関係している。昔の江戸っ子のようにさっぱりしていて、上下関係にこだわらない。宴会では舞踊ではなく議論をする。

・廃仏き釈

明治4年の廃仏き釈に最も積極的だったのは高知で、480寺を廃寺にした（当時は嵯峨天皇の勅願寺だったので廃寺にはならなかったが）。こうしたところにも、高知のさっぱりした気風があらわれている。

[39番延光寺納経所の人の話]

- ・高知の県民性・・・細かいところに気付かない
- ・歩きの遍路は三原村を通ってくる。車の接待を受けるひともある。
- ・近隣住民による境内でのお接待はない。

[39番門前民宿「へんくつ屋」主人と奥さんの話]

- ・近隣で遍路にお接待をするような人はいない。
- ・歩きの人にジュースなどをお接待。何か買ってくれた人にみかんなどをあげたりする。
- ・歩きの人は宿泊料が1000円安い・・・「歩く人はお金がかかるから・・・」
- ・民宿をはじめて5年になる。

・ 宿泊客は、歩きの人が半分を占める。

収集文献・資料一覧

第1回

中土佐町史編さん委員会、『中土佐町史』, , 中土佐町, 1986年。(294-305頁に「四国遍路道」の項あり。288-291頁に「添蚯蚓坂」の項あり)

山崎清憲、『続 高知のハイキング』, , 高知新聞社, 1984年。(132-135頁「遍路道・伊豆田坂から真念庵へ」)

土佐文雄、『同行二人 -四国霊場へんろ記-』, , 高知新聞社, 1972年。(作家の遍路記)

廣江清、『近世土佐の宗教』, 史談選書(7), 土佐史談会, 1980年。(105-128頁に、「四国遍路」の項あり)

寺石正路, 「二十年前の四国巡禮」, 『土佐史談 第参拾参号』71-83頁, 土佐史談会, 1930年。

武市祐吉, 「お遍路さんスタール博士(一)」, 『土佐史談 165』52-56頁, 土佐史談会, 1984年。

武市祐吉, 「お遍路さんスタール博士(二)」, 『土佐史談 167』54-60頁, 土佐史談会, 1985年。

武市祐吉, 「お遍路さんスタール博士(三)」, 『土佐史談 171』43-47頁, 土佐史談会, 1986年。

武市祐吉, 「お遍路さんスタール博士(四)」, 『土佐史談 174』55-62頁, 土佐史談会, 1987年。

武市祐吉, 「お遍路さんスタール博士(五)」, 『土佐史談 177』67-72頁, 土佐史談会, 1988年。

坂本正夫, 「旅宿の民俗」, 『土佐史談 179(土佐古道特集)』205-212頁, 土佐史談会, 1988年。

岡本桂典, 「遍路道考 -四国遍路考古学事始め-」, 『土佐史談 179(土佐古道特集)』51-55頁, 土佐史談会, 1988年。

戸梶修蔵, 「江戸時代土佐の遍路道」, 『土佐史談 179(土佐古道特集)』56-71頁, 土佐史談会, 1988年。

町田武雄, 「土佐市の遍路道」, 『土佐史談 179(土佐古道特集)』116-118頁, 土佐史談会, 1988年。

戸梶修蔵, 「近世土佐の遍路道地図」, 『土佐史談 183』49-60頁, 土佐史談会, 1990年。

高知県, 『高知県史 民俗資料編』, , 高知県, 1977年(『憲章簿 遍路の部』他、近世の土佐の民俗に関する文書資料を多数収録)

室戸市史編集委員会, 「室戸市史 下巻」, , 室戸市, 1988年。(善根宿、接待についての短い記述あり)

内藤真覚, 『大正六年 遍路巡拝日記』, , 一誠社, 1963年。(知多利生院の僧侶である作者

が、妻と2人で自転車巡拝をおこなった時の日記)

松田健一、『光る風 四国最南端の村』,高知新聞社,1997年。(作者が、出身地三原村の歴史と現在を、写真と文章でつづる。遍路についての記述もあり)

大山正幸、『最新巡拝案内 四国八十八カ所』,大山紙製品製造所,1965年。(遍路巡拝ガイド。当時の移動手段別経費などにも触れている)

松田健一,「カムイの歌 52」,高知新聞 98年8月19日,高知新聞社,1998年。(三原村の遍路、中村市江ノ村西ノ谷の大師堂)

坂本正夫編,「中土佐の古道」,『中土佐町史料』32-59頁,中土佐町,1988年。(史料に見られる添蚯蚓坂の記述や、古道の石造物をまとめている)

月刊『土佐』36号,,和田書房,1987年。(特集「四国道」。1987年時点での四国の道路整備状況などをまとめている)

『土佐史談目録 第1号-第200号』,,土佐史談会,1996年。(各号目次の他に、主要項目索引あり)

林勇作・中土佐町教育委員会編,『中土佐町の文化財』,,中土佐町教育委員会,1996年。(「四国中辺路七度成就逆修塔」の写真と紹介あり)

林勇作,「江戸時代の長沢～床鍋までの往還(国道)添蚯蚓について」,『広報中土佐 175号』17頁,中土佐町,1997年10月。

中土佐町,『町制施行四〇周年記念誌 中土佐町紀行 鯉乃國から』,,中土佐町,1997年。(町勢要覧を兼ねた町の紹介パンフレット)

広江清編,『近世土佐遍路資料』,,土佐民俗学会,1966年。(『憲章簿 遍路の部』他、近世の遍路関連文書をまとめたガリ版の本)

第2回

手束妙絹,『人生は路上にあり--お大師さまへの道--』,愛媛県文化振興財団,1988。(鎌大師堂庵主による遍路記)

伊予史談会編,『四国遍路記集(増訂3版)』(伊予史談会双書第3集),愛媛県教科図書,1997。(江戸時代の遍路記・遍路案内を集めたもの)

伊予史談会,『伊予史談』246号,,1982.7。(越智通敏「四国遍路の成立(二)」収録)

伊予史談会,『伊予史談』307号,,1997.1。(小特集「旅・道・道標」に喜代吉氏の論文あり)

伊予民俗学会,『伊予の民俗』40号,,1985.12。(『伊予の民俗』1-39号総目録あり)

伊予民俗学会,『伊予の民俗』41号,,1986.1。(喜代吉氏「中務茂兵衛添句歌標石の周辺」・梶原角光「室戸木食仏海庵訪問記」)

伊予民俗学会,『伊予の民俗』42号,,1986.3。(喜代吉氏「続・中務茂兵衛添句歌標石の周辺」収録)

汲田栄功,『お大師さん--四国霊場番外編』,高知新聞社,1991。番外霊場ガイド,

小室孝太郎,『劇画 弘法大師空海』,高知新聞社,1986。

川東和夫、『四国霊場奥の院まわり』,えびす出版,1999。(江戸時代遍路記における奥の院への言及一覧あり)

愛媛県文化財保護協会、『愛媛の文化』二十二号,,1983.4。(村上節太郎「四国遍路の道標」収録)

愛媛県文化財保護協会、『愛媛の文化』三十二号,,1995.4。(喜代吉氏「四国中道筋日記」収録)

山脇喜楽久、『四国巡礼の旅・四国通路五十年の今昔』,,1976。(春野町に住む著者の遍路記・50年に渡る遍路歴を振り返りながら)

春野町教育委員会、『春野風土記』(第1集),,1982.3。(小川真喜子「春野町における疱瘡神の風習」収録)

春野町教育委員会・春野町文化財友の会、『春野風土記』(第14集),,1995.3。(小川真喜子「村芝居(地芝居)」・柳村衛「辺路石を尋ねて」収録)

春野町教育委員会・春野町文化財友の会、『春野風土記』(第15集),,1996.3。(小川真喜子「大師講と接待」収録)

春野町教育委員会、『昔の新川を偲びて』<春野文化財シリーズ第3集>,,1977.8。(遍路道が仁淀川にさしかかるところにある町「新川」の繁栄と衰退)

小川真喜子、『疱瘡神祭り』,,雑誌類に掲載されたものの抜刷り?

高知県立歴史民俗資料館、『岡豊風日』<高知県立歴史民俗資料館だより>第21号,,1996.1。(小川真喜子さんへのインタビューが載っている。聞き手:中村淳子)

第3回

土佐清水市立図書館

・田村幸一『足摺の年中行事』1987年。(3月21日「へんど盛り」)

宿毛市文教センター

十和村教育委員会『十和の民俗 下』1977年。(十和村の遍路講)

坂本正夫・田辺寿男『図説日本民俗誌 高知』岩崎美術社、1988年。(「バブレヘンド」の写真など)

『土佐民俗』60号、1993年3月。(小川真喜子・宅間一之「辻念仏考ー吾川郡春野町根木谷地区の場合」)

『土佐民俗』52号、1989年3月。(伊与木定「遍路接待に煮込みのお花ー幡多郡大正町」)

『土佐民俗』49号、1987年10月。(高木啓夫「大遍路・中遍路・小遍路考ー弘法大師とその呪術・その三」)

『土佐民俗』31号、1978年9月。(神尾健一「辻念仏ー吾川郡春野町根木谷」)

4. 愛媛県における遍路道沿道習俗—「お接待」を中心として—

藤澤由和・杉本昌昭

本章では、1998年9月7日～9日に実施した愛媛県における接待事例調査の結果を報告し、また若干の考察を行う。同調査では、南宇和郡内海村にて（調査時点において）開催予定の村おこしイベント「トレッキング・ザ・空海」の関係者、喜多郡内子町にて遍路向けの「無料宿泊所」を開設しているM氏、および同じく内子町にて「千人宿記念大師堂」を運営する山本宗清氏への聞き取り調査を行った。

(1) 内海村「トレッキング・ザ・空海」

「トレッキング・ザ・空海」は、村民有志による下草刈りなどとの定期的な活動によって維持・整備されている旧遍路みちを、「地域資源」として活用しようとする村おこしイベントである。このイベントは、同村を広くPRするために、また村民および村外者の交流をはかるために開催されるものであるが、そのテーマのひとつとして、「お接待のこころ」というキーワードが掲げられている。しかし、後述するように、現在では、同村において遍路へのお接待はかつてほど広く行われているわけではない。このすたれつつある「醇風」を再興し、村おこしにあたってのひとつの足がかりとする——同イベント関係者の企図はこのように要約されるだろう。

①内海村

内海村は、愛媛県南西部に位置し、由良半島の一部およびその南方の地域より構成される。海沿いを走る国道56号線沿線に集落が点在しているが、柏川および害除川が内海へと注ぐ柏地区に、村役場等の各種村営施設が立地し、同村の中心部となっている。世帯数は780戸、人口は2,458名⁽¹⁾であり、村内就業者の60%以上が真珠稚母貝養殖に携わる漁村である。

②「DE・あ・い・21」

「トレッキング・ザ・空海」は、同村柏地区を起点とする旧遍路みちを行程とするウォーク・ラリーであり、第1回は、1998年11月1日、第2回は1999年10月17日に開催された。今回の調査では、同イベントの実質的な立案・責任者である同村「DE・あ・い・21」所長・寿川忠夫氏に対し、その準備段階の時点において聞き取りを実施した。

(1) 世帯数・人口ともに、愛媛県企画情報部統計課による2000年6月1日現在の推計値。

「DE・ア・イ・21」は同村営の地域コミュニティ・センターであり、同村柏地区、国道56号線沿線に設置されている。以下は、「DE・あ・い・21」に関する同氏談。

- 同センターは、複合的な文化施設として、国・県等の補助金を受けずに内海村が独自に設置したもので、一般的な公民館や文化会館のように、運用にあたって、各種の制約を受けることがない。現在は、24時間、希望があればいつでも利用できる。
- 内海村住民の利用が原則だが、他市町村の住民も利用可能。前村長と現村長の交代期に落成。トップの判断で、このような意欲的な施設ができた。専従職員は所長を入れて3名⁽²⁾。
- 「DE・あ・い・21」の活動は、村の企画課や教育委員会、あるいは公民館などと重なる部分が多い。みずから仕事を探すようなかたちで、また住民からの「わがまま」を引受けるようなかたちで運営している。
- 365日、毎日が文化祭というつもりで、かならず何らかの展示・教室・講演会などを行うようにしている。現在（聞き取り時点）は「今昔写真展」の準備を行っている。

③地域活動組織

「トレッキング・ザ・空海」の主催団体としては、「内海村・へんろ路実行委員会」が筆頭に挙げられているが、その他、公的・半公的、あるいはまったく「有志」の団体も名を連ねている⁽³⁾。「同委員会」は、これら各種団体によるアド・ホックなイベント開催機関である。

i) 「ほっと計画委員会」

「ほっと計画委員会」は、今回の「トレッキング・ザ・空海」に中核的に関与している住民組織であるが、このほかに

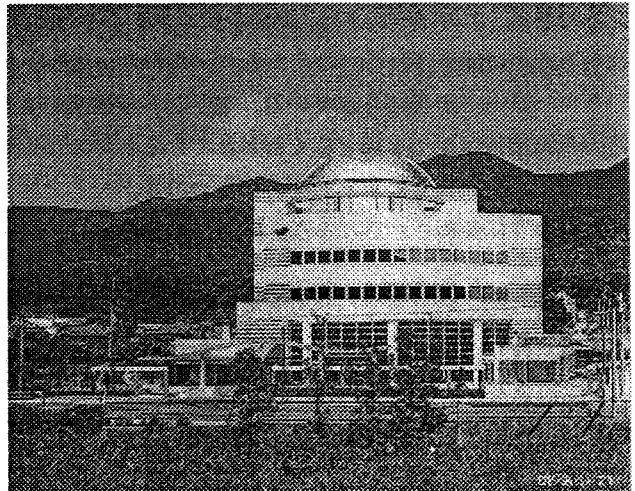


図4-1 「DE・あ・い・21」
(同センター・パンフレットから)

(2) 竣工は1994年。組織図では、助役の管理下に設置されており、所長は課長級。

(3) 「内海村・へんろ路実行委員会」以外の主催団体は以下のとおりである。「柏を育てる会」・「柏自治会」・「内海村商工会」・「柏婦人会」・「柏公民館」・「深山溪谷探訪会」・「あじさいグループ」・「DE・あ・い 朝市会」・「ほっと計画委員会」・「内海村旅館組合」・「くるみ学級」・「内海村青年団」。

も、「パール・ジュエリー・デザイン・コンテスト」⁽⁴⁾を主催するなど、「DE・あ・い・21」を拠点として、いわゆる「村おこし」的なイベントを数多く手がけてきた。上記寿川氏に対するインタビューの概要は以下のとおりである。

- 「DE・あ・い・21」という施設がハードウェアだとすれば、それを運営するための住民参加のソフトウェア的なはたらきをする委員会である。「住民代表」というよりは、自分たちで楽しもうという遊び心を持った人々の集まりで、話し合いが深夜に及ぶことも多い。
- 内海村の有力者や古株の住民が取り仕切っているわけではなく、ひと味違った住民、したがって外部から内海村に移動してきたものや他からUターンしてきたものなどが多い。
- イベントを企画する住民と参加意識のあまり高くない住民とのあいだに齟齬が見られることもあるが、それを解決し、合意調達にあたるのが「行政マン」の役割であると思う。

ii) 「柏を育てる会」

「柏を育てる会」は、内海村柏地区の自治会を基盤に、旧遍路みちの草刈りなど、ボランティアを行う組織として発足した住民組織であり、上記「ほっと計画委員会」に比べると、より自治会への密着度が高い。

- 13年～14年前に、「柏を育てる会」が旧遍路道の整備を初めて行う。柏地区230戸のうち、半分程度が参加した。また、4年前から「遍路道ウォーク」を開催している。「遍路道ウォーク」には、寿川も当初は「事務方」のボランティアとして参加した。
- 「柏を育てる会」が行った旧遍路道の整備（草刈り・トイレ及び休憩所の設置）は、愛媛県環境保全課が「四国のみち」道標の設置など、遍路みちの整備を実施する以前のことであり、これは誇りにしている。

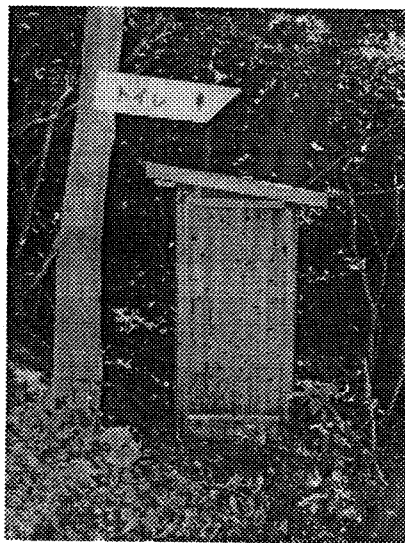


図4-2 「柏を育てる会」設置のトイレ

(4) 内海村および「ほっと計画委員会」では、同村の基幹産業である真珠稚母貝養殖を全国的にPRし、「村おこし」の一手段とするため、真珠と銀粘土を使ったアクセサリーのデザイン・コンテストを開催している。第1回は1997年に実施された。

④「トレッキング・ザ・空海」

「トレッキング・ザ・空海」の舞台となる旧遍路みちは、同村柏地区を起点とし、柏坂を越え、津島町大門地区へとぬける 9.8 km の峠道である。四国巡礼の霊場でいえば、40 番平城山観自在寺から 41 番稲荷山龍光寺へと向かう道程にあたる。現在、遍路向けに市販されている「へんろ地図」のたぐいには、この二つの霊場を国道 56 号によって結んでいるものも多いのであるが、現在のように国道が整備される以前、遍路は柏地区で海沿いの街道を右に折れ、「旧遍路みち」の峠道を越えていった。

表 4-1 のように、同イベントの主体となるウォーク・ラリーでは、「DE・あ・い・21」が出発地点となっており、行程には 3 つのチェック・ポイントが設置され、また、途中、「ミニ俳句ライブ&季語ビンゴゲーム」・「へんろ路フォトコンテスト」の二つの催しが予定されていた。

表 4-1 「トレッキング・ザ・空海」プログラム (パンフレットより)

場所	時間		内容
DE・あ・い・21	8:30~9:30		受付
DE・あ・い・21	9:40~9:55		開会式
DE・あ・い・21	10:00		出発
高橋商店	10:05		接待
坂口 (交差点)	10:15~10:20	チェックポイント	接待
柳水大師	11:15~11:25	チェックポイント	接待 (トイレあり)
清水大師	11:45~11:50	チェックポイント	接待 (トイレあり)
接待松	12:00~12:10		接待
つわな奥展望台	12:15~13:00		昼食
茶堂	13:40		
小祝 (橋の上)	14:20		
畑地大門バス停	14:50	チェックポイント	接待 (バス移動)
DE・あ・い・21	15:10	チェックポイント	接待

同イベントを企画・立案するにいたった経緯、そのねらい等について、前出寿川氏に対して行ったインタビューの概略は以下のとおりである。

- ひとことでいえば、「四国でもっとも整備された旧遍路みちのひとつ」と「接待のこころ」という「地域資源」を活用した「村おこし」。ただし、いろいろな目的を複合的に設定している。長期的には、現在すたれつつある「お接待のこころ」について住民の意識を喚起するという意味もあるし、中期的には、「旧遍路道」をお遍路さんが利用することで、内海村にある程度のお金落ちることも見こしている。9.8 km の旧遍路みちを徒歩で通行しようと思えば、(順打ちの) お遍路さんはかならず内海村で一泊することになるのではないかな。
- 「トレッキング・ザ・空海」のスタッフは 60 名、ボランティアと村の職員でまかなう。

- 前夜祭と講演会を実施する予定だったが、今年7月に「DE・あ・い・21」の職員2名が異動となり、「へんろ路俳句大会」・「俳句ライブ」・「へんろ路フォトコンテスト」というかたちに落ち着いた。
- イベント終了後、「DE・あ・い・21」にて、参加作品の俳句展・写真展を行う。
- 今回のイベントは第一回目だから宣伝の意味合いも強く、とにかく事故には注意して開催したい。

同イベントは、1998年10月18日の開催予定日、台風の接近によって延期され、11月1日に開催されている。参加者は約330名。また、翌1999年には、10月17日に第二回が開催された。

⑤ウォーキングと村おこし

内海村における「トレッキング・ザ・空海」は、「接待のころ」をそのテーマに据えており、このことから、現代四国遍路をめぐる社会現象のひとつとして位置づけることも可能だろう。しかし、その位置づけが、本報告書の他章において扱われているような、現在にいたるまで連続と受け継がれている伝統的な接待習俗、あるいは企業等の新たな接待主体の出現といった事例に比べ、かなり性格を異にしている点に留意する必要がある。なぜならば、同村において、個人接待や集落単位での接待が決して広く行われているわけではないという現状⁽⁵⁾に照らした場合、このイベン

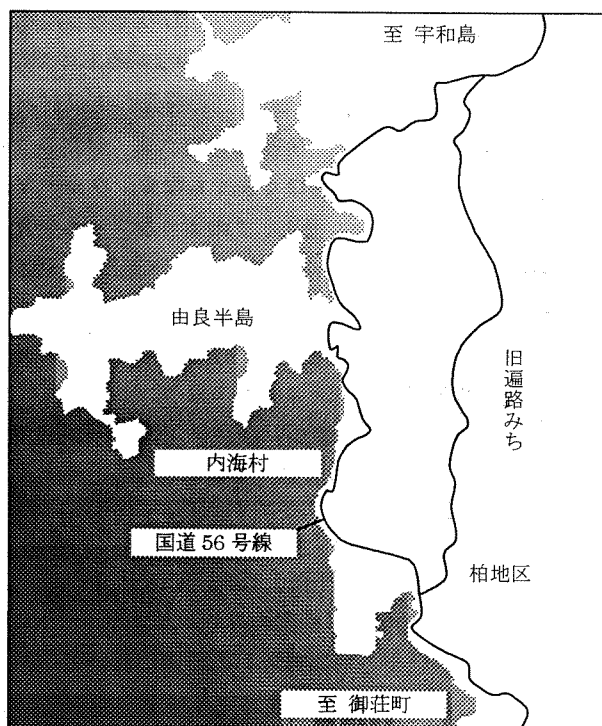


図 4-3 旧遍路みち

⁵⁵⁵ (5) 同村にて旅館を経営する A 氏への聞き取りでは、昭和の初め頃までは、旧遍路みちの「接待松」で接待を行う風習があったとのことであるが、集落を挙げての接待や旧来のかたちによる（食事・善根宿などの）接待は現在ではまったく見られないそうである。ただし、「接待というわけではないが、宿泊客にかぎらず、お遍路さんを粗略に扱うことはないよう心がけている」とのことばが聞かれたことから、（むろん、意識調査等の手続きを踏まずに即断はできないが、）今回のイベントにて掲げられた「接待のころ」が完全に

トをそのままのかたちで「接待事例」と見なすことはできないからである。また、その舞台となる旧遍路みちも、戦後しばらくは生活道として機能していたとのことであるが、国道56号線が整備されて以降、「海岸回りに道路整備が進むなか、人影もまばら」になり、「今は時折、お遍路さんがこの坂を越え」⁽⁶⁾る程度になっているとのことであり⁽⁷⁾、住民の日常生活に密着した社会空間には該当しえないだろう。

このような点を考えると、生活道ではなく、かといって遍路みちとしても、その利用者が徒歩遍路の一部にかぎられるこの峠道は、まさに抽象的な理念としての「地域資源」という性格をもつものである。そしてさらには、廃れつつある「お接待」を参加者に対して擬似的に行うという同イベントのテーマ、「お接待のこころ」もまた、現存する習俗に支えられているわけではないという点で、理念的な「地域資源」なのである。

旧遍路みちと接待のこころという二つの「地域資源」は、実際のところ、たしかに村おこしイベントに動員することが容易なものであるだろう。しかし、この両者の存在が「トレッキング・ザ・空海」へとただちにつながるものでないことは明らかである。そこには、生涯スポーツとしてのウォーキングの普及および村おこし・まちづくりという背景的狀況が存在することも忘れてはならない。

総理府による意識調査をひくまでもなく、ウォーキングが全国的にブームとなっていること⁽⁸⁾は広く知られているし、このようなブームを背景として、かならずしも「道中修行」をその目的としない新しいかたちの「歩き遍路」が生まれてきたこと⁽⁹⁾も、指摘されるとおりだろう。他方で、このウォーキング・ブームは、過疎化の進行や地場産業の不振などといった現代日本の地方農漁村をめぐる問題狀況のなかで、まちづくり・村おこしという施策と結合し、ウォーキング・イベントという村おこしモデルを生み出すことになっ

すたれてしまっているわけでもないとの印象を得た。

(6) 『愛媛新聞』[南予版] 1998年11月6日。

(7) むろん、柏坂が「四国のみち」環境庁ルートに選定される、あるいは「へんろみち保存協会」による旧遍路みちの整備において、柏坂がその対象に含まれているということは、このルートがかならずしも忘れさらられてはいなかったことを意味している。しかし、その一方で、第二次大戦直後には、峠道の幅員中央部に植林がされるなど、一時はみちとしての機能が完全に放棄されていたこと、また、前出A氏の話では、A氏の宿に泊まり、初めて柏坂越えの峠道の存在を知る遍路もいるとのことである。

(8) 総理府「体力・スポーツに関する世論調査」(1997年10月)。過去1年間に行ったスポーツを問う質問(マルチ・アンサー形式)では、31.8%の回答者が「ウォーキング」を挙げている。

(9) 星野英紀, 1999, 「四国遍路にニューエイジ? —— 現代歩き遍路の体験分析」『社会学年誌』(早稲田社会学会) 40: 47-64.

た⁽¹⁰⁾。

内海村についても、このような大状況の例外たりえず、かつて同村の基幹産業であったハマチ養殖はふるわず、それに続く真珠稚母貝養殖も、安価な中国産のものにシェアを脅かされているといった構造的な産業不振にみまわれている。

このような状況のもとで、先にのべた二つの地域資源を活用し、村おこしイベントが計画されたわけではあるのだが、そこには、さらにもうひとつの「地域資源」として、上記「ほっと計画委員会」など、強力なリーダーシップをとりうる組織が存在したことを指摘しなければならぬ。これら三つの「地域資源」によって、初めて同イベントが可能になったと考えるべきだろう⁽¹¹⁾。

そもそも、道空間研究会／道空間研究所が四国遍路道をその実証分析の対象として設定するにいたったのは、そこに、道本来の宗教的シンボリズムとトポロジカルな空間的エピステモロジーが交錯する本源的な道空間を措定したからである。このような初発の問題関心から見ると、内海村の事例は、宗教的シンボリズム、空間的なエピステモロジーに加え、現代日本社会における地方農漁村をとり巻く問題状況を構成する諸要素が、「旧遍路みち」という意味的・物理的空間において発現し、また相互作用を繰り返すダイナミズムを示唆する好例と考えることができるだろう⁽¹²⁾。

(2) 愛媛県喜多郡内子町「無料宿泊所」

愛媛県喜多郡内子町和田地区において「無料宿泊所」を開設する M 氏へのヒアリングは、1998 年 9 月 8 日、同宿泊所の向かい側にある M 氏の果樹販売所にて行った。同氏の開設する「無料宿泊所」は、遍路みちである国道 379 号線沿いに建てられている農具小屋を遍路に開放するというもので、電灯・スタンドなどの照明、数組のふとんなどが用意されている。M 氏によれば、毎月、だいたい 10 名程度が利用しているのではないかとのことである⁽¹³⁾。以下は同氏へのヒアリング記録である。

【無料宿泊所を始めたきっかけ】「無料宿泊所」を始めたのは、14 年～15 年前に、次の 4

(10) たとえば、建設省都市局都市計画課まちづくり事業推進室監修、1997、『まちづくりイベント・ハンドブック』学芸出版社、119-124 頁。

(11) 村おこしにおけるリーダーシップの役割については、たとえば、北川泉編、1995、『中山間地域経営論』御茶の水書房、「第 10 章『むらおこし』と農村リーダー」等を参照。

(12) 関係者へのヒアリングでは、同村における各種の村おこしイベントの開催に対し、かならずしも好意的・協力的ではない住民の存在も指摘された。このような住民間の「温度差」についても付言しておく必要があるだろう。

(13) 同宿泊所に置いてある「ノート」から、利用者を推測数した数字である。

つの出来事があり、人助けが「お勤め」であると思うようになったから。

- ① で飛んだ洗濯物を拾ってくれた S という遍路に宿を貸す。1983 年 3 月 17 日。当時はまだ「無料宿泊所」を始めてはおらず、自宅に泊めた。
- ② 偶然に出会った大学生遍路と身の上話に及び、学校を辞めたいという彼を思いとどまるよう説得した。
- ③ 女性遍路と話をする機会があり、事故で夫を亡くしたという身の上を聞き、他人事とは思えず、深い同情を覚えた。
- ④ 西洋医学に疑問を抱いた医師と出会い、「学問」・「科学」では割り切れない何かがあるのではないかと感ずるようになった。

【将来】さしあたっては、トイレを設置したい。遺言として子供に継いで欲しい。

【他の接待所との関係】あまりない。

【接待の習俗】内子町和田では、かつては若者遍路・娘遍路などの風習があり、接待返しも行われていた。遍路みち（国道 379 号線）沿いでは、7 箇所～8 箇所の接待所があったと記憶している。

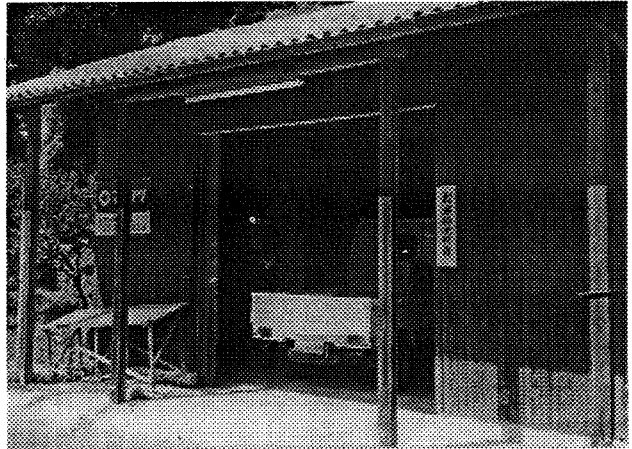


図 4-4 「無料宿泊所」

(3) 愛媛県喜多郡内子町「千人宿記念大師堂」

内子町大瀬地区にて、自宅横で「千人宿記念大師堂」を運営する山本宗清氏へのヒアリングは、1999 年 9 月 8 日、同大師堂にて行われた。

大瀬地区は、前出和田地区と同様、43 番源光山明石寺から 44 番菅生山大宝寺へと向かう遍路みち・国道 379 号線沿いにあり、同氏の話によれば、かつては接待の盛んな土地柄であった。このような土地柄を背景として、また自身の病氣快癒を神仏に感謝する意味合から、1927 年以降、同氏の実母・山本チョウ氏（故人）が、自宅を善根宿として遍路に開放していたとのことである。当時について、山本宗清氏は、「両親は狭い家に 14 人～15 人もお遍路さんを泊めていた」と述べている。

1930 年、善根宿を始めてから 3 年で、宿泊した遍路の数が 1,000 人を超える。ちょうどこのときに、長崎からの遍路が大師堂の建立を同氏両親へと勧めたことが、現在の「大師堂」が建設されるきっかけとなった。同氏両親の善根をたたえる人々、120 名あまりからの寄進によって、同年、自宅横に高野山より勧請した大師像を祀った「千人宿祈念大師堂」

が建立された⁽¹⁴⁾。大師堂ができて以降は、自宅の一室ではなく、大師堂を宿泊所として遍路に提供してきたとのことである。

山本氏は、1966年より大師堂の管理を両親から引き継ぎ、現在も、「大師堂」に宿泊する遍路に夕食を供応する接待を続けている。同自身も、友人と七カ寺詣・十カ寺詣をするなど、比較的、信仰心の篤い人柄であり、また、20年ほど前から、毎月21日の縁日に大師堂でお勤めをし、その後、近隣の人々とささやかな酒席をもうけているとのことであったが、遍路への接待については、信仰心からというよりも、むしろ「他人に助けられるよりは、助ける立場でいたい」という考えから行っているとのことであった。

最後に、「お遍路さんが泊まるというと、息子さんは黙っていてもうどん⁽¹⁵⁾を作ってくれるから、(大師堂と接待を) 継いでくれるものと思う」との話を山本氏から聞くことができた。信仰心が契機となって始まった同家の接待・善根宿は、現在の山本氏に受け継がれる際、形態は同様ながらも、その動機において若干の変化が生ずることになったようである。三代目への継承の際に、さらにどのような異同が見られるのか、非常に興味深い点である。

(4) まとめ

今回の調査では、上記3つの事例において、接待形態の多様性を示唆する3つの事例を調査した。

内海村の事例は、旧遍路みち・接待が「地域資源」として新たに活用されるひとつの姿を示すものであり、今後の継続的な調査によって、先述した遍路みち空間をめぐる諸アクター間のダイナミズムを、現代の社会状況という大きな背景のなかに位置づけ、より詳細に分析していくことが必要であると思われる。

内子町和田地区「無料宿泊所」の事例は、近隣の接待習俗とは独立して、開設者の個人的な「発心」から接待が始まったケースである。遍路への出立の動機が多様化している現在、その遍路を沿道で迎える接待者の動機もまた、かつてのような伝統的習俗に支えられた信仰心のみにかぎられるわけではないという可能性を示唆するものであった。

内子町大瀬地区「千人宿記念大師堂」の事例は、自宅の一室から始まった善根宿が、親子2代にわたる継続のあいだに、「大師堂」という物理的形式を獲得し、3世代目へと受け継がれていく現在進行形のプロセスである。接待習俗の過去・現在・未来を見ていく際に、ぜひとも継続的な観察が求められる事例でるといえるだろう。

(14) 同氏への聞き取り記録、および『愛媛新聞』(1995年3月1日)より。

(15) 同氏は製麺業を営んでおり、接待で供する夕食では、ご飯とうどんをだすとのことである。

5. 香川県における遍路道習俗—お接待を中心にして—

坂田正顕

本章では、涅槃の道場といわれる香川県讃岐の遍路道を媒介にした沿道地元住民を中心とする現代遍路習俗の動向について素描してみる。第一節では、80番札所国分寺周辺をめぐる遍路道（遍路ころがしで著名な急坂）に深く関与している沿道地域住民による自発的な組織活動の実態を追う。

第2節から第4節までは、結願の町といわれる大川郡長尾町の沿道地元住民を中心とする遍路道に関与する諸活動についてその動向を概観してみる。第2節では、へんろ資料展示室の開設をめぐる活動を、第3節では、結願の道を俳人山頭火の句碑建立で再構成しようとする活動を探る。第4節では、結願の道における地元住民によるいくつかの接待事例についてその概容を記述する。

(1) 香川県国分寺町「四国の道を守る会」の遍路道の維持管理活動

①道への関わりと遍路道の維持管理

はじめに、道一般にたいする人間の関与の仕方について確認しておく。その関与の仕方は時系列的に見て、およそ以下の4段階を踏むものである¹。

- 1) 道の開設（設計・権利取得・工事）
- 2) 道の利用（歩く・商う・演じる・飾るなど）
- 3) 道の管理（道の修復・変更・出入制御・封鎖など）
- 4) 道の閉鎖（自然消滅など）

現代社会では、道の開設・管理・閉鎖は、一部私道を除けば主として行政の管轄事項である。とはいえポストモダンの現代では、とりわけ開設・設計段階における意思決定過程への住民参加の権利が強く要求されており、かつての中央集権的な行政主導による道路開設はすでに時代遅れのスタイルとなってきた。これに対して、道の利用段階では、もとより一般個人や地域住民など広範囲の人々が実にさまざまな利用をしているのが実態である。昨今では、移動空間としてのみならず携帯電話による情報処理空間としての道空間利用が日常的風景となってきたことが現代道空間変容の1シーンとなってきた。

さて、遍路道については、どのような現況にあるのであろうか。

遍路道は巡礼の道であり、巡礼の道は修行の道である。したがって、そもそも巡礼の道は、移動するのに必ずしも快適である必要はなく、むしろ、一定程度の苦行を強いる空間でなければならなかった。それゆえ、遊行や修行の道は時に修行者が自ら開設すべき道で

¹ 坂田正顕「道の社会学序説」関東学院文学部 紀要第73号 1995年 30ページ

あったのである。しかし、巡礼修行となると²、目的を持ち巡路にそって霊場や修行場を次々に回る必要が生じるため、次第に道は固定され、巡礼を進めるのにそれなりに適合した道としての体裁を取る必要が生じた。巡礼者が歩く巡礼の道のところどころを、ある程度維持管理する手立てが工夫されることになる。坂道に階段が工夫され、路面がならされ、草刈がされるなどの活動も部分的には必要となった。とりわけ近世以降は、道しるべが立てられ、水飲み場が敷設され、遍路屋が建立される。これらの作為の大半は、巡礼者自身や地域住民の自発的奉仕によるものであったろう。

現代になると、かなりの部分が車道化されて、遍路道は産業社会における近代道路政策上の管理下に入った。これに呼応するかのように、徒歩中心の旧遍路道は車道化するか解体・自然消滅（道への関わり最終段階）の危機に瀕したのである。他方で、後期産業社会期になると建設省や環境庁などによる文化行政的な道路政策が、間接的ながら遍路道に影響を与えるようになった。「四国の道」のような文化行政的ルートが危機に瀕している古来の遍路道に重ね合わされるようになる。歩き道の復権が政策上の課題にもなり、歩き遍路道に関心が寄せられるような気運も、近年とくに高まった。

② 現代遍路道の維持管理に関与する社会的エージェンシー

「四国の道を守る会」は、香川県国分寺町の地域住民が自主的に当該地域のいわゆる「遍路ころがし」の遍路道保守管理活動を精力的に展開している地域集団である。また、実際には、部分的には、遍路道の新たな開設局面に関しても一定程度関与した集団でもある。

ところで、建設省や環境庁、あるいは四国4県の県市町村の行政はもとより、民間個人、遍路団体、遍路道沿いの地域住民、霊場関係者など、現代遍路道の整備活動に関与している関連団体や関係者は少なくない。現代徒歩遍路に決定的な影響を与え続けている遍路団体「へんろみち保存協力会」（代表 宮崎建樹氏）による草刈奉仕活動などは、その代表的な事例である。当会シンボルマークを冠した道しるべや平成遍路石建立等の活動はいうまでもなく、旧遍路道の掘り起こしや草刈活動などは、いずれも現代遍路道の在り様を大きく規定している一ファクターといえよう。遍路者自身による出張お接待等の活動は、現代においても広く見られるが、遍路道自体にかかわる活動は、思いのほか少ないのが現状である。

他方で、遍路道沿いの地域住民が主体的に旧遍路道などの保存や整備活動を組織的に実践している事例は、これまでわれわれの調査グループが知りえた範囲においてもそれほど多く知られてはいない。高知県中土佐町地域住民による「そえみみず遍路道」の維持管理活動、愛媛県内海村住民による「柏坂」遍路道の維持管理活動、あるいは香川県長尾町住民による遍路道沿いの山頭火句碑建立活動などがその主な事例である（これらの事例については、本報告書においても、それぞれ詳しい報告がなされているので、該当個所を参照

² 五来重『遊行と巡礼』角川書店 1988年 30 ページ

のこと)。これらの事例の中でも、上記の「四国の道を守る会」の活動は、その活動歴も比較的長く、活動内容もかなり多岐にわたっており、遍路道沿いの地域住民関与としては、大変興味深い事例のひとつである。と同時に、沿道地域住民の活動と現代国家／地方行政による施策とが接点を持ちつつ推移している事例としても、考察に値する事例といえる。

以下では、この「四国の道を守る会」の活動実態の概略について記してみたい。

なお、本調査報告にあたっては、1999年～2000年にわたって、下記のとおり、同会のご好意により、同会会長をはじめとする執行部役員の方々にヒアリング調査を実施させていただいた。また、2000年5月には、同会の草刈活動ほかの諸活動についての直接観察および春総会へ特別参加する機会を与えられた。ヒアリングと観察調査は以下の通りである。

1999年7月16日	会長宅においてヒアリング（会長以下役員5名）
1999年12月21日	会長宅においてヒアリング（同上）
2000年5月14日	80番国分寺～81番白峰寺への遍路道の草刈活動観察 馬場公民館での春総会特別参加

③国分寺町の概要

1) 歴史

いうまでもなく、国分寺という寺は、天平13年（741）に聖武天皇の勅令により全国六十カ所余の国府に建立された寺である。本調査対象となった国分寺町も、歴史的には讃岐国国分寺が開設された地域に位置する地域である。現在、80番国分寺に隣接して、特別史跡讃岐国分寺跡発句され整備されている³。かくして、古代より讃岐地方の政治的・経済的・文化的な中心地として繁栄してきた本地域は、藩政時代は高松藩に帰属し、廃藩置県とともに新居・国分・柏原・福家・新名村の5村が存立していた。その後明治23年の市町村制に伴い、端岡村と山内村の2村として編成されたが、戦後昭和30年に端岡村と山内村が合併し、このとき文字通りの「国分寺町」として町域をなし、現在にいたっている。

2) 人口

本町は、平成12年8月現在で、人口23,283人、世帯数7,680の規模をなしている。昭和30年の町政施行後当初の10年ほどは漸減傾向にあった人口も、昭和45年以降増加に転じ、以来、人口、世帯数ともに増加傾向を維持し、いずれも町政発足時（人口約1万人）の2倍を超える成長を示している。これに伴い、急速な都市化現象が進行しつつあるのが現状である。

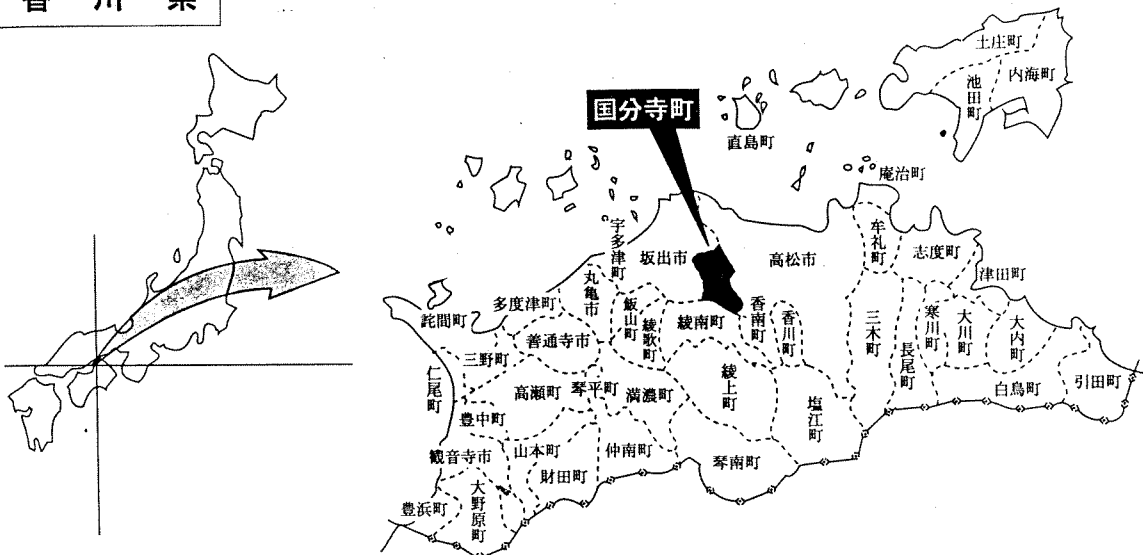
3) 地勢

本町は、香川県北部瀬戸内海寄りのほぼ東西軸の中心内陸部に位置しているが、その面積は26.25k㎡だが、東側は高松市に、東側は坂出市に隣接している（地図5-1参照）。特に、町北部は、高松市・坂出市との境に位置する300～500mの五色台の山々がせまり、

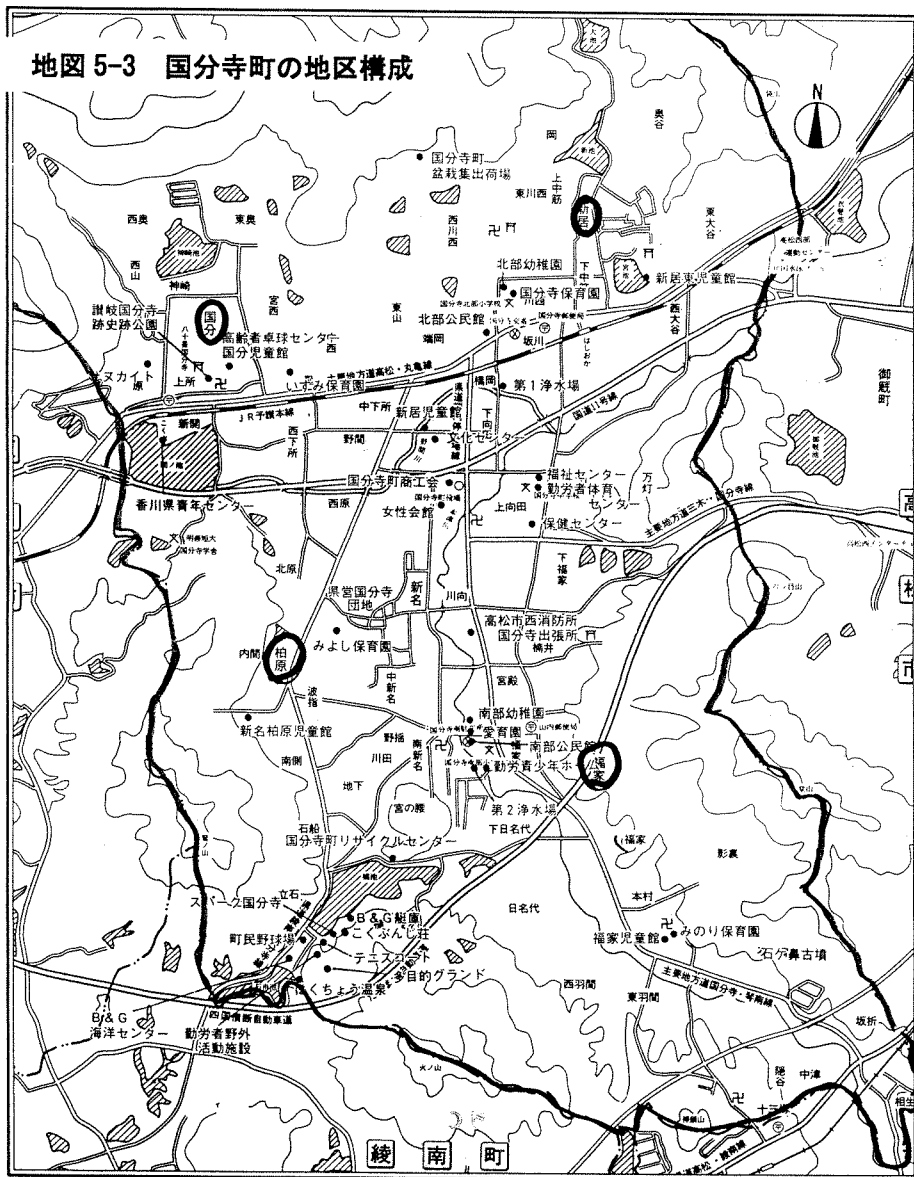
³ 讃岐国分寺資料館『讃岐国分寺』を参照のこと

地図 5-1 国分寺町の位置

香 川 県



地図 5-3 国分寺町の地区構成



ここに位置する 81 番白峰寺、82 番根香寺の 2 札所と裾の平地にある 80 番国分寺との地勢の関係が、今回調査対象となった「四国の道を守る会」活動の重要な一背景にある。

4) 国分寺町の産業その他

本町は、急激な人口増加に伴う都市化の中で、交通網の整備とともに高松や坂出など近郊都市のベッドタウン化が著しい。昭和 30 年代に 1500 戸を超える農家戸数も平成 7 年には 1000 戸程度に減少し、農家人口も町政施行当時と比べて半減している（5000 人程度）。農業生産のなかでも、全国的に有名なのは盆栽で、松の盆栽出荷全国一の香川県におけるその約半分を当町が生産している。その他、ブドウ・ミカン・花木などが主要な農産品となっている。

農業に比べて、石材業をはじめとする工業生産は製品出荷額に大きな変化は見られないが、事業所数、従業員数ともに減少傾向にあり、かわって第 3 次産業種が増加している。

④「四国の道を守る会」の成立事情とその推移

さて、以上のような特質を持つ国分寺町内において、遍路道の維持管理をめぐり四国全土においても特筆すべき沿道住民自身による活動がある。「四国の道を守る会」の活動がそれである。当組織について、まずその成立事情から眺めてみよう。

現組織には、その前身にあたる「札所めぐり国分寺同好会」なる組織があった。この母体組織が発足する直接のきっかけになったのは、1979 年（昭和 54 年）における愛媛県 60 番札所の横峰寺遍路道での遍路転落死事故であったという。

横峰寺にいたる遍路道にはいくつかのルートがあるが、いずれもあるところからは車の乗り入れ不可能となり現在でも歩かねば札所参りができない。横峰寺の遍路道は俗にいう「遍路ころがし」の難所のひとつとして名高い。この遍路転落死事故が起きた時、町内有志 13 名で国分寺周辺の遍路道の修復に出かけたことが組織形成の遠因となったという。もともと、それまでもすでに有志でバス遍路に出ていたことが、遍路道修復に出る下地となっていたのである。有志によるバス遍路をし始めたのは、さらに遡ること 1973 年（昭和 48 年）のことであったという。このような横峰寺遍路ころがしの道の苦行体験を有志自らが共有していたからこそ、遍路道修復奉仕活動へと展開していったものであるに違いない。かくして、当初の遍路道修復活動は、遍路経験を持つ当地域の遍路自身による広い意味での「お接待」のひとつとしての性格をもっていたのであろう。

以上のような経験を契機にして、1981 年（昭和 56 年）4 月に前述の「札所めぐり国分寺同好会」が発足し、それまでの緩やかな町内遍路同行仲間がひとつの明確な自発的集団を構成することになったわけである。発起人は、Y.H.氏、Y.K.氏、Y.T.氏、M.S.氏の 4 人であったという。うち 2 名は、1999 年現在ですでに物故している。いずれも、かなり高齢の方々である。このようにして成立した組織活動の特徴は、この時点では、「札所めぐりの活動」と「周辺遍路道の維持管理活動」および「旧遍路道の復元活動」とが同居したものであったようである。記録によれば、とりわけ、環境庁による「四国の道」事業計画に呼応する

活動が顕著であった⁴。

ちなみに、昭和56年4月の発足時に最初に実施した活動は、80番～81番の歩き遍路道の道しるべ奉仕作業であるが、一方で、遍路道復元のため、国分台自衛隊演習場内を通る旧遍路道に関する調査を実施している。そのために、西奥線の自衛隊演習場内の大師堂までの調査活動と再現のための申請活動などを精力的に実施している。特筆すべきは、遍路道復元をめぐり、隣町出身の県会議員のO.S.氏に面談を求めている点である。仔細は詳らかではないが、O氏は、その後、当会の主要な活動局面において、行政とのパイプ役として実質的にきわめて重要な役割を果たすことになる。と同時に翌年には、当会顧問の一人となり今日に至るのだが、O氏が単なるパイプ役を超えて、実質的に本会の良き理解者として、また、むしろ、本会の当初からのあたかも実質的な町内一会員としての関わり方に、本会活動の維持継承にひとつの秘密が隠されているように思われる。また、このことを本会指導層が良く理解していることが十分うかがえるのである。

さらに、同好会発足の翌年1982年（昭和57年）になると、組織名が「大師の道をたどる会」（通称、「遍路道の会」）に改称される。発起人は8名であった。このとき会員規模は44名を数えていた。初総会は、馬場公民館にて11月に開催され、出席者は32名にのぼっている。いずれにしても、同会活動の焦点が、「札所めぐり」から「道」すなわち「遍路道」に移行したことが窺える。事実、同会はそれ以降、旧遍路道沿いの道標整備活動や丁石復元活動を展開している。

他方、改称は、ほかにも同様の名称をもつ会があるからであったようである。もっとも、実質的には、改称前年の1981年（昭和56年）には環境庁ルートによる「四国のみち」プロジェクトがスタートし、前述のようにこれに呼応した当会の活動により、「道」や「遍路道」への関心が会員諸氏にも高まったこと、また、そのために同好会の組織化が要請されていたことなどが組織名改称の一因であったようである⁵。

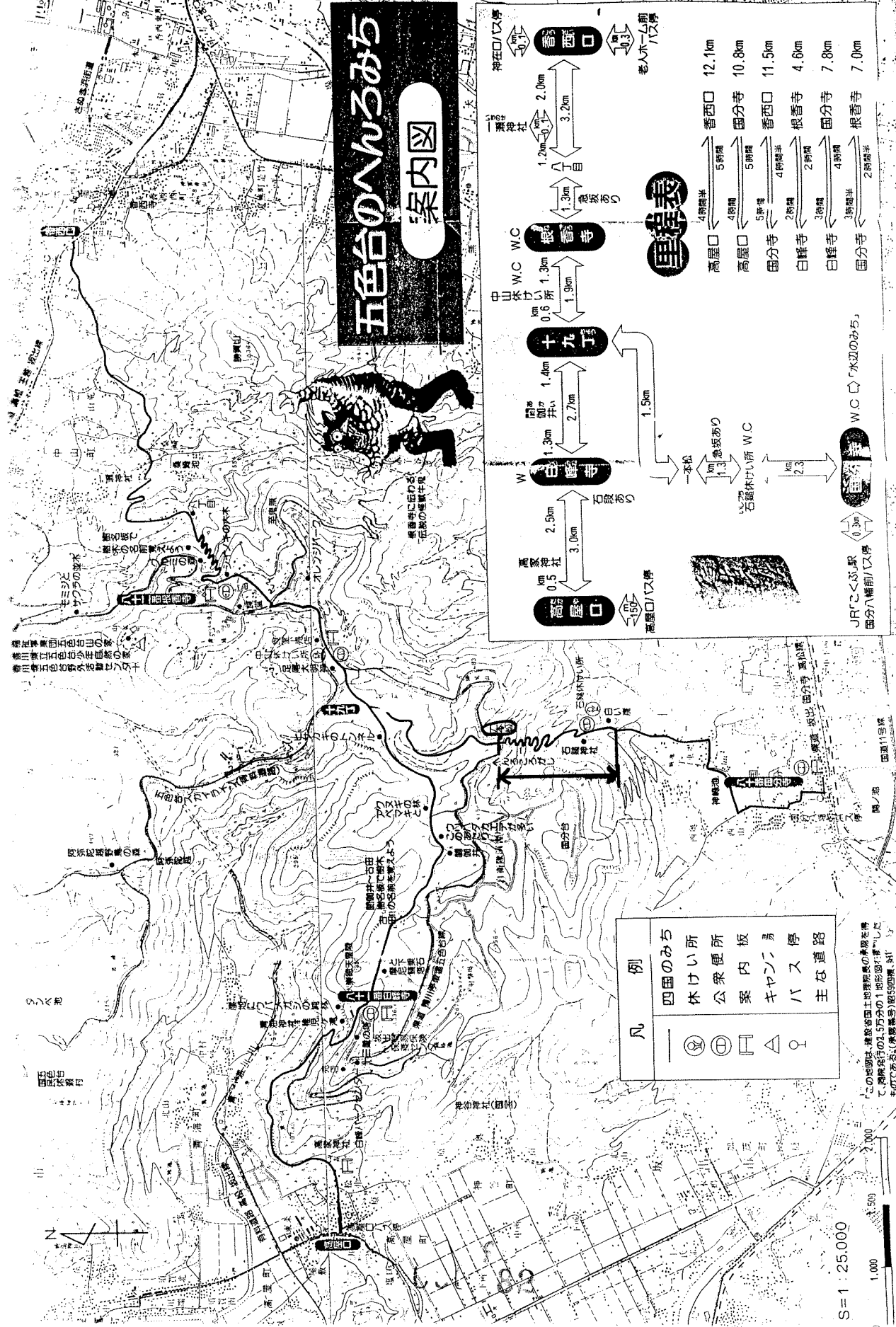
こうして同会は、会則が制定されて、会長1名、副会長2名、事務局6名、幹事4名、会計1名（事務局より）、会計監査2名（幹事より）、顧問4名を擁する明確な組織構造をもった遍路道沿道住民組織へと発展したのである。また、前述した県会議員O氏をはじめ、国分寺町長、教育長他が顧問となって、同会を外部制度に適応させる人的資源が布置されたことも重要であろう。

なお、「大師の道」を「たどる」という語句からは、会員自らが遍路を実践するという意味合いが引き続き込められている点も看過できない。自ら遍路するというポジションを残しつつも、同会は、札所めぐりや遍路行そのことよりも、国分寺町周辺の遍路道が持つ文化的価値に積極的に関与する沿道地域集団へと性格変化を遂げたことになる。

上記の通称「遍路道の会」になってから2年後の1984年（昭和59年）に、国分寺町内

⁴ 四国の道を守る会編『四国の道を守る会』（1）

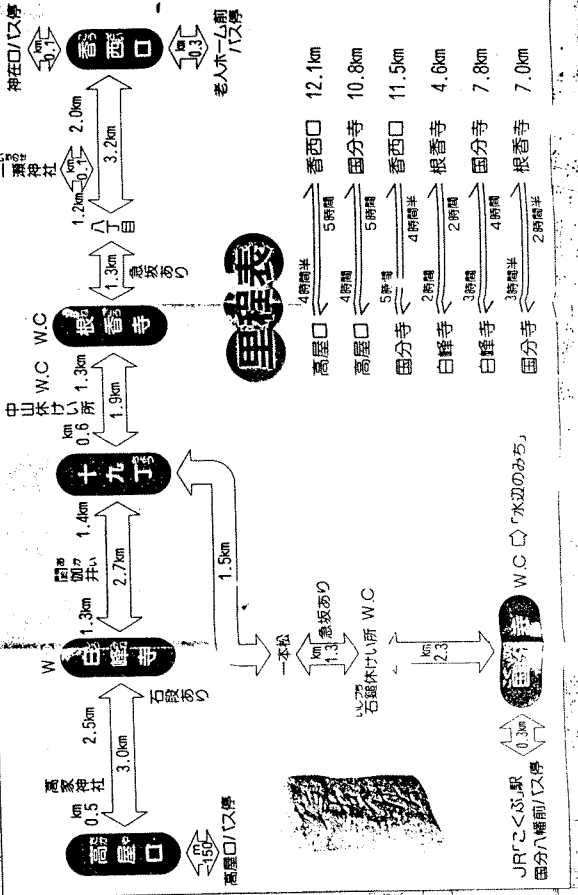
⁵ 「四国のみち」に関しては、長田攻一「行政と遍路道」（早稲田大学道空間研究会編『現代社会と四国遍路道』第3章）を参照されたい。



五色台のへんろみち

案内図

里程表



凡例	内容
○	四国のみち
⊕	休けい所
⊞	公衆便所
⊞	案内板
△	キャンプ場
○	バス停
—	主な道路

この地図は、建設省国土院の地形図を基に作成されたものであり、地形図の1:50,000の縮尺に準じて作成されたものである。(縮尺換算) 1:25,000

S=1:25,000
1,000
2,000

地図 5-2 五色台の廻路ころがし

に環境庁ルート「四国のみち」の一コースである全長 17.2km の「五色台のへんろみちコース」が完成される。この年は、弘法大師入定 1150 年の遠忌の年でもある。これを機に、同年 6 月には、国分寺町役場から同会へ五色台ルートの一部である「国分寺—一本松間遍路道」の巡回パトロール委託が依頼された。同会の活動をそれなりに町役場が評価したことを物語るものであろう（地図 5-2 の矢印の部分参照）。

その後、平成元年（1989 年）1 月になると、「大師の道をたどる会」は、さらに「四国の道を守る会」へとその名称を再び改称した。この時点での会の規模は、100 名前後にまで拡大している。ところで、この組織名改称では、「大師の道」→「四国の道」、また「たどる」→「守る」、と変更されている。したがって、少なくとも言葉の面では、「大師の道／遍路道」は「四国の道」という、より上位の道空間の位相に組み込まれ、同時に「たどる」という巡礼主体の遍路実践は「守る」という地域資源的文脈に転換された、といえる。

このことは、一見、会の性格が、ある意味で「脱遍路」ないし「脱遍路道」という性格を帯び始めたかのような印象を与えるが、後述する会則などからみて必ずしもそうではない。他方、会の活動は、遍路道の整備活動はもとより、さらにひろく町内の地域環境整備活動一般へと広がりつつある、との紹介も当時なされた⁶。

しかしながら、本会会則をみると「たどる会」と「守る会」ではさしたる大きな変更は見られない。「四国の道」が完成し、一部ルートの巡回パトロール委託事業の経緯もあって活動タイプが定着し、組織規模の発展にあわせて、活動焦点の明示化を意図して改称したものとと思われる。視点を変えれば、地域住民のボランティアな遍路道維持活動が、行政の自然歩道政策と接合し、新しい活動レベルに発展したものと見ることもできるかもしれない。

平成 7 年になると、環境庁ルートの「四国の道」事業の再整備事業がスタートし、香川県環境土地政策課では、雲辺寺ルート他の補修事業に着手するが、平成 9 年には、同会要請を受けて国分寺町産業振興課から上がって来た五色台ルートの補修事業に乗りだした⁷。台風後の荒れた遍路ころがしの道整備活動は、会員の高齢化が進行する同会にとっても容易な活動ではない。道がえぐれ、溝もできてデコボコとなり、水捌けも悪く、落ち葉や小枝が散乱して道の体をなさない。

そこで、維持管理の容易な遍路道へと部分舗装することになり、3000 万円ほどの事業費をかけて、土色の特殊樹脂加工を施す「マサド工法」により、一本松からのとりわけ急な部分を舗装したのである。それでも、嵐の後は、清掃活動が大変であるようだ。当会では、マサド工法による補修を一部ではなく、遍路ころがし全長にわたる整備事業を期待している。たしかに、この舗装によれば、単なる無機的な舗装ではなく、一見して、土の肌のようにあり、水捌けも決して悪くなく、台風でも道が壊れて遍路が危ない思いをするこ

⁶ 「ふるさと通信」第 28 号、平成 2 年 5 月

⁷ 香川県環境土地政策課におけるヒアリングでは、基本的に地元からのニーズを下に国分寺町他のコース補修事業に着手したという。

とも少ない。もっとも、歩き心地は、自然の土には敵わない。

かくして、20年近くの歴史を持つ「四国の道を守る会」は、100名前後の組織規模をもつ遍路道沿道地域住民による自発的な現代遍路習俗支援の社会的エージェントとして特異な位置を占めるにいたっている。

組織成立と今日までの推移の概略は以上のごとくであるが、主な経緯をまとめたものが以下の年表である。

表5-1 「遍路道を守る会」の推移

年 月	事 項
1973年（昭和48年）	町内有志によるバス遍路開始
1979年（昭和54年）	60番横峰寺への遍路道で遍路の転落死事故と遍路道修復
1981年（昭和56年）	環境庁ルート「四国のみち」プロジェクト開始 「札所めぐり国分寺同好会」発足
1982年（昭和57年）	「大師の道をたどる会」改組
1984年（昭和59年）	五色台のへんろみちコース完成 五色台ルートの歩き初めの実施（同会主催） 弘法大師入定1150年遠忌
1985年（昭和60年）	ルート沿いの修行大師建立開眼法要
1989年（平成元年）	「四国の道を守る会」へ改称。創立10周年記念行事
1990年（平成2年）	「四国のみち句碑」を建立
1997年（平成9年）	「四国のみち」再整備事業による五色台コース遍路道補修
1999年（平成11年）	創立20周年記念事業による徳島バス遍路実施とお接待

⑤「四国の道を守る会」の組織構造

ここでは、以上のような成立経緯をもつ同組織の組織構造について主要な点を整理してみる。

1) 会員数

本会の平成12年時点での会員数は、平成12年度会員名簿によれば101名である。同会発行の小冊子『四国の道を守る会』によれば、平成9年時点で102名、平成2年時点で124名である。したがって近年は、100名前後で推移してきていることがわかる。現在はわずかながら減少傾向にあるようだ。

前述したように、本会は13名の有志による遍路道修復からはじまって、昭和56年、4人の発起人により草創された「札所めぐり国分寺同好会」をその前身とするが、発足時の正確な会員数については不明である。しかし、その翌年改組された「大師の道をたどる会」では、昭和59年時点で67名であったことから、15年程で倍増に近い組織成長をしたことになる。

2) 会員の構成

会員は、すべて国分寺町民である。ただし、後述するように、国分寺町の全域ではなく、遍路道に近い地区であり、国道 11 号線より北側に位置する地域住民である。会員は、5 班構成の中に位置付けられる。1 班は馬場西・馬場中・原地区で計 19 名、2 班は馬場東地区で計 20 名、3 班は西奥・西山・東奥地区で計 28 名、4 班は国分橋岡・東山地区で計 15 名、5 班は国分下所・里・隅田地区で 19 名である（地図 5-3 参照）。

また、会員の年齢構成の詳細は不詳であるが、全体的に中高年齢層が大半を占めるが、50・60 歳代が一番多いという。とくに 60 過ぎの定年退職者が多いという。とはいえ、30 代の会員もわずかながら存在しているという。

性別構成については、ほぼ 1/5 ほどが女性会員で、大多数は男性会員である。この点は、現代遍路の性別構成がほぼ男女半々であることに比べて、特筆に値しよう。沿道住民による遍路道保存活動が男性を中心に実践されていることが持つ意味については、地域特性も含めて検討に値することだろう。

会員の入会は随意であるが、近年は新規会員が少なく、高齢化にやや問題があるようである。その結果、120～130 名をピークに、会員の死去等に伴う自然減で漸減の傾向があることは前述したとおりである。

3) 執行部の体制

執行部の役員は、会長 1 名、副会長 2 名、会計 1 名、事務局 2 名の 6 名からなる。現会長の K.C. 氏は 1998 年より在任している。また、事務局の 2 名は会計監査委員であり、その他の役員は幹事である。さらに、顧問 7 名がこれに加わる。うち 1 名の県会議員 O.S. 氏は、本会発足当初よりの後見人的存在で、本会の強力な支援者である。その他の顧問も県会議員、国分寺町長、国分寺教育長など行政関係者が多く名を連ねている。形式的な顧問役が少なくないようにも思えるが、実質的に重要な役割を果たしてきた顧問は、前述の県会議員 O.S 氏であると思われる。

執行部役員は、総会にて会員より選出され、その任期は 2 年であるが、再任は妨げない。また、執行部役員の選出方法は、会員の互選による。

4) 班構成と地区構成

全会員は、現在、2) で見たような 5 班構成の中に位置付けられる。平成 2 年時には 6 班構成をとっていたようである。各班には班長が置かれるが、班長は役員扱いとなり、役員会を構成する。この役員会の主要な業務は、総会準備業務である。

ところで、地域単位の班構成は、かならずしも当地域の地域自治会と重複するものではない。本会自体は、自治会とは直接的な関連はないようである。地域婦人部などとも直接的な関係はない。したがって、本会は、地域自治会の下部単位組織でもなければ、婦人部ほかの地域集団の関連組織でもない。あくまでも遍路ないし周辺遍路道という共通関心事項においてのみ地域住民が集った独立の地域集団である。

なお、本会の班構成の基礎になっている地区割は、以下のようである。まず、国分寺町内は、大字レベルで国分・新居・柏原・福家の 4 地区からなる。このうち、

本会会員が帰属している地域は、国分と新居の2地区である。これらの2地区は、国道11号線より北側に位置する地区であり、遍路道に近い地区である（地図5・3参照）。1班から3班までは、主に西側の国分地区に属し、4・5班は、主として東側の新居地区に属している。遍路道ないし四国の道は、この両地区のほぼ中間に近い国分地区を南北に通っている。まさに、遍路道の沿道住民同士が線的な遍路道を媒介にして、いわゆる「線的な社会関係」を形成しているのである。

5) 本会の規約構成

本会発行の小冊子「四国の道を守る会」から本会会則の主要な事項を抜粋してみよう。会則は、第一に、本会名称を宣言し、第二に、「この会は大師の遺徳を顕彰し後世に引きつぐと共に会員相互の健康と親睦をはかることを目的とします」として、本会目的を弘法大師の遺徳顕彰であると明言している。この点で、平成元年の組織名称変更時に「大師の道」を返上して「四国の道」を採用し「脱遍路」的姿勢を見せたのであるが、組織目的にはいささかの变化も見られないのである。

第三に会員資格（男女の区別なくオープン）、第四に執行部役員の配置、第五に役員選出法、第六に役員任期（2年）、第七に規約改正方法、第八に会費、第九に会計報告、第十に当面の事業計画について規定している（資料①参照）。ちなみに、当面の事業計画には、①国分寺町周辺のへんろ道の整備、②八十番霊場国分寺における春秋のお接待の実施、の2大事業が設定されている。へんろ道の整備も広い意味でのお接待であろうが、巡礼の道の整備自体を独立して第一の事業目標に掲げている点が重要であろう。単なる接待でもなく、遍路行に欠かせぬ物理的装置としての遍路道に着目しているところに着目したい。

6) 会計構造⁸

規約において明文化されているように、会の活動費として会費徴収および寄付金が見込まれており、また執行部に会計役員および会計監査役員を配置して、総会における会計報告が義務付けられている。

会費は2000年春現在、一人年額1000円である。平成11年度の会計報告資料をみると、歳入の部では、概算で、繰越金が約40万、会費が10万、寄付金6万、補助金39万、雑収入若干で、合計約100万弱の収入構造をもっている。これにたいして、歳出の部では、総会費25万、清掃助成金15万、事業活動費9万、諸経費2万、役員会費1万程度である。

その結果、40万円ほどが次年度繰越金となり、近年では、繰越金が一定額で毎年40万円、その他は収支がとんとんの財政構造をもっているようである。

ここで、着目すべきは、歳入の部の補助金である。補助金約39万円のうち、香川県からのもの（四国自然道管理委託金）が19万、国分寺町からの同事業補助金が20万円と2本立てとなっている。これまで何度も言及した環境庁ルートの「四国の道」事業関係の補助金である。したがって、本会収入構造の約4割近くが「四国の道」関連事業に依存してい

⁸ 平成12年度春総会配布の「平成11年度 四国のみちを守る会歳入歳出計算書」

大師の道をたゞる会々則

- 一 この会は「大師の道をたゞる会」と言います。
 - 一 この会は大師の遺徳を顕彰し後世に引きつぐると共に会員相互の健康と親睦をはかることを目的とします。
 - 一 会員にならんとする者は男女の別なく誰でも入会出来ます。
 - 一 この会には会長、副会長、会計、幹事、顧問若干を置きます。
 - 一 会長その他の役員は総会に於て会員より選出する。
 - 一 役員の仕事は二年毎として再選は妨げない。
 - 一 規約の改訂は役員会で起草して総会決議により決定する。
 - 一 この会の経費は会費及び寄付金で充てます。
 - 一 この会の会計報告は総会のとき発表する。
 - 一 この会の事業は当面次の事業を計画する。
- その一、国分寺町周辺のへんろ道の整備。

ることになる。こうした財政構造が、平成元年の組織名改称とある程度関連していると考えられることは自然であろう。

⑥「四国の道を守る会」の活動状況

1) 主な活動史

<道標・丁石>

本会の活動は、前述のように、象徴的には1979年の横峰寺の遍路転落死事故がきっかけの遍路道の修復作業に遡ることができる。当時、まず最初に実施した活動は道標奉仕作業である。その後、1981年「大師の道をたどる会」が発足してから、3年間にわたって国分寺から白峰寺までの遍路道沿いに道標150本を整備し、さらに1丁ごとに建っている丁石の復元活動などを精力的に実施してきた。本遍路道の丁石は、そこかしこになお残存し、地蔵が彫られた地蔵丁石が多い。丁石によっては、花が手向けられているものもあれば、西奥船ルート of 山沿いの丁石には、一部欠損しているものもある。

<四国の道歩き初め>

1984年4月8日には、完成したばかりの環境庁ルート of 「四国のみち」 of 五色台コースの一部、国分寺～石鎚神社間2.5km of 遍路ころがしの「歩き初め」を主催した。住民百人ほどが参加したという⁹。

<巡回パトロール>

その後、同様の整備事業を続けつつ、1984年6月からは、国分寺町からの委託を受けて、国分寺・一本松間3.6km of 遍路道の巡回パトロール活動に従事することになる。毎月1回の巡回パトロールである。この活動は、今日まで連続と継承されている(2)「日常的活動の現況」の項を参照)。

<修行大師像建立>

翌1985年には、一本松からの遍路ころがしに空海の「修行大師像」を建立した。これは、同ルートに残る大師加持水の泉を復元したことを記念して、会員の石材業F.S氏が自らノミを手仕上げた約1m高さの大師像である。その昔、遍路道沿いの水飲み場は、遍路にとっては不可欠の遍路道装置のひとつであった。いまでも、遍路道沿いには、数多くの水場や柳水庵のような施設が点在している。

現在では、飲料の自動販売機にその役割を引き渡しつつあるが、大師ゆかりの加持水は、遍路習俗にとって象徴的な「水の文化」の一段面でもある。現在でも道しるべなどと共に「遍路道ファニチャー」 of 重要な構成要素のひとつである。同会は、出水が悪くなったため、新たな水脈を探し、加持水の泉を復元したのである。遍路道の維持管理には、とりわけ重要な活動といわねばならない。

<川柳句碑建立>

⁹ 「四国新聞」1984年4月9日

さらに、1989年には、同会発足10周年を記念して、十周年記念碑を休憩所付近に建立すると共に、翌1990年には、記念事業として休憩所遍路道沿いに俳句・川柳の句碑建立を实らせた。十周年記念碑付近には「登りきて松風涼し法の水」以下7基の句碑、四国のみち「川柳坂」には「へんろ道逢うて又逢う会いかな」以下21基の句碑が建立され、計28基の句碑群が遍路を迎える。川柳句碑は、当時の同会会長が川柳会長でもあったため、公募により決定したという。1基一万円の寄付を募ったという。この句碑は、その後も募集され、現在では30余基を数える

2) 日常活動の現況

本会の日常的な主要な整備活動を列挙すると以下のようである。

- i) 遍路道の巡回パトロール
- ii) 遍路道の草刈・掃除
- iii) トイレの掃除
- iv) 水パイプのつまり補修
- v) 道標の設置
- vi) 丁石の復元
- vii) 植樹
- viii) 句碑建立
- ix) お接待

以下、簡単な説明を加えておこう。

i) 巡回パトロール

これについてはすでに触れているが、これは、町からの委託事業として遂行している。この活動にあたっては、同会は町へ「四国の道維持管理委託業務実施覚書」を提出している。その実施要領は、①春・秋年2回全員による草刈・遍路道清掃奉仕活動作業の実施、②月々のパトロールの班によるローテーション実施、および休憩所付近とトイレの清掃、③班構成の内容などについて、規定している。このような委託事業に対して、行政からの補助金が支払われていることはすでに指摘した。

ii) 遍路道の清掃・草刈

上記のi)に含まれている。この活動は、年2回春秋の総会の前に、実施されている。2000年度春の草刈作業に同行する機会を得たが、朝8時に国分寺前馬場公民館に集合(50人前後の参加)。熊手・電動チェーン・カマなどの用具を持参。大きく2班に分かれ、1班(20数名)は町役場のマイクロバスに乗り、一本松から遍路ころがしを下山しながら草刈等の清掃をはじめ。もう1班は、遍路ころがしの坂下から登山しながら同様の作業を実施する。両班は、加持水の下方、石鎚神社の上方にある中間地点で合流するはずである(地図5-2参照)。

この遍路ころがしは、四国の道が完成してから10年を経過して、環境庁が平成7年度より再整備事業としての補修事業に着手した3年目に補修対象に指定された遍路道である。

その経緯について、香川県環境・土地政策課・観光振興課でのヒアリングによれば、管理業務委託している「四国の道を守る会」の高齢化が進展し、路面補修委託作業が困難化してゆく中で、国分寺町より補修要請が出されたという。そこで、平成9年度に3000万円規模での補修工事が実施され、管理しやすい工法により遍路道は「舗装」されたのである。マサド舗装とよばれるその工法は、土を特殊樹脂で固める方法で、見た目には土色をしているが路面の感触はややつっぱって滑りにくい。たしかに雨のときなどは滑りにくく道もでこぼこにならないだろう。しかし、水が自然土より路面に吸収されないため、水周りの問題が心配であるし、晴れているときは、やや硬く足が突っ張り必ずしも歩きやすいものではない。自然の土よりも疲れはたまるであろう。

さて、以上のような路面を一部に持つ急坂の草刈は、春先のため、毛虫多くマムシ等の蛇出現の危険性もあり、急坂での作業はかなりきつそうであった。草刈・水道のパイプ詰まりの解消・加持水の貯水部分の泥掃除・トイレ掃除・石や岩の取り除き・路面の清掃・休憩所の清掃などなど作業量が多い。約3kmの距離だが、ほとんど休みなしの作業が続く。もくもくと作業してようやく10時30分ころにはすべて終了する。遍路道の下側の入り口から出迎えるマイクロバスや自家用車などに乗って、公民館まで戻り、とりあえずの解散となる。

11時からは春の総会が開催される段取りになっている。

iii) トイレの掃除

トイレは加持水などと同様に、遍路行に不可欠のもうひとつの装置である。札所のトイレのみならず遍路道沿道にもトイレは必要である。札所のトイレは札所の管理下にあるが、遍路道沿いのトイレはさまざまである。国分寺遍路道には休憩所があり加持水がありトイレがある。これらを同会が一括して維持管理しているわけである。加持水にリンクする水流を巧みに配してトイレの手洗い水が確保されている。この水を使いながらのトイレ掃除である。冬場はさぞかし冷たい作業になるのであろう。

iv) 水パイプ詰まりの補修

加持水水流の清掃は、冷たい水に深く肩近くまで突っ込んでの泥さらいであった。通常の水道工事ではないため、勘所を心得ていない人でないと作業はきわめて難しそうに見える。水を誘導する石の配置調整作業もコツがいるであろう。遍路行における水の位置ないし水の文化について反省させられる作業であった。

ただし、飲料水については、近年、水流をストップしているという。かつて浮浪者が休憩所に住み着き、火事の発生が危惧された。

v) vi) については、活動の歴史において触れておいた。特に、丁石については、この地域周辺のものには地蔵が彫られているものが多い。また、現在もなお、所要所に設置されており、いまは遍路も歩かなくなった西奥線ルート of 旧遍路道沿いに多数残存している。これら丁石の分布図作成などがどの程度実施されているのだろうか。同会ではそこまで作業を進めていないようである。

vii) 植樹

桜の木は平成 2 年においてすでに 500 本以上、松やサツキなども植樹され、当該遍路道は花遍路の道に変わりつつある。平成 4 年には宝籤による桜の植樹も遍路道沿いに行われている。まさに「道を飾る」活動が実施されている。

中腹にある石鎚神社の春祭りには、桜の木が賑わいを添え、うどんや寿司のお接待をうける幸運の遍路も少なくない。

viii) については、すでに述べたのでここでは割愛する。

ix) お接待

本会のお接待は、春(3月)と秋に国分寺境内にてテントを設営し(教育委員会のテント借用)、200~300人分くらいの「ぜんざい」「もち」を接待するという。札所境内での出張接待は、現代ではかなり一般的なスタイルとなった。本会規約にもあるように、お接待は会の組織目的のひとつである。ただし、年 2 回のお接待はやや大規模であるが、イベントとしての性格が強い。遍路道の整備事業(これもお接待の一種といえるが)にくらべて一般的な物品のお接待に同会の特徴がよく現れているとはいえない。やや形式化したきらいが覗える。

3) 総会

総会は、春と秋の年 2 開催される。2000 年 5 月 14 日春の総会の状況について、その概略を記しておきたい。

前述のように、草刈活動が終わると国分寺門前横の馬場公民館にて総会が開催される。出席者は草刈時よりもかなり減った印象がある。全員で 40 数名ほどであろうか。

総会の議事運営自体は、11 時 10 分から 11 時 40 分の約 30 分程度の進行であった。会員名簿と収支報告書のパンフレットが全員に配布され、簡単な会長挨拶後に会計役員より収支報告がなされる。ついで、会計監査役員から監査報告がなされる。会計報告が承認されると、討議事項に移り、今回は正月の注連縄交換と 3 月のお接待について例年どおりの方向付けがごく簡単に役員の側から提示された。

ついで、道標建立の必要について会員から意見が出された。白峰寺への道標が必要で、近年とくに多くなった歩き遍路からよく質問される、という。さらに、車遍路からは国分寺への行き方が質問されることが多いという。去年も同様の意見が出されたが、「四国のみち」のしるべがあるので新しくは建てられない、との県の立場であったらしい。これにたいして、「四国のみち」と「遍路道」とは決して同じものではない、という意見が出された。地元地域社会の住民にも両者の混同がみられるという。

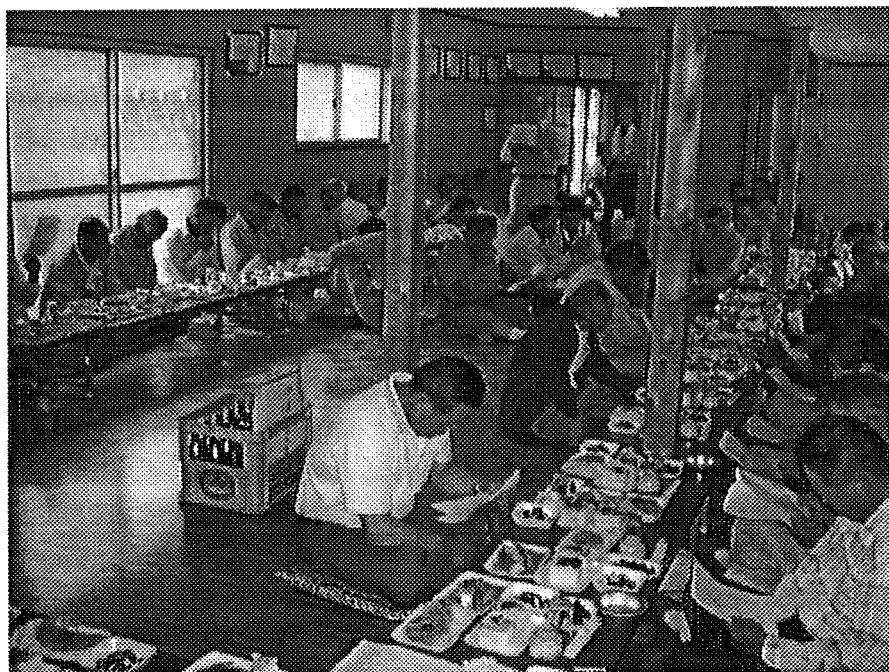
その後、それぞれの小サークルでの意見交換・雑談に移る。

12 時ころから当会の顧問・来賓の列席者からの挨拶が始まる。顧問の県会議員 O.S. 氏、K 先生、町長代理、支部長、香川県庁自然保護課関係者などの方々の祝辞が続く。乾杯となり、すでに用意されていたこの季節の郷土料理「押しぬき」(角寿司)を中心とする宴会に入る。

当地でもほとんど作らなくなったという「押しぬき」は現会長の料理手腕のなせる技で、女性群の指揮をとりつつ大量に入念に心を込めて準備されたものである。会員一同がこの「押し抜き」を楽しみにしていた様子がふつふつと伝わってくる。宴会はその後 3 時近くまでゆっくりと続けられるのである。そしてこのとき、本会の総会とは、民主主義の象徴であると共に、実は地域の伝統文化の再確認と連帯統合強化のための生きた舞台装置であることがよく理解されるのである。ここでは、ゲゼルシャフト的な民主的手続きとゲマインシャフト的連帯強化とが見事に並存しているのである。

このような内的連帯の基盤醸成をもってはじめて周辺遍路道の維持管理という自発的共同行為に参画するエートスの取得が可能となるのである。秋には秋の総会があり、泥鰯汁を中心とする宴会がこれに続く。春遍路も秋遍路も、こうした地域社会関係によってはじめて整備された「快適な遍路ころがし」を体験することになるのである。

以上のように見てくると、ここでは現代遍路道の一部が沿道地域住民の主体的な努力によって、当該遍路道コースが選定され、デザインされ、管理維持されてはじめて徒歩遍路の利用するところとなっていることに気づかされるのである。大局的には歴史的に形成されてきた遍路道も、局所的には時代に応じて変容し、まさに「道は生きている」、ということを実感できる好個の事例といえるだろう。



四国の道を守る会の春の総会風景（2000年5月14日、馬場公民館にて）

(2) 香川県長尾町におけるへんろ資料館展示室開設の活動；「結願の道」における沿道住民の対応①

本節では、「結願の町」といわれる香川県大川郡長尾町における遍路道を契機にした地域社会の動向について報告する。長尾町には 87 番長尾寺と 88 番大窪寺の二つの札所があるが、これを結ぶ結願の遍路道を媒介にしたお接待を中心とするさまざまな遍路習俗が歴史的にも多く存在してきた。現代においては、どのような習俗や動向がみられるのであろうか。はじめに、歴史的な経緯をごく簡単に素描した上で、本調査に関する限りでの長尾町のついで概観し、具体的に、本町における地域住民の傑出した対応活動として、本節では①遍路道沿いの「へんろ資料展示室」開設をめぐる活動を、また 3 節では遍路道沿いの「山頭火句碑」の建立活動、さらに 4 節では沿道住民によるお接待活動、についてその概容を報告しよう¹⁰。

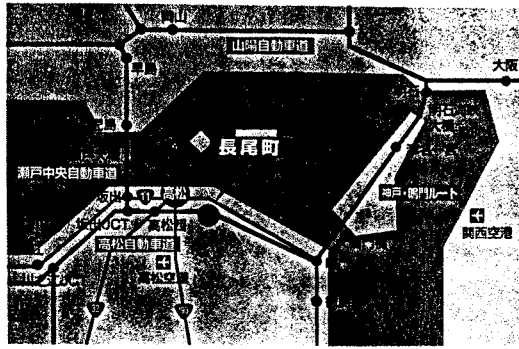
①結願の道と沿道住民

前述のように、本町には、87 番長尾寺、88 番大窪寺の二つの札所が位置している。言うまでもなく、これらの札所は、四国八十八ヵ所霊場の目指すべき結願の最終札所とそのひとつ手前の札所である。本町内における遍路道は、北部に隣接の志度町の 86 番志度寺から 87 番長尾寺に向かってまっすぐに南に伸び、そこより文字通り最後の二つの札所を結ぶ結願の道となって 88 番大窪寺に至るのである（地図 5-4 参照）。もともと、遍路道は必ずしもここ大窪寺で終わるのではない。これより先は、さらにこれまでとは質的に異なる「お礼参り」の遍路道が続いている。県道 2 号線沿いの 10 番切幡寺経由の道や、八十八ヵ所「総奥の院」とも言われる奥田寺経由の 3 番金泉寺への「大坂越」コース、同じく奥田寺経由で 1 番札所直結の「卯辰越」コースなどが枝分かれしつつ遙か遠方へと伸びている。

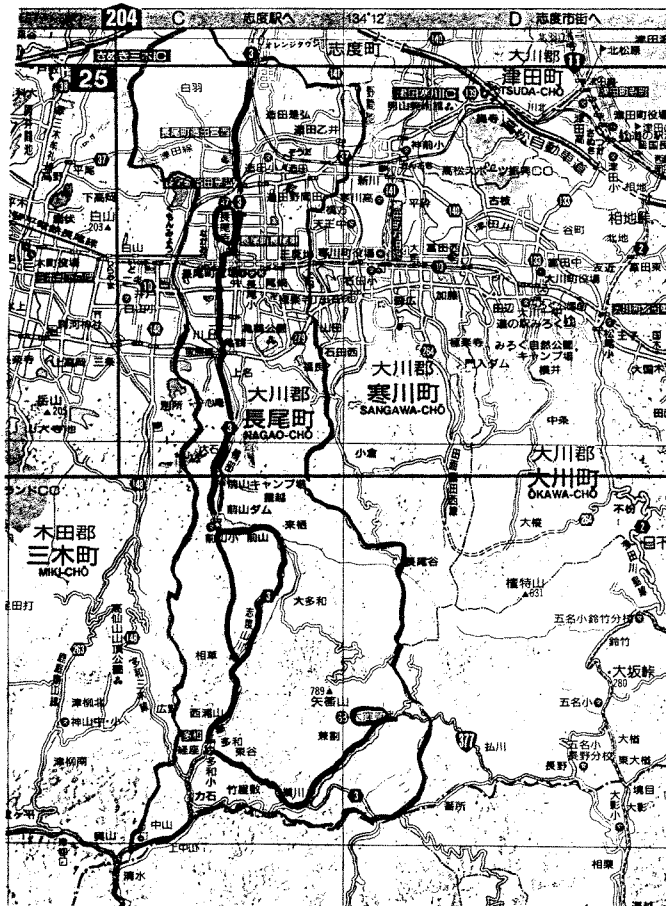
したがって、全長 1300~1400 kmともいわれる遍路道のかなでも、本町を貫通する遍路道は、遍路旅のなかでも象徴的にみて質的な変換をもたらす特異な性格を持った道である。そして、このような濃密な意味に彩られた結願の道にたいして、沿道住民の人々や他地域の遍路自身は、歴史的にも独特の対応を示してきたのである。

たとえば、この結願の道沿いにある塚原の「常接待」碑や奥山村の「御接待一万五千人所」供養塔などは、そのことを如実に物語る一例である。前者は、長尾町塚原の一心庵にあり、小豆島の接待講の人々により寛政四年に建立されたものである。後者は、長尾町奥山村にあり、文化十三年（1816）に建立された供養塔で紀伊国の教翁義染房に

¹⁰ 長尾町における調査においては、とりわけ、民俗学者の藤井洋一氏、へんろ資料展示室長の木村照一氏、俳人の砂井斗志男氏の 3 氏には、筆舌に尽くせないほどお世話になった。また、町教育委員会松木正美前課長他多数の町役場関係者にもご助力を頂いた。



地図 5-5 長尾町の位置



地図 5-4 長尾町内の道路

よるものである¹¹。さらに、地元の人々は、いわゆる「接待田」を確保して、そこから収穫される米などを遍路に接待していたのである。他方、「接待草」といわれるものは、草刈代をお接待にまわしたものである¹²。隣町寒川町新川にある永代接待田近くにある新川庵の嘉永二年の「永代接待地」の石碑（123cm）には、新川講中の人々により「上田二畝三步」他6枚の田んぼについての記述が見て取れる。

以上のほかにも、長尾寺から大窪寺に至る遍路道沿いには、多数の接待所や休息所・水飲み場を兼ねた聖跡がみえる。山頭火句碑で著名な宗林寺近くの天台・熊野・英彦山系の各修験道系譜の祠や神社・聖跡は言うまでもなく、多和地区竹屋敷近くの「光明真言百万遍供養塔」をはじめ、この結願の道沿いには多数の供養塔・記念碑・道標・遍路石が散見される。いずれも、結願の道故にこそその歴史的聖跡である。結願の道の遍路道には、沿道地域社会の住民はもとより実に多数の修験者・遍路者など歩きめぐる者たちも殊のほか思いを入れて、その宗教的な歴史を育んできたことがわかるのである。

このような特異な遍路道環境において、時代を現代に移してみるなら、沿道住民の人々や巡礼者たちは、現代遍路文化においてどのような関わりをしているのであろうか。こうした聖跡や習俗はもはや単なる過去の遺物になっているのであろうか。

以下では、長尾町に概観した上で、現代における動向について掌握してみたい。

②長尾町のあらまし

1) 歴史・文化

本町の歴史は古く、町内では緑ヶ丘古墳や丸井古墳をはじめ、大小あわせて40以上の古墳が発掘されている。また、国の重要文化財指定を受けた江戸中期の細川家住宅の農家や、行基菩薩が作ったといわれる「からふる」や国重要文化財指定の願興寺聖観音坐像など歴史的文化遺産も多く、古より、政治・文化の栄えた地域である。

地方行政制度の点からは、戦後の昭和30年に長尾町と多和村が合併して新長尾町がスタートしたが、翌31年には造田村が、34年には旧井戸村の一部がこれに合併し、現長尾町域を形成した。その後、町では着々と住宅・学校・浄水場などの都市基盤を整備し、多様な行政サービスを施行して現在に至っている。

本調査に関連した主な町内事項を列挙するなら、昭和50年の前山ダムの完成、51年の造田公民館完成、54年の長尾町歴史民俗資料館会館、58年の自然散策道「四国のみち」開通、平成3年の行基苑からふるの改修工事、同6年長尾町CATVネットワーク開局、同8年「大窪寺の鐘とお遍路さんの鈴」日本の音風景100選、同9年「ながお文化サロン」オープン、そして11年のへんろ資料展示室開設等々があげられる。

¹¹ 藤井洋一、1996年、「大窪寺へ至る四国結願への道」、『人づくり風土記37 香川』農文協

¹² 接待田他の長尾町における遍路習俗一般については、藤井洋一氏のご教示によるところが大きい。

また、本町の主な年中行事としては、1月の長尾寺の三味線餅つき、4月宇佐神社の桜まつり、5月造田神社の釜鳴り神事、6月ショウブまつり、8月長尾寺の長尾観音夏なつり、大窪寺の柴灯大護摩供養、10月塚原稲荷神社のあばれみこし、10月かぐや姫カーニバル長尾等々がある。二つの札所が、年中行事に深く関わっていることが理解できるであろう。

2) 人口

平成12年7月現在において、町民人口は、13,606名である。世帯数は、4,346を数えている。人口動態の点からは、新町政施行当時と比べて、世帯数では一貫して増加傾向にある。昭和35年では2887、昭和55年では3409、平成7年では3922となっている。しかし人口では、総じて大きな増減はなく、昭和35年に13605、50年に12809、平成7年に13078で、ここ数年は漸増傾向にある。したがって、人口がほぼ一定で、世帯数が増加していることは、1世帯あたりの人員が減少していることを示し、このことは全国的な傾向に合致している。また、人口密度の点でも、本町はほぼ一定の水準を維持していることになる(270~297)。

要するに、人口規模においては、当町は、戦後大きな変動をこうむることなく今日にいたっているのである。デモグラフィックなベースにおいては、比較的安定した社会システムを長尾町は維持してきている。

3) 地勢その他

本町は、香川県の東部に位置し(地図5-5「参照」、南北に長い町域を形成しているが、北部が平野地帯、南部が山林地域となっている。主として南部地帯の山林が町総面積の約半分(49.6%)を占め、田畑が約2割(21.6%)、宅地が5.8%、その他となっている¹³。地勢的に見て、本調査の観点から重要であるのは、瀬戸内海に面する隣接の志度町にある86番志度寺からの遍路道は、平野部をほぼ直線的に南北に伸び87番長尾寺にいたるが、87番を経由してまもなく88番大窪寺への遍路道が巨視的に見て南北に直線的であることにかわりはないが、次第に急な山道となり、標高300~400mあたりの山々を上り下りする地勢であろう。結願の道は、はじめ緩やかであるが、次第に登り詰める構造となっている。さらには、お礼参りの遍路道が山中を下り降りることになるが、それはすぐにも阿波徳島の遍路道にゆずることになるのである。

③へんろ資料展示室開設をめぐる活動

まことに驚くべきことであるが、四国にも全国にも、四国遍路習俗に関する専門的な博物館・資料館・展示センター等これに類する公的施設は、これまでどこにも存在してこなかった。遍路習俗が1200年の長い歴史を持ち、現代にまで継承され、人口に膾炙している独特な民俗宗教現象であるにもかかわらず、である。研究者・郷土史家・札所寺

¹³ 長尾町企画開発課編『星霜の時を旅して 1998 長尾町町勢要覧』1998年、42ページ

院など個別レベルでの資料収集活動は少なくないが、公的な資料センターは、これまでひとつとして開設されることはなかった。

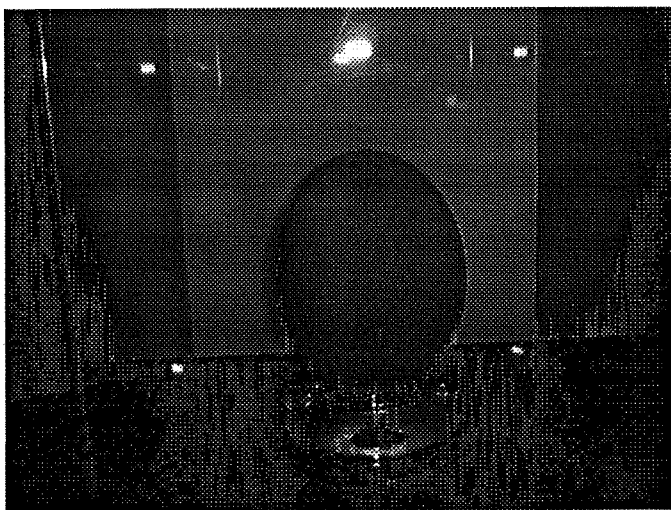
こうした現状において、結願の道が貫通する長尾町では、昭和51年に開館した造田公民館の前館長の木村照一氏（長尾町文化財保護指導員、へんろ資料展示室室長）が中心となり、長年にわたってコツコツと遍路関連資料が収集されていた。この作業には、同町在住の民俗学者藤井洋一氏をはじめ、同じく俳人の砂井斗志男氏など同町文化人（前述の「ながお文化サロン」の主要メンバー）による結束の固い支援協力活動や町教育委員会による行政的支援活動が少なからず貢献をしたものと推測される。限られた教育委員会関連予算の中で、なかなか古書籍・古物市場に出回ることの少ない貴重な遍路関連資料をあちこち飛び回っては入手する地道な活動は、木村前館長の熱心なたゆまぬ努力があったればこそ可能であったに違いない。資料室開設がまだ本決まりしないころに、特別に資料を拝見させていただく機会があったが、造田公民館の資料保管室には、長年にわたって収集された納め札・遍路地図・納経帖・関連古文書・研究図書などの諸資料はもとより、札バサミ等をはじめとする各種の遍路用品などが所狭しとばかりに収められていた。散逸し埋もれがちなこれら遍路関連資料をこれほど多数収集するには、どれほど時間やエネルギーを割いてたゆむことなき収集努力を継続しなければならぬか、考えただけでも気の遠くなる所業である。

こうして、財政上の裏づけをはじめとする各種の条件を乗り越えるという長き試練を経て、難産の末、現町長決断の下、1999年11月7日に、結願の道の途上、前山ダムを真下に見下ろす敷地に、日本最初の公立の遍路資料センター「へんろ資料展示室」が開設されたのである。この資料展示室は、「前山地区活性化センター」の完成とともに、同施設の一環として敷設されたものである。地区活性化センターは、中山間地域の振興を図ることを目的に建設された多目的施設で、その落成式にあわせて、へんろ資料展示室も仮オープンされた。本センター建物外部の庭には、移設された遍路道しるべや愛知県遍路から寄贈された石のテーブルと椅子などが置かれている。

また、センター内には、へんろ資料展示室のほかに、地区農産物の展示販売コーナーや会議室・オープンスペース（ホール・談話フロー）・トイレ・管理室などが併設されている。展示室前のオープンスペースは、壁沿いに遍路関連写真や絵画などが掛けられていて、実際に遍路が訪れてこれらを眺めながら休憩ができるように椅子・机・飲料機器が設置されている。窓からは、前山ダムが見下ろせるように展望もよく、現代遍路にとって格好なお接待所としても機能しているのが特長であろう。

展示室の入り口や展示室内の可動ユニット壁面などは、いずれもよくデザインされており、閉鎖的な印象のまったくないオープンな展示室となっている。その展示室に展示されている資料の大部分は、地元長尾町内から収集されたものである。代表的な展示資

料について順に挙げれば¹⁴、①納札：約 2000 枚あり、天明 2 年(1782)から昭和 2 年(1927)までの 16 代年号分がある。これらは町内一心庵近くの農家から出たものである。②納経帖；10 冊ほどある。納経帖の変遷をたどることができる。③弘法大師絵図；約 200 年前の絵図と昭和初期のもの。④四国遍路地図；江戸時代の復刻版遍路絵図や大正 16 年のカラー版中国四国大絵図（鳥瞰図）がある。⑤「飛び石はね石」；遍路世界では有名な「飛び石はね石」で、高知県室戸近くの浜にあったゴロゴロ石だが、恐竜の卵のような形をした珍しい石である。⑥遍路用品；240 回巡拝の現代遍路の白衣・菅笠など遍路用品。その他、札バサミや木製納札など珍しい遍路用品も少なくない。⑦遍路関連資料；長尾寺・大窪寺関連の絵図（「金草鞋」や「遍路道指南」からのもの）。多数の遍路日記。遍路研究書他。⑧行基菩薩像；町の歴史の項において既述の行基菩薩は、本町の場合、特異の位置を占めている。行基菩薩の足跡の色濃い歴史的背景を意識した展示物である。⑨特別展示；長尾町の民話・昔話関連資料。⑩その他；珍しいものとしては、納札を保管していた米俵の現物が展示されている。本町内に 8 基在る茂兵衛建立の道標の拓本なども、本町ならではの展示であろう。



高知県室戸近くの遍路泣かせの「飛び石跳ね石ゴロゴロ石」

また、平成 12 年 7 月には、280 回遍路と遍路道標建立で名高い明治期の大遍路「中務茂兵衛」の展示コーナーが設けられた。中務家より、諸日記や写真数点等を借用して構

¹⁴ 長尾町へんろ資料展示室「へんろ資料展示室の仮オープン」1999 年 11 月

成されたもので、「諸日記」の費用明細書や木版納経印などきわめて珍しい資料が展示され、このようなまだかかってない催しも資料展示室のスペースがあればこそその快挙といえる。

総じて、200点はくだらないという収集資料のうち、展示されているのはその半分ほどである。100点ほどの遍路関連資料をこうして一堂にまとめてみることのできる本資料展示室は、遍路習俗に関心のある一般市民や研究者にはもちろんのこと、現代遍路自身にとっても得がたい巡礼場所になるのではないだろうか。自らの遍路行を実践して行く際のひとつの貴重な手がかりとして、立ち寄ってみる価値のある遍路スポットであろう。

結願の登り坂の中腹に在るこの特異な現代遍路空間は、遍路にとっては、なによりもまず喉の渇きを癒し、風雨をしのぎ、休息できる接待所としてあるだろう。しかし、本展示スペースは、もちろんそれ以上のものである。順打ちの場合は、結願を目前にして、自らのこれまでの長き遍路行を振り返えるのに格好の場所なのだ。歴史的に深みのある遍路習俗世界を理解することを通して、より大きな文脈のなかに限られた自己の遍路経験を位置付けてみる契機となる空間でもある。逆打ちの場合は、これからはじめる遍路行をガイドし、遍路経験をより豊かにする目を養う場所となるだろう。さらには、遍路にとっては、遍路途上の遍路仲間が複数ここに集う中から、遍路同士の新たなコミュニケーション世界が開かれる空間にもなることがあるに違いない。

実際、開設以来、当展示室を訪問する遍路が跡を絶たないという。平成11年11月より、平成12年5月までの半年間に、入場者は5000人を突破し、これを記念して、庵治石として全国的にも著名な「石の町」香川県庵治町の石材業者からは、山頭火の言葉「人生即遍路」の石碑が寄贈されてもいる。入場者には、一般市民も多いが、遍路自身も少なくない。最近では、歩き遍路ばかりでなくバス遍路団体までが立ち寄るといふ。

以上のようなへんろ資料展示室の運営や今後の課題については、なお、問題がないわけではないようである。博物館や資料館一般がそうであるが、なによりもまず展示資料のさらなる充実化が望まれる。そのためには、本資料展示室の場合は、さらなる予算上の裏づけが必要となろう。資料が充実するにつけ、展示スペースそのものも、もっと広い堅牢な建造物が要請される。そのためには、へんろ資料展示室が活性化センターの一敷施設としてではなく、独立した「博物館」ないし「資料館」に発展して行くことも将来的には課題となるだろう。そうなれば、独立した予算で数名の学芸員なども確保しなくてはならなくなる。本資料展示室には、さらに欲を言うなら、これからの現代遍路文化の生成を適切にガイドして行く四国全土の情報センターとしての機能にも期待したい。この種の施設が皆無であっただけに、昨今の遍路文化の動向を見るにつけ、より充実した資料館への発展を期待せずにはいられないのである。

(3) 山頭火句碑建立の活動；「結願の道」における沿道住民の対応②

① 山頭火と結願の道

明治15年山口県防府生まれの放浪の自由律俳人、種田山頭火が、亡き母の位牌とともに戦前に2回ほど四国遍路に旅出したことは夙に名高い。第1回目は昭和3年、第2回目は昭和14年である。このうち昭和3年山頭火47歳のときの遍路日記は本人により焼却処分になってしまったが、尾崎放哉の墓参りの後、大窪寺を参拝している。また、昭和14年10月、松山から出立した行乞の旅は、山頭火最後の大旅行であった。無帽であわせ一枚に、へこ帯というまったくの乞食遍路姿で命を捨てる覚悟の旅であったといわれる¹⁵。土佐に入ってから貫いも少なく底を尽き、友人への遍路旅路銀無心の行き違いから、ついに遍路を中止して土佐から仁淀溪谷を逆って愛媛の久万から松山に辿り着く。以後、道後温泉近くの一草庵に居を構えつつ翌15年10月11日、いわゆる「コロリ往生」を遂げたのである。

その山頭火が、結願の町長尾町を放浪したときに詠んだ句が3句ほどある。

ここが打ち留めの水があふれてゐる

泊めてくれない折からの月が行手に

あかあか燃える火が ふと泊まる

以上の3句は、山頭火が自らの俳句を701句自選して編集した句集『草木塔』に選定された句でもある。3句に見られる「水、月、火」は、山頭火の原点だともいわれるが、とくに「打ち留めの水」の句は、明らかに、88番結願の寺大窪寺の御手洗に溢れる水そのものをさしているものだ。2句目の「泊めてくれない」からは、山行での厳しい状況が伝わってくるが、あたりを放浪したと思われる「幻の山頭火の道」がほぼ特定されている。第2回目14年の10月26日にも大窪寺を参拝しているようであるが、地元山頭火研究者（山頭火顕彰会会員）で俳人（俳句結社満緑所属、俳人協会会員）の砂井斗志男氏によれば、前日の25日は野宿したのではないかと考えられる。同氏は、「しぐれて山をまた山をしらない山」「からだなげだしてしぐるる山」「しぐれて道しるべその字が読めない」等々の句が、そのときのものではないかと想定している。

②山頭火句碑建立の活動

さて、前述の砂井氏が、以上のような事実にはたと気づいて、その重要性を長尾町長に進言したのは、平成4年のことであったという。かくして、砂井氏をはじめ長尾町山頭火顕彰会（会長は民俗学者の藤井洋一氏）を中心とするメンバーの努力により、同年9月に大窪寺の本堂前に、長尾町文化協会による山頭火句碑第1基目記念碑となる「打ち留めの水」の句碑が建立された。遍路道沿いの山頭火句碑は、遍路道を行く遍路にとつ

¹⁵ 大山澄太編『山頭火歌集Ⅲ』、潮文社、1971年、212ページ

でも、心を和ませ遍路経験を深め広げる一つの素材となるであろう。地域の人には、郷土を理解する一助となるだろう。また、他地域の人には、山頭火に会える町として長尾町を知ってもらひ一つの契機にもなるだろう。

こうして建立された句碑はそれほど大きなものではないが、庵治町の庵治石を使用した曲線を帯びた自然形の石材に、山頭火直筆の字を一つ一つ拾って句が掘り込まれたものである。建立にあたっては大窪寺住職の快諾があったという。もとより結願の寺のため、境内にはすでに所狭しとばかりに多種多様な碑が建立されており、句碑建立のスペースは異例の扱いで本堂前の程よい一面に確保されたのである。こうして第 1 基目は、札所境内に建立されたのであるが、山頭火句碑は第 2 基以降も結願の道沿いの要所要所に建立されつづけ、平成 8 年には 34 基の句碑を数えるに至り、その後もとどまるどころを知らぬ勢いで今日に至っている（イラスト地図参照）。

頭火で町おこしのような思わぬ副産物も生じている。また、一連の句碑石材にはすでに述べた同県の本田郡庵治町の庵治石が使用され、特に庵治の T 石材業者は句碑をめぐってよき理解者となり協力を惜みせず、当町や 73 番出釈迦寺等にも少なからぬ寄進もしている。また、庵治町にある同店の営業所横には、多様な形態の庵治石を使った山頭火句碑が多数建立されており、みるからに圧巻である。

ちなみに、平成 10 年 10 月 10 日には「3 テンイベント」（10 テンが 3 ヶ並ぶ日でサントウカをかけている）なる行事が同町マルチメディア実行委員会・山頭火顕彰会・ながお文化サロンの共同企画により開催された。むろん、前述のように 10 月 11 日が山頭火の命日であるが、10 日には山頭火の句碑めぐり、11 日には多和地区にある遍路宿の竹屋敷にて句碑の鑑賞や供養野点が催された。同時に蕎麦接待などもおこなわれたという。

なお、上記のような沿道住民自身による山頭火句碑建立の活動に関連して、長尾町外の地域外からの句碑建立接待活動が生じた経緯についても触れておく必要がある。以下、その動きについて略述してみる。

③地域外接待（逆接待）としての「人生即遍路」の句碑建立活動

平成 8 年 9 月 NHK 放映の『昼時日本列島「秋の遍路道」』で長尾寺が紹介された折、寺近くにある遍路無料休憩所「つぼみ荘」に建てられている前述の山頭火句碑のひとつである「人生即遍路」も紹介された。「人生即遍路」は山頭火が柳行李や弁当箱に書き記した句である。これが発端となって、翌平成 9 年に高知県高岡郡中土佐町久礼の「そえみみず遍路道」に「人生即遍路」の句碑を建立したのを皮切りに、続いて第 2 基目を高知県 33 番雪溪寺、3 基目を徳島県 14 番常楽寺、4 基目を香川県本町長尾寺の御手洗横、5 基目を愛媛県松山の網掛大師堂、6 基目を長尾町内の宗林寺、7 基目も町内遍路宿竹屋敷、8 基目を香川県庵治町の丸山峠遊歩道、9 基目を香川県 73 番出釈迦寺、10 基目を高知県 24 番最御崎寺へ・・・という具合に 2 年間に 10 基以上も建立するという愛知県のお

遍路が出現した¹⁶。遍路石はすべて庵治石を使用し、高さ 1.7m、30cm 四角のものである。その後、徳島 6 番安楽寺など精力的に句碑建立活動を続行しているのである。長尾町における山頭火句碑建立活動の思わぬ波及効果といえよう。

この奇特なお遍路は、愛知県の霊場めぐりのグループ「愛知同行二人会」の代表を務める人物で、平成 12 年 4 月現在 75 歳の T.C.氏である。40 歳のときから戦友供養のために車遍路で巡拝し、すでに八十数回遍路を数え、百度参りを目指すお遍路である。遍路途上でお世話になった四国 4 県の地元社会へのお返しや個人的に思い出のある遍路道沿いの個所に建立しているという¹⁷。

砂井氏の話によれば、K.氏と長尾町との接点は、同氏が十数年前に 85 番八栗寺を巡拝していた時に、車が故障したとき長尾町の I モータースの社長に車接待をしていただき、その後も車接待を受けてきたことが機縁という。こうしたこともあいまって、K.氏は、とりわけ、長尾町の一連の遍路関連活動にも理解深く、機会あるごとに逆接待をされている。既述したへんろ資料展示室オープン時には、特別に庵治石の大きなテーブルと椅子を寄贈しており、また、平成 10 年には同町遍路文化研究会へ『弘法大師空海と四国八十八カ所霊場展』（中日新聞社編集・発行）図書多数ほか遍路みち整備費用の寄贈など諸種のお接待を実践している。さらに、同年 10 月 11 日の山頭火命日に、愛知慈光会の同行者たちと協力しつつ、遍路宿竹屋敷他に従来の碑とは異なる大きな山頭火句碑を建立した。

以上のように、K.氏による山頭火句碑建立活動は、沿道地元住民ではない遍路自身の個人的立場からの逆接待によるものである。この返礼としての接待が、本町沿道地元住民による山頭火句碑建立活動に呼応しながら、これと一体渾然となって、結願の道の豊かさを演出することに貢献することとなったのである。

④ その他の山頭火句碑建立活動

本町における上述のような句碑建立活動に関連して若干の補足をしておく必要がある。上述のように、砂井氏を中心とする山頭火顕彰会の活動や長尾町の施策に連動して、またその協力を得て、各個人や個別寺院・個別組織レベルで山頭火句碑が積極的に建立されている事実がある。

たとえば、俳諧の寺・真宗宗林寺はその代表的な寺院である。「ほうたるほうたるなんでもないよ」や「感謝 感謝！感謝は誠であり信である」をはじめ、10 余の山頭火句碑が建立されている。住職の俳諧への理解が並大抵ではないのであろう、同寺には、山頭火以外にも尾崎放哉、河東碧梧桐、菊池寛、良寛、萩原井泉水、夏目漱石他多数の句碑が林立している。山頭火句碑建立活動当初からの良き協力者のひとりである¹⁸。

¹⁶ 砂井斗志男「人生即遍路」の句碑」

¹⁷ 朝日新聞、1998 年、4 月 23 日

¹⁸ 俳諧の寺・長尾・宗林寺編『俳諧の寺・宗林寺彩る』

同様に、多和地区にある遍路宿竹屋敷もまた句碑建立の良き理解者で協力的かつ熱心な関係者の一人である。「水音しんじつおちつきました」「分け入れば水音」「分け入っても分け入っても青い山」など、同様に多数の句碑が宿前庭の日本庭園に建立されている。

日本の「水の文化」を彷彿とさせる山頭火の一連の句碑に、心を癒す宿泊遍路も多いことだろう。

その他、長尾町から抜け出て、他町の諸個人が建立者となり、それぞれの沿道の諸堂や諸施設に山頭火句碑が添えられて、遍路道を彩っている場合もある。高松市のW学園園長がW学園玄関に、志度町のM夫妻が小坂地藏堂横に、といった具合である。建立活動は、長尾町域をすでに凌駕しているのである。

また、長尾姓を持つ県内有志のグループ「ひょうたん桜を長尾町に贈る会」(60人規模)についても付言しておこう。同会が、山頭火の歩いた遍路みちを桜で飾る目的で平成8年に15ヵ所に植樹した100本のひょうたん桜の苗木が成長し、同12年4月に竹屋敷に記念建立した山頭火句碑の除幕式が開催された。「さくらさくら さくらさくら ちるさくら」と刻まれた句碑で、山頭火の句碑が桜の樹木と連携して結願の道を飾っているのである。

さて、こうした長尾町の句碑建立活動と似たように事例に、規模は小規模だが、たとえば、香川県内では讃岐国分寺周辺の遍路ころがしに、地元沿道住民が川柳句碑を建立し、同様に遍路道沿いに桜を植樹した事例もある。この場合には、住民自ら詠んだ川柳を句碑として道沿いに建立している点で、山頭火の長尾町とは異なるが、遍路道への類似した関わり方のもうひとつの事例であろう。かくして、道しるべそのものとは異なるこの種の遍路道沿いの句碑建立活動については、あらためてその意義を検討する必要があるだろう。

以上のように、山頭火句碑建立による遍路道文化の現代的様相は、句碑が単なる文学碑のレベルを超えて遍路文化と融合する地平を生き生きと照射しているといえよう。またそれは、280回遍路大先達の中務茂兵衛の添句道しるべやその他の添句道しるべの系譜文化にもつらなる新たなひとつの現代的局面としても意義を持つだろう。さらには、こうした句碑建立は、道の社会学の観点からは、現代ストリート・ファニチャーとしての遍路ファニチャーとしての位相を持つものでもある。単なる機能的なファニチャーからより意味論的なファニチャーとして、道の文化を豊かに生成する重要な構成要素の一つとして把握する必要のあるのもある。

結願の道に埋もれていた山頭火の置き土産を、沿道地域社会の人々が中心となって現代遍路道沿いに見事に句碑として花咲かせた長尾町の事例は、今後、他地域においても遍路文化再生に向けて格好なモデルのひとつとなるだろう。

(4) 長尾町沿道住民によるお接待；「結願の道」における沿道住民の対応③

本節では、長尾町における札所境内などで現在行われているいわゆるお接待習俗について概観してみる。本調査では、本町におけるすべての接待事例を網羅することはできなかったが、いくつかの主要な接待について現地の関係者の協力を経て、当事者達への聞き取り調査を実施することができた。以下、要点のみを素描する¹⁹。

① 古屋敷地区のお接待

- 1) ヒアリング月日；1999年7月15日
- 2) ヒアリング場所；古屋敷地区の対象者のお宅
- 3) ヒアリング対象者；当地区で食品雑貨商店を営んでいるM. T. 氏の夫人である。
- 4) 地区の特性と接待内容

M. さん（もともとM姓だが、明治27年を最後にK姓を名乗る）は、戦後の昭和26年に嫁入りした他地区の出身という。古屋敷地区は、徒歩では88番大窪寺までは2時間程度かかるところにある。明治期には30戸程度の部落あったというが、現在は、50戸程度の地域である。かつては、家の前を遍路が通った時代もあったという。昭和12年まで、遍路宿をやっていたが、家事で焼失。

本地区（昔は部落といった）は、藤原一族の落人子孫で、古屋敷の地名はそこに由来するという。系図もあり、奉っているが、貸したり触ったりするとたたりがあるといわれている。

近隣各地区には、神社、お大師さん（大師堂）、薬師堂、山の神が、ひとつずつあったという。遍路から頂いた納札は、お大師さんに納める家もある。

かつては、この地区に大師講があったというが、現在は、解散したという。戦後の嫁入当時は、春、桜が咲く頃に、姑ほか家の者3人で、おむすびを作って大窪寺まで接待しに行ったという。戦間期は、お接待も途絶えたが、戦後復活したそうである。

1999年の春は、4月10日 地区の者6名（男1名 女5名）にて、車2台で大窪寺に行き、納経所の前で接待した。接待した品は、五穀豊穰を願って「草餅」400個程度。農業者には草餅が良い。草餅は、大まか一人100個程度を当日持ち寄ったが、各自餅つき機で自ら製造。中には、1000円程度の負担金（材料費として、粉、餡、ヨモギなど）を出しただけの人もある。草餅はまた、手作りだから価値がある。菓子では、手をかけることにならないので駄目とのこと。

接待は、午前10時頃から2時間ほどで終了。結願した遍路を対象に接待した。納札をいただくが、これを持っていない遍路が少なからず居た。返礼として頂いた納札は、

¹⁹ 本節におけるヒアリングは、時間の都合上、必ずしも十分な聞き取りができたものではない。ここでは概略を提示するにとどまらざるを得ない。さらなる詳細なリサーチは今後の課題である。

家の門口にお守りとして貼って飾る。飾り方は、門口に札を家に向かって内側に貼る家と外に向かって貼る家とある。これらの納札は何年も貯め置く風習がある。

なお、このあたりの家の檀那寺は大滝寺であるが、昭和 50 頃に大滝寺が火災に見舞われ、11 年近く無住となった。かつて、300 軒あった檀家は今では 50 件ほどに減少してしまったという。

② 多和地区婦人会による接待

- 1) ヒアリング月日 ; 1999 年 3 月 8 日
- 2) ヒアリング場所 ; 遍路宿竹屋敷
- 3) ヒアリング対象者 ; 婦人会メンバー 3 名 (M.S.さん、M.K.さん、T.Y.さん)
- 4) 婦人会の特性と接待内容

多和地区婦人会は、前山地区と多和地区を合わせており、12 部落からなるが、230 名ほどの会員で、加入率はほぼ全員で良い。

主な年間活動は、1 敬老 (演芸や旅行など) 2 清掃 3 料理 (食生活改善など) 4 交通安全 (国道の交通量が多く、支所近くで毎月交通安全指導を実施) 5 盆踊り・運動会・キャンペーン 6 婦人学級 (手話教室など) 7 趣味活動 (ミニバレー・ソフトバレーなど) 8 かぐや姫イベント・ショウブ祭りなど (梅干や栗ご飯などの手作り品の販売など)

財政的には、町からの補助と会費年間 500 円、郵便補助事務手数料などから構成される。

お接待は、大窪寺境内の大師堂で毎年春と秋に行う。この地区では、支所下のバス停あたりで昭和 30 年くらいまでは、個人接待を一年中行っていた、という。婦人会による接待は、10 年くらい前から。きっかけは、車遍路が多くなり、交通安全祈願をこめて開始した。接待には、代参の意味があり、お陰を頂く、という意識がある。したがって、お礼を頂くことが一方で大事。

春秋の彼岸は、お中日だと間に合わず、普通の日がベター。費用は、分に応じた自発的な持ち寄りで、物品、おはぎ、蒸し団子、ヨモギ団子などが多い。会長の寄付で、抹茶の野点接待もある。暑いときには、ジュースやアイスクリームの接待も。お金の接待はない。毎回、時間的には朝から午後まで、かなり長いが、入れ替わり立ち代りで延べにすれば大勢で接待している。接待に出やすい人は自由業の人。

接待で頂いた納札は、仏間においておくことが多い。8 月 21 日と 3 月 21 日に寺にて護摩焚きしてもらい。「千枚通し」のお札を水に浮かせて飲むこともある。光明真言が書かれてあり、お腹が痛いとき、問題を抱えているときなどに飲む。子供が死んだときには、千枚通しを夕暮れ時に河流しする。

婦人会による遍路に出るのは毎年、4~5 回。区切り打ちで、1 番から順拝する。西国巡礼も 7 年で 1 回程度。20~30 人で巡拝バスをチャーター。会長が先達をする。50 歳以上の人が多い。大体、親の世代がかつて娘遍路を経験している人が多い。結婚後も姑が

連れて遍路に出ることもある。その結果、一般的に婦人会の会員同士の結束は強い。

接待される遍路に接待ずれした人はいない。逆に心づけをおいて行く遍路もいる。接待をして感じる現代遍路は、観光半分・信仰半分の印象。年配者よりも若者に昔の遍路に近い印象を持つ。いまでも、時折、小さな祠にもお参りするような「お修行さん」がいる。托鉢する遍路は皆無に近い。

③ 個人接待（もち花と善根宿）

- 1) ヒアリング月日；1999年3月19日
- 2) ヒアリング場所；竹屋敷地区のT家
- 3) ヒアリング対象；T.T.さん（T家の主婦）
- 4) 接待の内容

昔は、この近辺では、土地権利を持っている半数以上の家は、善根宿を提供していた。1代前までは、遍路の泊まる善根宿がきまっていた。山伏系はどこそこの家、六十六部はどここの家、修行遍路はあそこの家、という具合。野宿する遍路は橋の下や茶堂でしたという。本百姓と分家百姓でも、善根宿する遍路のタイプが分に応じて異なっていた。昭和初期には遍路を泊めると役所に届け出た。T家は、大窪寺まであと2kmほどにある。現在では、縁側に寄せて、頑張ってとお茶を振舞うことも多いという。道を尋ねる遍路が多い。満願直前の遍路ばかりだが、昔は行倒れ遍路も多く、そうした遍路の半数以上は、戒名も彫られない小さな遍路墓であるようだ。

春には、今も「もち花」を自宅前で接待する。もち花（炒り米でおかきのようなもの）は保存食で、賽の目に切り、焙烙釜で炒ったものに白黒の大豆を混ぜる。接待用の炒り米は良質で、昔の子供はこの接待を受けた遍路から炒り米をもらう。「くれんならこの道ご法度や」といって、遍路からせびることもあった。そら豆を炒ることもあったが、自分が遍路になったときは、そら豆は食べない。なぜなら、足に豆ができる、という言い伝えがあるからである。

接待をした遍路からいただいた納札は、仏壇に供えたり、家天井に吊ったりする。盗難除けになるという。

3年前の1996年に善根宿を施した。夫婦で広島からきた車遍路の人だった。定年になった遍路で奥さんは病气勝ち。納屋の隅のほうに泊まってもらった。梨の蜂蜜やりんごの蜂蜜を接待した。帰るとき、いくらかのお金を置いていったそうである。

30～40年前には、おば一さん二人の遍路が雨宿りから3～4日泊まっていた記憶がある。

阿波徳島の「あくし」の山の集落（脇町の東）からくる人々が、大窪寺の大師堂で蒸し団子を接待している。現在も行っているという。

④ その他の多様な接待事例

- ・多和支所前のバス停で時間待ちする遍路が支所に立ち寄り、茶菓子の接待を支所でも行っている。バスと電車の歩き遍路が中心。
- ・春秋彼岸には、近在の中山部落・真木川部落・兼割の部落では、大窪寺境内にて歩き遍路に接待をする。
- ・大窪寺境内では、H.氏が、88歳の遍路の方には、無料写真接待をしている。
- ・長尾寺境内では、交通安全協会母の会が8名ほどで、3月21、22日に、おはぎとパンの接待をしている。21日は長尾地区の人々がおはぎを230個、22日は昭和地区の人々が望み園で焼いたパンを150個。資金は、チャリティーバザー収益金を当てている。
- ・大窪寺門前の土産物・食堂店の野田屋では、一年中、飲み物をはじめとして多種多様な接待を行っている。

【主な参考文献資料】

四国の道を守る会編『四国道を守る会』No.1、No.2

香川県国分寺町総務課編『豊かさの伝承 1996年国分寺町勢要覧』

〃 〃 『豊かさの伝承』（資料編）1996年

国分寺町役場『広報こくぶんじ』平成12年8月250号

讃岐国分寺跡資料館編『讃岐国分寺』

香川県環境保健部環境自然保護課『四国のみち 五色台のへんろみちコース』

国分寺町商工会青年部編『いきいきタウン 国分寺』

藤井洋一「大窪寺へ至る四国結願への道」（『人づくり風土記37香川』）農文協1996

長尾町企画開発課編『星霜の時を旅して 1998 長尾町町勢要覧』1998年

長尾町情報課編『広報ながお』1998年8月No.576～2000年7月No.595

長尾町へんろ資料展示室「へんろ資料展示室の仮オープン」1999年11月

前山地区活性化センター「おへんろ交流サロン」パンフレット2000年8月

平凡社『太陽8月号No.478 特集 遍路の旅』2000年8月

種田山頭火『草木塔』、潮文社、1971年

大山澄太編『山頭火著作集産Ⅲ』、潮文社、1996年

長尾町観光協会『山頭火にあえる遍路みち』

山頭火顕彰会編『山頭火句碑集』 長尾町・〃観光協会・〃教育委員会発行

6. 現代遍路道をめぐる遍路習俗の現況と今後の研究課題（総括）

坂田正顕

(1) 本調査結果から得られたいくつかの発見と主な知見

本調査は、四国 4 県をそれぞれ地域分担しつつ、第 2 部で述べたような一定の調査枠組みの下で、各エリアの特殊な現況に適宜対応しながら、リサーチを遂行した。お接待を中心とする歴史的な遍路習俗についての研究報告は決して少なくない。しかしながら、現代遍路道を媒介とする沿道の地域住民の対応に加えて、全国各地からの遍路文化関与者による積極的な対応行動についての情報は、きわめて少ない。近年では、リアルタイムにも等しいインターネットによる断片的な情報もあるが、結局は現在もなお、ネットに流れる情報はごく限られた世界のものだ。ネットに乗らぬ多様な営みがあちこちに潜在しているだろう。このような中で、われわれは、いわば闇の中での手探り状態よろしく、一歩ずつ情報を引き寄せその感触を確かめつつ、調査を開始してゆくほかはなかった。別個所で分担者の一人が触れているように、たとえば、雪だるま抽出法のような調査方法などを用いながら、ひとつまたひとつと対象を発見してはつなげて行くことの連続であった。

こうした状況であったため、本調査においては、四国 4 県全域の比較的容易に表面化し得る事例や現在もなお継承されている代表的な伝統的対応などをときにインテンシブに、ときにはエクステンシブにフォローしたものの、これらが現代四国遍路の全般的な概況であると主張するつもりはさらさらしない。進行形の諸事実のほんの一断面にすぎないことは火を見るより明らかである。

とはいえ、部分的ではあるが、それでもなお、今回調査において、現代遍路習俗の有様についてのいくつかの重要な事実の発見と知見を引き出したことも確かである。

ひとつには、フィールドに入ってみて、あらためて確認できたことは四国では接待を中心とする集団的な対応行動が現代もなおかなりの程度活発であるという点である。これに数え切れないほどの多様な個人接待を加えれば、接待はやはり日常茶飯な現象といえそう。常識的見解に合致して、西国・坂東・秩父の観音巡礼の昨今に比べれば、四国遍路における接待習俗を中心とする地元住民の対応は、抜きん出ている、といえるだろう。

第 2 には、いうまでもなく、遍路道を契機とする遍路者や沿道地元住民等による相互作用は、四国 4 県においては現代でもなお一様ではなさそうだが、という点である。むろん一部は調査の進め方にもよるだろうが、例えば、お接待を中心とする対応行動は、他地域に比べて土佐高知においてはそれほど活発ではない、という意識を地元住民自身がそれなりに有していることが判明した。伊予の歩き遍路（宮崎氏）から刺激を受けた「そえみみず遍路道」のような好個な事例はあるが、他エリアと比べて不活性である印象はぬぐえない。

「土佐は鬼国」といわれ続けてきたわけだが、その片鱗が画一化著しい現代においてもな

お伺えるのである。

他方、今回調査においては、われわれ調査主体の側の諸般の事情から、伊予愛媛エリアについては、必ずしも十分なリサーチが遂行されなかった点は否めない。今回、扱われた事例がそれほど多くないのは、そうした特殊な事情による点も少なくない。それでも、内海町の「観念的な」接待を梃子にした地域おこしの事例やマスコミでも何度か取り上げられた千人宿の事例は、それなりに重みのある事例である。

これに対して、阿波徳島と讃岐香川では、その数や深さにおいて、かなり活発な印象を受ける。徳島では、紀州からの伝統的な出張接待が多少とも形態を変化させつつも、現代もなお連綿と継承されていることが判明した。有田接待講も野上接待講も健在である。加えて、たとえば、企業や事業体単位のような現代に特有の新しい形態による接待習俗が活発に生成していることも明らかとなった。

讃岐香川では、国分寺町沿道住民による自発的で結束の硬い遍路ころがしの維持管理活動や、長尾町地域文化人グループが強力に指導する山頭火句碑やへんろ資料展示室をめぐる新しい形態の遍路道習俗とその試みが生成している。徳島も香川も比較的狭いエリアであるが、遍路をめぐる地域内外の反応は、かなり活発な傾向が見て取れる。

第3に、これまで述べてきたこととやや重複するが、対応行動のバリエーションが豊富であることである。古典的で単純な接待ばかりでなく、その動機・インセンティブ・経緯・主体の形態・空間基盤・時間的秩序・反応の型など決して一様ではなく、多様な形態の対応行動が確認できるのである。例えば、沿道地元住民が遍路に接待をする通常規型の接待や、遍路自身が他地域からやって来て他遍路に接待をする「出張接待」は、有田接待講などのように昔から存在している。しかし、近年では、遍路がお世話になった地元社会にお返し接待をする大規模な「逆接待」がより強く印象的に見受けられる。愛知の遍路や遍路グループが、「人生即遍路」の句碑の入った杖立てやテーブル・椅子などを多方面に奉納するのは、その一例である。

同様に、愛媛県内海町での接待による町おこし（「トレッキング・ザ・空海」）は、本文でも指摘されているように、接待が「地域資源」として意味付けられていることに特徴がある。同様のことは、香川長尾町の山頭火句碑建立活動についても言える。遍路習俗は、資源的コンテクストにおいて語られ始めており、かつての暗い遍路イメージからますます離れつつある側面を持つ。その四国全域番が「世界遺産」登録運動である。遍路習俗の積極的な現代的な意味転換が起こりつつある。

接待やその他の対応空間について言うなら、通常接待そのものは、車遍路化に呼応して札所空間での境内接待に移行しつつあるが、道しるべや句碑を建立し、桜苗木を植樹し、草刈奉仕をしたり、善根宿を提供する昔ながらの遍路道沿い空間もそれなりに健在である。ましてや、インターネットにおいて良質な遍路情報を提供するいくつかの遍路関連サイトのような接待では、従来の接待空間を超越しているものも出現している。

主体の多様性では、なんといっても高知県の四国電力の一営業所単位の事例や徳島県の

生活改善グループなどの事例であきらかなように「事業体単位」の新しい形態の接待が活性化しつつある点は看過できない。経済主体の文化的関与という文脈は、ポストモダンの古くかつ新しい文脈である。さらには、老人会・婦人会・交通安全協会等々の地域集団による接待も健在である。

(2) 今後の研究課題

総じて、今回のわれわれの調査は、四国遍路道をめぐって生成する現代における遍路習俗を、沿道地元住民の対応活動をベースにその広がりも含めて経験的に検証することを目的としたが、その緒についたばかりにすぎない。全長 1300 km前後にもなる遍路道の延長は長く、一度や二度の調査では、把握しきれないもどかしさがある。

したがって、何よりもまず、生成している遍路文化を、機会あるごとに一つ一つ拾い集めることを忍耐強く継続してゆく必要があるだろう。今回のヒアリング調査や外部観察等に付されながらも、本報告では、諸般の事情から割愛された諸事例も少なくない。別途、稿を改めて分析することになるだろう。

第 2 に、これらの諸事実をさらに「道の社会学」ないし「空間の社会学」の視点にもっとひきつけながら解説して行く必要がある。今回の報告では、必ずしもこの点において十分整理されて論じられたとは言いがたい。今後の課題の一つである。とりわけ、四国に架かった三つの大橋が遍路習俗に与える影響、さらには、四国内部に着々と建設されつつある高速道路網が持つ意味についても、実証的な調査とともにその解説作業が要請される。これらの道空間の変容により、遍路の動線や打ち方や宿泊パターンなどが急速に変化をしつつあるようである。高度成長期に顕著であった大型団体バス巡拝の復活機運が散見される。これに呼応して、沿道地元住民の対応にも自ずと変化が訪れることが予想されよう。そのことは、四国全土で均一ではなく、エリアに応じて濃淡のある効果を及ぼすに違いない。

第 3 に、接待習俗ばかりではなく、遍路道を媒介にした沿道地元住民によるより広範な多様な対応行動の検証が必要である。「接待概念」の拡大動向も見られる中、非接待行動にも着目する必要があるだろう。時には、負の相互作用等についても焦点を据えてみる必要もあるかもしれない。

第 4 に、遍路道を媒介にした接待関連の沿道地元住民や地域外関係者のみならず、より広範な遍路関連主体間の相互作用に目を向ける必要がある。宿泊業者、飲食関連業者、遍路用品関連業者はもとより、以前調査したバス・タクシー業者のその後の変化もあらためて射程にする必要がある。近年では、JR 他 の鉄道関連業者の動きも活性化している状況があるだけに、遍路道を媒介にしたこれらのエージェント全体の現代的構図を明らかにする必要があるだろう。

最後に、地元社会の対応行動として、現在、動きが具体的に活性化しつつある遍路道

の世界遺産登録運動についても、慎重に事態を把握することが肝要であることを付言しておきたい。この運動やその結果もたらされるであろう現代遍路文化に対する意味合いについて、空間の社会学ないし道の社会学の視点から、じっくりと問いかけてみることも、われわれに課せられた今後の課題の一つであろう。

【執筆分担】

第1部	1・2・3章	長田攻一（早稲田大学）
第2部	1章	長田攻一（早稲田大学）
	2章	田所承己（早稲田大学）
	3章	鈴木無二（早稲田大学）
		入江正勝（早稲田大学）
	4章	藤澤由和（早稲田大学）
		杉本昌昭（早稲田大学）
	5章	坂田正顕（早稲田大学）
	6章	坂田正顕（早稲田大学）

現代社会における四国遍路道を巡る経験と
社会・文化的装置の関係に関する研究

発行年月日 2000年8月
発行責任者 長田攻一
発行所 早稲田大学文学部社会学教室
道空間研究所
〒162-0052
東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学文学部 長田攻一研究室
Tel 03-3203-4141 内線 72-3210